

---

# 執事になる50の方法

竣慎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

執事になる50の方法

### 【Nコード】

N8934D

### 【作者名】

竣慎

### 【あらすじ】

櫻坂学院に通う青年。桂穂澄はダメな親父から借用書を渡されヤクザに売られる。その売られた先とは

## 第一話 借金取りに迫られて

一月一日、元旦。

一年の始まりであり、その始まりを祝う日でもある。

しかし当然のようにその『一年の始まりを祝えない者』もいる。

この話はその中の一人の話……

12月31日。二人の青年が歩いていた。

「だりいようー亮平。俺を担いで家まで送り届けてくれ。」

茶髪の髪を揺らしながら、青年は言葉通りダルそうに歩いている。

「それは良いけど、俺は穂澄より身長低いから多分足がつくと思うけど」

亮平と呼ばれている茶髪の青年は正論を言っつて青年をあしらう。

ダルそうに歩いていた青年は桂穂澄<sup>かつらほすみ</sup>。櫻坂学院に通う高校二年生。  
隣の亮平と呼ばれた青年は、杉崎亮平<sup>すぎさきりょうへい</sup>。同じ高校に通う二年。  
小学生の頃から仲がよく、良く言えば親友。悪く言えば腐れ縁と言  
う奴だ。

「穂澄は明日はどうするつもり？」

二週間ほど前から冬休みに入り、冬の定番クリスマスは終わり、今はもう大晦日の真っ最中である。

「特に用事はないからアルバイトでも探してると思う。」

「元旦にアルバイト募集している所なんてあるのかなあ……」

穂澄の家は父親しかいない。母親は三年ぐらい前に事故で死んだ。それが原因で穂澄は今バイトを探している。

詳しく話すと穂澄の実家は団子屋の老舗「陸奥庵」

人気がありちよくちよくあって雑誌にも取り上げられていたこともあった。しかし今は潰れてしまっている。

原因は父親にあった。

母親に溺愛していたからなのか母親が死んでから毎日のように居間で酒を飲んでパチンコ行って、寝ている。

ろくに働きもしない父親のせいで穂澄の家は大変な状態なのだ。

「あいつも自分の酒代ぐらいはあるみたいだから放っておいても良いんだけどな。」

「親父さんの団子。美味しいって評判だったのになあ。」

亮平が残念そうに言う。

こうして亮平と出会えたのも始めは親父の団子のおかげだったのだから。感謝していない事は無かった。

だからこうして親父のところに残っているのだと思う。

「じゃあ俺はこつちだから。ああ、それと何か困った時は言ってくれよ。これでも結構付き合い長いんだから。」

「ああ、また今度な。」

そう行つて穂澄は亮平と別れた・・・

「ただいま。」

家には明かりがついていた。

明かりがついている事は正直驚いた。

電気が止められているとかそう言うのではなく。

親父が家にいてもいなくても明かりはいつも点いていなかったからだ  
昼間から飲んで酔い潰れて点けていないか。  
パチンコなどで家にいないか。

どちらにしる家の明かりをいちいち点け無い人だったから。

「何かあつたのか・・・？」

呟いて居間の障子を開けると。

「「よう、お帰り。」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黒いスーツに顔に傷跡。

恐持ての顔に最後は片手に借借書。

「・・・・・・・・すみません。家を間違えました。」

なるべく静かに障子を閉め

「ちよつと待った。あんた桂穂澄だな。」

れなかつた。

借借取りだ。

「なんですか・・・？」

とり合えず冷静を装い返事をするが手はずで汗ばんでいた。

「まあとり合えず。これを読め。」

手渡されたのは便箋と借借書。

この際借借書は後回しにしてまずは便箋の中身を確認した。  
中には一通の手紙。

差出人は親父だった。

『穂澄へ、博打と酒で借借が出来た。返しとけ。父より。』

「・・・・・・・・・・はっ？」

「読んだか？」

「・・・・・・・・・・はあ」

気の抜けた返事をしてしまった。

まあそれは言いとして、後ろの借用書を見ると。

3000万円。

何かリアルすぎて怖い。

って言うか親父ってこんなワイルドだったっけ？借金できたから返しとけ。ふざけんな。

「じゃあ行こか。」

男二人に足と手を持たれる。

そして家の影に置いてあつた車に乗せられる。

「離せ！俺を何処に連れて行く。」

「大豪邸。」

ウソだー！

このまま密航便で離島の南国パラダイスか？

「離せ。いやだ。南国パラダイスはいやだ。」

「うるさい…」

「ブツ!？」

隣で俺を抑えていた男に顔面を殴られる。穂澄は意識が朦朧とし、そして意識はそこで途絶えた。



## 第一話 借金取りに迫られて（後書き）

タイトルはなんかゴロがいいのでつけました。

一応五十話まで続けようと思いますがあまり期待はしないでください。。。

## 第二話 契約書を渡されて

「きてください。」

声が聞こえる。

その声は段々大きくなり近づいてくる。  
そして

「起きてください!」

「うわあっ!」

その声が耳元で響いて俺は飛び起きた。

「ここは何処だ?」

まだ活動し切れていない頭をフル回転させ考える。

確か帰ってきたらヤクザが家にいて、3000万円の借入書を渡されて。

離島の南国パラダイスヘレッツゴー

それで暴れた俺は殴られて、今ここに。

「ここは離島の南国か!」

「いえ、ここは国内ですよ。」

「えっ？」

答えが返ってくるとは思いもしなかったのでびっくりした。そしてその答えがした方を向くと。

「お目覚めですか？」

執事とヤクザがいた。

流石に執事とヤクザのツーショットは違和感がある。

ヤクザは先ほど会った方の片割れ。

まあそれは置いて、気になるのは執事だ。黒髪の執事。執事服を着ていて満面の笑みをこちらに向けている。

年は穂澄と余り大差は無さそうであった。

しかし良く考えると今はそれ所ではなかった。

「待ってくれ。俺は3000万も出せるほど金は持っていないし、返す技術も持ち合わせていない。だから元の場所に戻してくれ。」

「あーそれは残念だったなあ。おまえはもう売却済みや。がんばって3000万返してせや。」

必死の弁解も虚しく穂澄は売却済みだったらしい。

その時穂澄の頭に一つの名案が浮かんだ。

「決めた。逃げるぞ！」

執事さんとヤクザに背を向けると脱兎のごとく逃げ出した。後ろで声が聞こえているがそんな事は気にしない。

俺は逃げるんだ。親父の借金の肩代わりで南国パラダイスへ行くのはいやだ。

行きよいよくドアノブを握りしめ回す・・・が、

「桂穂澄。ここは内側から鍵をかける部屋やから俺が持つてる鍵を使わないと出れんぞ。」

そう言つてヤクザは穂澄に向かつて鍵を見せ付ける。

穂澄は落胆した。ヤクザ相手に借金をして、逃亡をしようとするが失敗。このままで南国ではなくもっとヤバイ所に連れて行かれるよくな気がした。

「それでな。事情が変わつてなおまえの買取主は

「いやだ。せめて南国にして。密輸は嫌だ！」

「・・・さつきから何言つてるか知らんが、まあええ、買い取り主は櫻坂の所の奴や。」

「・・・」

今なんと言つた？櫻坂のところの奴。

穂澄が知っている範囲では櫻坂と言つのは電子部品の会社で品質は世界トップクラスの会社。何よりも自分が通っている学院が櫻坂が経営しているのである。

落ち着いてよく見てみると穂澄たちがいる場所は客間で穂澄の家が

丸ごと入るような広さであった。  
天井は見上げるほどになっており上には大きなシャンデリアが飾られている。

「それじゃあな、仕事の内容はこいつから聞け。」

ヤクザはそう言つと出て行ってしまった。

残されたのは穂澄と執事。

「それでは仕事の内容を説明します。」

「あ、はい。」

執事が改まってこちらを向くので穂澄も反射的に執事の方を向いてしまう。

「私は辻灯真つじとうまと言います。こちらでは櫻坂のお嬢様方の執事をさせていただきます。」「

「はあ。」

話が急すぎて上手く納得できない。

「この度新しく執事を雇う事になりました、そこに」

「俺が来たってことか？」

灯真がニッコリと笑う。どうやら正解らしい。

その後櫻坂と契約する為の書類。執事服の寸法あわせなどを終

えた後。

「後は、穂澄くんの家は借金の形として取られてしまったのでここに住んでください。部屋場所は後ほど教えますので。」

鍵を渡され。代わりに書類を手渡す。

書類には借金の肩代わりをする代わりに櫻坂家で執事として働くこと。

櫻坂家の人には決して危害を加えることが無いよう。

雇い主はお嬢様、様と言うこと（注、男の場合）

雇い主を最優先に考える事。などが書かれていて、穂澄は最後の空欄にサインをした。

「原則として契約書に書かれている事は絶対です。逆に言えば契約書に違反しなければクビにはなりませんので覚えていてください。」

机の上の書類をまとめると灯真は立ち上がり『少々お待ちください』とだけ言い残して部屋を出て行った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

辺りは静まり返っている。窓が少し開いているが車の音もしない。

「俺はこれからどうなるんだ？」

借金のことを考えると何かへこんでしまう。南国へは行かない事に

なつたらしいが何故見ず知らずの男の借金を櫻坂が支払ったのか？  
その事で裏が無いとは考えられなかった。

「お待たせしました。」

灯真が出て行ったときのままの笑顔で戻ってきた。

この笑顔の裏にも何が潜んでいるのか……

そんなことを考えると灯真の笑顔が仮面に見えてきたのは穂澄だけ  
であろうか？

そんなことを考えていると灯真の後ろから人が出てくる。

「あなたが新しい執事さん？」

「……微妙」

瓜二つの少女。背は穂澄の頭三分ぐらい低く、二人とも黒い髪を  
下ろしている。

年齢的にはずっと下のように見えた。

「雇い主……？」

目を灯真に向けると灯真は頷く。

この二人が雇い主とわかり穂澄が発した第一声は、

「中学生？」

「いえ、今は高校一年生です。」

「・・・・・・・・15歳。」

二人が間髪いれずに答える。どうやらよく言われるらしい。

しかし改めてこの少女達が雇い主であると少し拍子抜けである。

雇い主といえは何か威圧感がある中年男性とかを想像していたので少し気が緩んだのか。

穂澄はソファ―に再度座り込む。

「気分が悪いのですか？」

間髪いれずに聞く灯真の姿はまさに執事っぽかった。

って言うか何の知識も持たない高校生が執事になれるのか？と言う方が疑問だ。

「では、紹介します。我々の雇い主である櫻坂尊さくらざか とうお嬢様お嬢様と櫻坂栞さくらざか しおりお嬢様です。」

丁寧に話す方が尊でその言葉に付け足して話していたのが柔らしい。見た目的にはどうやって区別するのかがわからない。

「どちらかわからなくなった場合は顔を見ていただければわかります。」

灯真にそう言われ二人の顔を覗き込む。

二人に近づくとつれて柑橘系の匂いが風に乗って鼻をくすぐる……  
ってそんな事はどうでも良い。

灯真の言った通り顔を見比べると

「泣き黒子の違いか？」



良く見ると尊の右目の下にだけ小さな黒子があった。

「それを見分けてもらえば結構ですので、それでは紹介も終わりましたので今日はお部屋で休んでください。他の人は明日にでも紹介しますので。」

灯真からもう一つの鍵を渡される。鍵にはお嬢様たちのお部屋と書かれていた。

多分緊急時や急な予定などで急いでる時に使うのである。

「穂澄さんの部屋はこの部屋の真上になりますのでそれでは、

ああ、それと明日からは同僚という事になりますので、私の事は呼び捨てで構いませんのでそれでは。」

灯真は二人のお嬢様を連れて出て行った。

その後とり合えず言われた通りに部屋に行くと。

「デカツ！広っ！！」

入った部屋は先ほどの応接室より広く、風呂やキッチンなどもついており、ここで暮らせるんじゃないのかというほどのものであった。しかし一つ一つ見ていく力はもはや穂澄には残されておらず制服のネクタイを緩めさつさと布団に倒れこみ  
そこで意識は途絶えた。



## 第二話 契約書を渡されて（後書き）

どうも竣慎です。

更新遅れましたすみません。

春休みに入ってから兵庫に行っていて遅れました。すみません（私は静岡に住んでいます。）

出来るだけ早く更新して行きますので見てください。。。

### 第三話 誘惑されて

「穂澄くん。朝です。」

肩を揺すられ眼を開ける穂澄。目の前には機能と同じ笑顔の灯真がいた。

「そうか、俺は執事になったのか……」

上半身を起こして額に手をあてて溜息をつく。

「そんな顔をお嬢様たちには向けないようにしてくださいね。」

灯真はそう言い穂澄に服を渡す。

黒いスーツにも似た服。執事服である。灯真とは異なり少し軽装備であつた。

その事を聞いて見ると

「穂澄くんには外などでのお世話をしてもらいますので軽装備になっています。」

灯真に言われた通りに着替えるとサイズも合っていて良かった。

「私は尊お嬢様の方を起こしてきますので穂澄くんは柔お嬢様を頼みます。これがこの家の配置です。」

渡された紙には一階から三階の部屋の配置が書いてあった。栞の部屋は穂澄の部屋から見て二つ隣にあった。穂澄は跳ねている髪を整えて、部屋を出る。

改めてみるとさすが櫻坂家と言うか、廊下の天井の高さや装飾品は一流ホテルとなんら代わりが無い。廊下を歩いているだけで自分が金持ちになった気分になる。

栞の部屋の前に来た穂澄はまず大きく深呼吸をしてから部屋にノックをする。

「穂澄です。栞お嬢様、起きてください。」

なるべく執事っぽく言う。しかし返事が無い。

「入って良いのかな・・・？」

少し躊躇いもしたが部屋の前で立ち尽くして射ては仕事にならない。それに灯真に任された最初の仕事という事もあり、失敗はなるべく避けたかった穂澄はもう一度深呼吸して部屋のドアを開けた。

部屋の中はいかにも女子高校生という感じの部屋だった。部屋の作りは穂澄の所と大差はないが壁紙が薄いピンク色になっていて同色系のカーテンまである。

その部屋の奥にカーテンが着いている洋風のベッドがあった。穂澄は近づきながら目を凝らしてみると静かな寝息を立てた栞が寝ていた。

「栞お嬢様、朝です。」

ベッドに着けてあったカーテンを軽く引いて顔を覗かせる。

「お嬢様、起きてください。」

しかし栞は目を覚まそうとはしない。

穂澄はカーテンの内側に入ると栞の肩を持ち軽く揺する。

「お嬢様、起きてください!」

「うつ……ん……」

今度は強めに起こそうとする。栞は眉を少し歪め唸る。  
しかしそのまま寝息を立ててしまう。

「何で起きないんだろう?ここまで来ると逆にこつちが困るぞ。」

穂澄は焦れたのか最終手段を使う。

栞が強握っている布団を剥ぎ取り、栞の上半身だけ起こす。

「朝ですよ、お嬢様。」

「ん………うん………」

無理矢理起こされた事で何が起きたか良く理解しないまま栞が起きた。  
た。

栞は顔を動かさず目だけを動かして辺りを見回す。

そうしていたら穂澄と目が合った。

「おはようございます。」

「！…………おはよう穂澄。」

少し驚いた様子だったが直ぐに挨拶を返す栞。  
ベッドに足を下ろし立ち上がる栞。

「……………穂澄。」

栞がまだ寝むそうな顔をしながら穂澄を見る。

「……………服、取って。」

栞が指を指した先には壁に掛けられた洋服があった。  
シンプルなデザインのワンピース。今は正月だが幸い今日は暖かいのでワンピース一枚でも十分過ごせるであろう。

穂澄は言われた通りに服を取ると直ぐに栞に手渡す。

「……………ありがとう、穂澄。」

栞はそう言つとパジャマの前ボタンを外し始める。

「えっ！？お嬢様。待ってください！」

もちろん穂澄は全力で止める。  
いきなりの事で少し思考が止まっていたが直ぐにフル回転させ、栞の手を掴む。

しかしそのせいで手で押さえられていたパジャマはスルリと肌を移動し、白い肌が露出する。

「！！！！！！す、すみません！????？」

顔を真っ赤に染め後ろを向く穂澄。  
忘れようとするのだが頭から白い肌が離れようとしな

穂澄は忘れようと頭をかいていると腰に柔らかい物が当たっているのに気付く。

後ろを振り向くと栞が穂澄の腰に手を回して抱きついている。

「お、おおお嬢様どうしたのですか!??」

思いつきり声が裏返る。

白い肌どころか今すぐにも押し倒しそうな勢いである。

栞は脇の隙間から顔を出して穂澄を見る。

「……………欲情した?」

はめられた。

栞は悪戯な笑みを浮べて腰から手を離すと穂澄の前に出る。  
いつの間にか着替えている栞はパジャマを穂澄に渡すと、

「……………尊たちが待ってる、行こ。」

二人は尊たちが待っている食堂に向かった。

食堂では座って待っている尊と隣に立っている灯真がいた。

尊は栞と同じくワンピースを着ているは水色。尊のイメージと



合っていた。

「栞お嬢様。こちらにお座りください」

尊の隣にいた灯真はいつの間にか栞の隣に居りテーブルの椅子を引いて栞を待つていた。

栞も自然に灯真が引いた椅子に座る。

「あの、穂澄さん。」

何をすればわからず立っていた穂澄に尊が声を掛ける。

補澄は尊を見ると尊は悪戯な笑みを浮べて穂澄を見ていた。その様子は流石姉妹と言うか、栞に淒く似ていた。

「栞に何か言われませんでしたか。」

「えっ？」

変な事言われたと言うかされたと言うのかな？あれは

「栞は新しい執事さんを……あの、何て言うか……誘惑して誑かすんですよ。それで無いとは思いますが穂澄さんが栞に何かされてないかと思ひまして。」

やられましたとも、腰に手を回されてギュッと抱きしめられました！

そう言おうと思ったが尊の心配そうな顔を見てしまった穂澄はそう言える訳でもなく。

心の中でそう叫び、口では

「いえ、そのような事は」

「そうですか。すみませんでした穂澄さん。」

ほっとした様な顔をする尊。その隣で含んだ笑みを見せる栞。

何か良いよなこつ言つところ。

ここ数年荒れた家しか見ていなかった穂澄にはこの風景はとても良かった事であろう……

その後二人が食べ終えた後、穂澄は灯真と食事をしている時。

「後で庭に行つて下さい。」

「えっ？何故ですか？」

「会つておかないといけない人がいるので、それでは」

灯真は悪戯な笑みを浮かべながら行つてしまった……



第三話 誘惑されて（後書き）

遅れてすみません。

春休み終わったのに宿題わんさかです。

今後も少し遅れるかもしれませぬ。。。

#### 第四話 間違えて

穂澄は言われた通り庭に出て来た。庭の木は綺麗に整えられており、芸術といっても過言ではなかった。

「言われた通りに来たけど、会わないといけない人って誰だ？」

穂澄は灯真に言われてきたのだが誰に会わせるとは言っていないかったのでとり合えず穂澄は庭をぶらつていた。  
その時、

「あー！ダメダメそこに入っちゃ！」

急に後ろから声を掛けられびっくりする穂澄。足元を見ると、後一步踏み出していたら花が潰れていたと言う位置に居た。

穂澄は恐る恐る後ろを振り向くと、

「危ないなあ、せつかく徹夜して作ったのに後一步で台無しになるところだよ。」

後ろには人が立っていた。小柄なの割には存在感のある雰囲気。肩甲骨の辺りまで真っ直ぐ伸ばした黒髪を真っ白なタオルで巻いている姿。そして小柄な身体には少し似合わない大きなポシエット。

「す、すみません!？」

穂澄は慌ててその場から引く。

「あの、『作った』と言うのはもしかして庭師の方ですか？」

「ん？ああ、そうか、はいはい。君がねえ。」

自称庭師の人は何故か一人で納得してしまった。  
完全に穂澄は置いてきぼりである。

「僕の名前は苑見真琴<sup>そのみまこと</sup>。26歳で今はここで庭師をやらせて頂いているよ。穂澄くん。」

「えっ！？なんで俺の名前を？」

自己紹介はまだしていないのに相手は自分のことを知っているのだ。  
戸惑わない方がおかしい。

穂澄が戸惑っていると、真琴がそれに気付いたらしいのか

「あれっ？灯真に聞いてない？僕のこと」

「はい、聞いてません。」

ここは正直に答えた方が上策であろうとそのままの言葉で返す。

真琴は少し肩を落としそうなのか・・・と呟いている。さっきまでは凄く元気だったのが嘘のような変わりようである。

真琴は頭の抱えて何かを考え始めた。

「あ・・・・・・・・・・」

穂澄が心配になり声を掛けるが返事はない。自分の世界に入り込んでいるようである。

真琴はそのまま覚束ない足取りで辺りを歩きながら考え事をしてい

る。

「あの一！」

「うえ？ああ、ごめんね。考え事していると自分の世界に入っちゃうもんで。灯真から言われなかったかな？『会って欲しい人がいる』って」

その言葉でわかった。灯真が言っていた会わせたい人とは目の前にいる真琴の事だと言う事が。

それなら今までの事は合点がいく、灯真が会わせようとしているのなら前もって穂澄の特徴を伝えておくはずであったから。

「そうだったんですか。じゃあ改めて俺は桂穂澄です。これからもよろしくお願いしますね。」

穂澄が握手をしようと手を差し伸べようとする。

「あーそこは土が固くて躓きやす」

「うわっ！？」

真琴の忠告も虚しく穂澄は出っ張っている土に躓き倒れた。

「いててて、すみません。せつかく忠告してもらったのに。」

「ああ、うん、別にいいけど重いから退いてくれないかな？」

重い？ 退く？

何を言っているのか解らず瞑っていた目を開けると、下には真琴がいて、穂澄が押し倒すような状態になっていた。

「ああ、すみま」

「「ああー！！！！」」

謝ろつとした穂澄だったが横から来た声に言葉が消される。

ふと横を見ると、そこには雇い主である。栞と尊が立っていた。二人とも素っ頓狂な顔をしながらこちらを見ている。

もちろん穂澄はその驚いている理由はわからず困惑していた。

「あの、どうしましたか？」

「何言ってるの！？穂澄さん。真琴さんを押し倒して！」

「……………無理矢理に。」

二人が凄い剣幕でこちらに近づいてくる。

「お、押し倒すつて真琴さんは」

「女の人だよ。」

「……………不純異性交遊」

……………今なんと言った？真琴さんが女？いやいやいやだってほらあれじゃん、……………えっ？だって今こんな状態だけど真



琴さん何にも嫌そうな顔とかしてないし、そ、それに胸だつて平らそんなことを考えていると自分の右手に柔らかい感覚があることに気付く。

その事に気付いた穂澄は見てはいけないとは思つが恐る恐る視線を下げる。

真琴の胸に手をついていた。しかも柔らかいと言つ事は……

「穂澄くん苦しい苦しい。手を退けて」

「う、うわああああああああああつ！！！！??」

思考が元に戻り。穂澄は後ずさりする。

「すみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみませんすみません！！！！」

何回言つたであろう。暇な人は数えてくれ。

「穂澄さんのH!!」

「……庭でキ　クリ」

「キ　クリとか言っちゃダメです！」

その後、二人に事情を説明して、誤解を解くまでに一時間以上かかった。怒っていた二人を説得するまでにクビにならなかったのが不思議であった。

「それでは再度紹介します。苑見真琴さん。女性で庭師や美容師など、はさみを使う仕事なら何でも出来る人ですから今度穂澄くんも何か頼んでみてはいかがですか？」

紹介されたのはいいがその日、穂澄は真琴の顔を見ることが出来なかった……

#### 第四話 間違えて（後書き）

つ、つかれた。投稿がんばります。。。

## 第五話 学校にて

12月31日に親父に借金を押し付けられて一週間が過ぎた。櫻坂家の執事となった穂澄。最初は戸惑っていたのだが少しずつではあるが慣れてきた様子で一週間を送っていた。

「穂澄くん今日は学校ですので制服に着替えて置いて下さいね。」

穂澄の前に出てきたのは穂澄とは形の違う執事服を着た青年。

「えっ！？だけど俺は授業料払ってないから。」

「学院は櫻坂が経営していますので一人ぐらいなら授業料は要りませんよ。それにお嬢様方の警護をしていただく方が必要なのです。」

その事を聞くと穂澄は急いで自室に戻る。理由は学院に行くとは考えてはいなかったため朝は執事服に着替えていた。しかし学院に良くと言う事は制服に着替えなければいけない。

自室に戻った穂澄はクローゼットを開けて制服を取り出し、同時に執事服を脱ぎだす。

「すみません。遅れました。」

慌てて玄関に着く穂澄。すでに栞と尊は玄関で待っている状態だったので何とも気まずい。

目の前に立っているのが穂澄の雇い主。櫻坂栞と櫻坂尊だ。

「穂澄さん遅いよ。」

「……………遅い。」

二人同時に言われるとダメージも二倍で結構効く。

穂澄は腰を低くして何度も謝った。

「お嬢様方そろそろ行かなければ時間が……………」

時計を見ると時刻は8時12分。曜日にもよるが遅刻のラインは8時30分。確かにここから櫻坂学院に行くには少し早くしなければいけない。

話を打ち切った二人は、灯真に『行って来ます』と言い、灯真もそれに『いつてらっしゃきませ』と答えて屋敷を出た。

お嬢様たちの登校手段は徒歩である。金持ちだと、何かこう、ベント&レッドカーペット！みたいな感じで登校するというイメージが強いが（現に前までそうだったらしい）何故二人は徒歩通なのか、その理由は簡単、

「運動になるからかな？」

「……………健康第一。」

だそうだ。

普段は家にいる二人だ、部活も入っておらず運動には程遠い生活をしているので少しでもと言う事で、徒歩通に切り替えたのだ。

早足で登校したかいあって、学院が見えてきた。時計を見ると8時20分。これならもう少しゆっくりでも良かったかもしれない。

最後の曲がり角を曲がり校門をくぐる。

そこで穂澄は異変に気がついた。

視線を感じる。

「お嬢様方、私達誰かに見られていませんか？」

二人の耳元で聞いてみるが二人は顔に？マークを浮かべ小首をかしげている。どうやら二人には実感が無いらしい。

しかし穂澄にはこの視線が何かすぐ解った。後ろを見れば男子が四五人ついて来る。校舎を見れば窓から溢れんばかりの男子が窓から身を乗り出している。

この視線は殺気だ。

アイツ誰だ？ 何で櫻坂姉妹と登校してるんだ？ 近いぞ

！離れろよ。

男子生徒の嫉妬と疑問を穂澄は受けていた。

こんな調子でよく気がつかないな。お嬢様方、鈍感なのか大物なのか、良くわからない。

苦笑いを浮べるがそんな事でこの状況を止められたら借金なんてすぐに返せる。

もしこの状況で二人がいなければまわりにいる男子三十人弱が襲い掛かってきてもおかしくない気もする。

「ほつすみい」

その聞き覚えのある声が耳に届き後ろを向くと、男子生徒が飛び込んできた。

しかし飛び込んできた生徒を慣れた手つきで動きを読み頭を鷲掴みする。

「いでででででっ!? やめろ! わかったから、もう辞めるから!」

目の前に来た男子生徒。スラッとした体型で穂澄より少し背が高い。金髪の髪が横からヒョコヒョコと出ている。

その貫禄は校内で人気投票すれば上位にランクインされるほどであった。

「あの、穂澄さん。その方はどちら様でしょうか?」

「………スケバン?」

スケバンは女です。っーか古っ!?

心の中でそう突っ込んだ穂澄は二人のほうに向き直り男子生徒を紹介する。

「こいつは」

「あれっ? 櫻坂姉妹じゃん。ラッキー 俺は遠藤<sup>えんどうけい</sup>。穂澄と同じ二年生よろしくね。あっ! 携帯持つてる? メアド交換しようよ。」

穂澄が紹介しようとしたが蛭は穂澄を無視してどんどん突っ走ってしまっ。

「辞める恥ずかしい！」

と言つかまわりの殺気がさつきより数段アップしたような気がする。ああ、今のはシヤレじゃないから気にしないでくれ。

うわっ！？あいつ櫻坂姉妹のメアド聞いている。なれなれしくすんなよな。マジ消えてくれ！

その声が蛭にも届いたのか。

「ああ、ちよつと待ってて。」

驚いて動かない二人に待ったをかけ、後ろを向く。途端蛭の目つきが変わる。

「見てんじゃねえよ。殺すぞ・・・」

二人には聞こえないようにしかし周りの男子にははっきりと聞こえるように言う。

言い忘れていたが蛭は学院始まって以来の不良、成績と容姿は良いのだが可愛い女子に目がないことと気に入らない男子には凄く怖い所が玉に傷だ。

周りの男子が一斉に引く。その事を確認した蛭はまた姉妹の方へ振り向き。

「いやーごめんごめん。ハエがうるさかったもんで。」

再びニヤケ顔に戻る蛭。

このまま行ったら二人は確実に遅刻であろう。

執事兼、外ではボディガードを任された使命感と言う物がいつもは



消極的な穂澄を動かした。

二人の手を握ると、

「悪い、蛍。先に行ってるぞー」

一目散に走って逃げた。後ろで蛍の音がするが、今は構っていられない。

全速力で走って二人を教室に入れる。とその時始業ベルが鳴る。

「セーフ」

荒い息を整えながら呟く穂澄。

「ありがとう、穂澄さん。」

「………褒めて使わそう。」

しかしお嬢様たちの御礼を聞けただけでも、儲け物であろう。

もちろんその後穂澄が担任に遅刻の事で怒られたのは言うまでもなかった………

時間はあっという間に過ぎて今は昼休み。各々机を合わすなり購買に駆け込むなりしている登校以上に忙しい時間であろう。

穂澄はと言うと灯真から受け取った手帳を見ていた。

中には学校での行動が細かく記されている。

「えつと・・・昼休みは」

昼休み　　お嬢様方にはお弁当を持たせてありますので穂澄君は二人の教室に迎えに行ってください。

穂澄は手帳に書いてある通りに動き出した。まず出る前に灯真から貰った弁当を持ち、一年生の教室へ向かう。

「待てええええええええええええいっ！！！！！」

前に大きな人が立ちふさがる。あまりの怒声に危うく弁当をひっくり返しそうになった。

目の前には二メートル以上ある巨漢に額に八チマキなど、いかにも昔のアニメの番長っぽい人が出て来た。

良く見ると後ろに同じような服を来た子分の様な人もいる。

「お主、櫻坂姉妹とどういう関係なんだ！！！」

自称番長は鼻息を荒げ聞いてくる。

「あの・・・失礼ですが二年ですが？」

「当たり前だろう！！！！！！！」

すみません、見た目は三十代です。

こんなおつかない人には声には出しては言えないが心の中でははっきりと言っちゃった。

「俺はただの知り合いですけど。」

「それならいい！！だがこれから櫻坂姉妹と馴れ馴れしくしたならば我等櫻坂姉妹ファンクラブが黙ってはいないぞおおおおおおおおお！！！」

番長はのっそのっそと巨漢を揺らしながら消えていった。

ファンクラブって公認ではないんだな・・・・・・・・多分。

穂澄はそのまま弁当を持って一年の教室に行った・・・・・・・・

## 第五話 学校にて（後書き）

受験で出席日数が足りないと言われました。ヤバイので投稿が遅れました。すみません。。。

注）別にひきこもりとか保健室登校とかではありません。。。

## 第六話 好きだと言われて

次の日。穂澄は弁当を抱えて走っていた。

理由は二つ、とても単純だ。一つは灯真の指示で昼は二人と一緒に食べるように言われていたから。

そしてもう一つは……追われているから

その二年。止まれ。

櫻坂姉妹の平穏な日常を脅かす

物は断じて許さん。

おおお、俺の栞ちゃんに近づくなあああ

あああああ！？

変な奴もいる気がするが気に掛けている余裕はない。つーか男子生徒一人追いかけるだけの為にだつて後ろを振り向くと額に血管浮かべて走ってくる男子生徒が十人ほどいるんだもん っていうか男子生徒1人追うだけの為に拡声器使うな！よく先生に見つからないな  
お前ら。

とり合えず弁当を抱えて全力疾走をしていた。流石に後ろの奴らも二人の前に出れば大人しくなるだろう。予測ではあと二十メートルほどで二人の教室に着く。しかしあの狂気に満ちた男どもを振り切る力は穂澄にはもう残っていないであろう。

だが後ろを振り向いたら殺られるので全力疾走をする。

昨日お嬢様達ともお昼を誰かに目撃されていたらしく、今はこの有様らしい。

階段を二段飛ばしで降りて一年のクラスがある教室の廊下に差し掛かる。

よし、後、10

7

3

男達の手が穂澄の背中をかすった瞬間。穂澄の足が教室に入る。

「あっ穂澄さん。待ってました。」

「……………どうした？」

二人の声が聞こえると制服を掴んでいる手が離される。しかし男達は帰り際に穂澄の耳元でしたうちをし行ったのには少し驚いた。つーか地味な嫌がらせだなーおい。

二人が駆け寄って来る。

「穂澄さん。さっき教えてもらったんですけど。屋上には今誰もいないらしいです。行きましょう。」

「……………屋上で女二人と男一人（野獣）」

「栞お嬢様、変な付け加えしないでください。お願いしますから。」

栞は少しブーブー言っていたが直ぐに取り消してくれたようだ。だけれど栞お嬢様からみた俺ってどう見えているんだろう？移動する途中もそんなことを考えながら二人についていった。

屋上は尊が言っていた通り誰もいなかった。一月にしては暖かい日差しで確かにここは絶好のスポットかもしれない。

「そつだ。私シート持ってきますね。」

「あつ！尊お嬢様。私が行きますよ。」

階段を再度下りて教室に戻ろうとする尊を穂澄が止める。

しかし尊は私の鞆の中にあるのでと言い、その代わり気遣ってくれてありがとうと言う満面の笑みを貰った。

そして尊は足早に階段を下りて言った。

「……………穂澄。座つて。」

「えっ！？ああ、はい。」

栞はコンクリートむき出しの地面に座っていたがそんな事は気にしていない様子である。穂澄は言われた通りに栞の隣に座る。

何か気まずい。

そう思っていると栞から声を掛けられる。

「……………二人つきりだね。」

「ええ、まあ。」

今少し思ったのだが今の言葉栞と会ってから一番愛想が良かったよ  
うな気がする。今ので愛想が言いなんて言ったら今まではなんだっ  
たんだ見たいな事にもなるが、まあ今はその事実を密かに喜ぼう。

「……………ねえ穂澄。」

考え事をしていて反応が遅れる。慌てて栞を見ると。

「?・・・・・・・・さつきより近くないですか。」

何か二人の距離が縮まったような気がしていた。しかし栞は気のせいと言いつ張る。

まあ少し距離が近づいたぐらいで同って事も無いが。

「いやーそれにしても今日は暖かいですね。」

「・・・・・・・・うん、そうだね。」

一回空を見た後もう一度栞の方へ向く。

「・・・・・・・・いや、近くなってますよ。」

栞は肩をビクツと跳ねさせて瞳をキョロキョロさせる。

いやだって、ホントに近いよ、さつきまで一メートルぐらいの距離が今は栞が頭を傾ければ穂澄の肩に乗るぐらいの近さだもん。

栞はこれでも近づいていないと言いきれると思っていたのだろうか？

「・・・・・・・・穂澄つてさ。」

栞は慌てた様子で話しかける。要点を逸らそうと必死なのであろう。しかし逆に不自然です。

「はい、なんでしょう。」

だがそのことで勢い良く顔を覗き込まれてドキツとする穂澄。しかしそれでも執事として平常心を装う。

「私の事好きなのかな?」

・・・・・・・・これは天文学的な質問なのか。それとも何かこ  
う幼稚園の先生みたいな感じの好きなのか、純粹に女性として好き



なのかが解らない。だけど今の言葉で。間まを置かないで喋った栞お嬢様を始めてみたような気がする。

迷っている穂澄にさらに栞が追い討ちを掛ける。

「私は……好きだよ。もちろん異性として。」

栞は穂澄の肩に寄りかかり上目使いで聞いてくる。

その顔は反則ですお嬢様。

なるべく意識しないようにしてはいたが栞と尊はカワイイ。もうメツサカワイイ、ゴツサカワイイ。穂澄も何回欲情しそうになったかもわからない。

しかし相手は雇い主。穂澄は高鳴る心臓の音を抑え集中した。

落ち着け、落ち着くんだ。穂澄。ほら、あれだ、あれだよ最初の朝にやられたジョークだよ。やだなーもう栞お嬢様そう言うの好きそうだからなあH A H A H A H A H A H A。いや、マジでそうだよ。絶対罠だよ。何か……えーと、そう！執事適性検査とか、そんな感じでドッキリ！みたいな看板持った人がどこかに隠れているんだよ、多分。だって俺の特技と言ったら運動と勉強と団子作り……最後のはおかしい気もするが三拍子揃っちゃってるよー！！どうしよう、何て答えればいいんだ！????

そんなこんなで慌てている穂澄に栞は

「そんなに信じられない？それなら。」

チユツ

穂澄の思考が停止する。栞は穂澄の顔に近づき頬にキスをしたのだ。

この行動で穂澄の理性は吹っ飛んだ。

「栞お嬢様、私はお嬢様が」

「穂澄さん。持つてきましたよ。」

二人の方が大きく跳ねる。穂澄の声は尊によりかき消され二人は背中合わせなつて尊を出迎えた。

そしてその後穂澄が栞の顔を全く見れなかったのは言つまでもない。

「「ただいま」」

学院が終わり帰宅した三人葉それぞれの部屋に散っていた。穂澄は灯真に少し休憩してきても良いですよと言われたので素直に休憩を取っていた。

「ああ、穂澄君お帰りなさい。」

そのとき目の前に現れたのは泥まみれの作業服を着た真琴であった。穂澄にはその真琴の姿は天使にも見えただろう。

「ま、真琴さん」

「わわっ！？どうしたの」

穂澄は真琴に今日学校であった事を話した。

「栞ちゃんが普通に喋って好きですって言われたの？」

穂澄は頷く。

「いつもみたいに間を置かないで一言で？」

穂澄は再度頷く。

真琴は穂澄の話聞いた後黙り込んでしまった。

その顔は真剣そのものである。そしてやっと重い口を開いたかと思うと。

「穂澄君。栞ちゃんが普通に喋る時は嘘はないよ。」

「……えっ？」

「今からシャワー浴びてきな。夜のためにもね。」

あいた口が塞がらないと言つ言葉があるが自分は今多分その状態である。

「な、なななんですかあ？」

「栞ちゃんは一度決めた事は最後までやる。どんな事をしてでもね。だから多分夜、部屋に呼び出されて何か言われると思うよ。僕は穂澄君がそれに耐えられるとは思わないからね。」

真琴の頭の上にピンク色をした想像が立ち込める。いや妄想と言つたほうがしっくり来るのかな？

「あわああああっ！？だめです、真琴さん。自主規制です！..！」

「ああ、ごめんごめん。」

妄想に浸っていた真琴を連れ戻す。

「と、とにかく俺はそんなピンクな事はしません！」

穂澄はその場から走って逃げていった。

第六話 好きだと言われて（後書き）

来週の水曜日から修学旅行。場所はまさに定番。奈良、京都。  
出来れば北に行きたかったんだけどなあ。。。

## 第七話 見破られて

次の日の学校。結局琴にはあの後部屋には呼ばれず、安心したのやら、悲しいのやら、まあとにかく昨日の夜は食事の後、特にしてもらう事もないと、灯真に言われ、真琴に相談しようとしたが庭の手入れに集中していても話しかけられる様子ではなかったので辞めた。

結局自分の部屋で時間を過ごしていたらそのまま寝てしまつて気がついたら朝と言う状態だったのだ。

そして今に至る。

今と言うのは二人のお嬢様に挟まれながら登校と、執事になつてから一番大変な仕事をしている途中であつた。

一日しか経っていないのだが穂澄の事は学院中に知れ渡り、今や男子の中では穂澄は憎むべき相手となっている。と言う訳で2人のお嬢様の間に挟まれている穂澄は今三十人ほどの殺気を感じ取りとても居心地が悪そうであつた。

「ほつすみい〜」

後ろから声が聞き覚えがある声がする。

ただどこのパターン前にも無かつたっけ？ああ、あれかなデジャヴつてやつかな？

穂澄はデジャヴを感じながらも慣れた手つきでその声の主の頭を鷲掴みにする。

「いでででででっ！？あれっ？前にもこんな事無かつたっけ！？」

蛭も気付いていたのか、掴まれている頭をブンブン振り回して穂澄の手を振り解く。

「あつ！遠藤さんおはようございます。」

「……………<sup>ほたる</sup>蛭くんおはよう」

2人も蛭の事に気がついたのか挨拶をする。

「おつ。今日も可愛いね。尊ちゃん。梨ちゃん。ああ、後俺は『ほたる』じゃなくて『けい』だから間違えないでね。」

ちなみに蛭の名前を間違えたのが男子であった場合&気に入らない男子であった場合と言つ悪条件が揃つと次にその男子を見たときは血まみれで倒れているだろうな。

蛭は女に名前を間違えられてもあまり怒らないが、男子の場合は違う。相手をボコボコにしてしまう。

穂澄の前ではヘナヘナしているが切れると教師でも止められない。その度に何度穂澄が止めた事か……………

「ダメですか？」

「……………ほたるの方が可愛い。」

2人にそう言われた蛭は穂澄の方へ向いて。

「穂澄。俺のあだ名今日から『ほたる』になったから。ヨロシク！」

それでいいのか蛭。そして今までほたると言っただけで散って行った男子達よかわいそうに……………

その時予鈴が鳴る。また蛭のせいで遅刻ギリギリだ。

「二人とも行きますよ。じゃあ蛭。またあとでな。」

そのまま二人の手を取り教室へ走っていった。

場所は穂澄の教室。何でも担任に來客らしく、一時限目は自習になったらしい。

穂澄は2人を一年の階まで送っていったので今日も遅刻であったが何とか命拾いをした。と思いきや。

「おい、桂。遅刻だ。おまえは家のことがあるとしてもあと三つでダブるぞ。」

居ないはずの教卓には教師が1人。学年担任の三村だ。性別は女、性格は男と言う教師だ。

ちなみに穂澄は特進クラスに入っている。櫻坂学院の評判と勉強の平均を保つ為のクラスと言っても過言ではない。

このクラスの特徴と言えば他のクラスは三十人程度なのだが、この特進クラスはその半分の十五人と言う事。



あと珍しいと言えば女子は色恋沙汰に興味あるが、男子達は特に興味がないと言う事だ。

しかも悲劇と言うのかこのクラスの男子達の共通点は『女子に興味を持たないイケメンたちということだ。』はたから見れば凄い贅沢なのだろうが興味もない事を強制しても意味が無い。何とも奇妙なクラスである。

穂澄は教師に謝りながら席に着く。

「穂澄………また櫻坂姉妹？」

後ろの少年が聞いてくる。

穂澄と同じく口まである長ったるい髪の毛を無道さに下ろしており、目は少し垂れ目。本を読みながら喋っている。

彼の名前は社愁寺<sup>やしろしゅうじ</sup>。名前の通り神社の関係者だ。と言うより二年ほど前に親が事故死してしまい残った神社を経営している少年。つまり事実上の神主と言うわけだ。穂澄と亮平、蛭と昔からの知り合いで幼なじみと言う奴だ。その愁寺は今一つ下の妹との二人暮らしで学校に居る時の愁寺はいつも本を読んでいる。

理由は不明。しかしそんな事は一週間もすると気にならなくなってしまふのが現実だ。

そして穂澄にとってこのクラスの利点は櫻坂のことで誰も穂澄に敵対しないとと言う事だ。

もし普通クラスに居たら授業中にもかかわらず殺気を向けてくるであらう。

「ああ、遅刻ギリギリだったからな。送ってきた。」

「そう。」

自分から聞いておいて興味なさげに返事をする愁寺。まあこう言う性格なので気にはしていないが。

「何で櫻坂姉妹と一緒に登校してるの？」

本から目を離さずに再度質問してくる。

無愛想だがこれでも結構なついてくれているらしい。

「まあ、いろいろあって今は2人のボディガードみたいな事をやってるんだ。」

流石に泊り込みで執事をやっているなんてことを言ったら大問題だ。とり合えずそこは隠しておいた方がいい。

「へえ。じゃあ今何処に住んでるの？」

愁寺の目が本から離れ、穂澄の目をじっと見つめる。その瞬間穂澄の心臓が跳ね上がる。

「えっ？ふ、普通に家に住んでるけど？」

思いつきり声が裏返ってしまった。やはり嘘などはつけない性格なのか冷や汗を垂らして表情も最初より硬くなっている。

「嘘。家無くなってた。亮平も心配してたぞ。今何処に住んでる？」

どうやら元旦の後に陸奥庵に2人でよつたらしい。

ちなみに亮平は特進クラスということでは一緒だが科が違うので学

校ではほとんど会わないのだ。

家に行ったのなら隠し通せない、そう思ったのか穂澄は元旦から今日までの経緯を全て白状した。

「……………おもしろそうだな。」

全然面白くない。ただでさえ屋敷で神経を使うのに学校にまで神経を使ったらその内廃人になってしまう。

「今日は奉里まつりが居ないから神社の仕事手伝って欲しかったんだけど無理か？」

奉里と言うのは愁寺の妹で一つ下の学年にいる。

「わからないけど一応後で聞いて見るよ。」

そう言うと愁寺が任せたと良い目を本に戻した。  
とその時

「悪かったな。もう時間が無いが授業を始めるぞ。」

教師が入ってきて三村と変わる。そして授業が始まった……………

第七話 見破られて（後書き）

何か疲れた。後半年後には受験だよ。いやだよ。  
だけど投稿頑張ります。。。

## 第八話 お手伝いをして（前編）

一月とは思えないほどの暖かさ、時刻は昼休み。穂澄は昨日と同じように灯真に渡された弁当を持って一年の教室に向かおうとしていた。

と、その時制服の裾を掴まれる。後ろを見るとそこには机に座った愁寺がいた。

まあ穂澄も今自分の席から立ったので位置関係では愁寺が後ろに居る事は当たり前と言えば当たり前である。

「これから櫻坂姉妹とメシ？」

「ああ、そうだけど。もしかして一緒に食べたいのか？」

愁寺は言葉を発せずに頷いて答えた。

その様子が結構愛らしい。もし愁寺が女だったら少しぐらいドキッとしてしまうかもしれない。

「そう、じゃあ行こうか。」

穂澄もあえて言葉少なめに愁寺を連れて教室を出た。

その理由は……。奴らに教室を出る事を悟られない為。しかし奴らの察知能力はすでに人の域を超えていた事に穂澄は気付いていなかった。

ピーと体育で使うようなホイッスルが特進クラスの廊下に響く。

誰しもがそのホイッスルが鳴った方へ顔を向け、穂澄と愁寺も例外なくその方向を向いていた。

その先には目は血走り、獣の如く一直線で走ってくる男子。まあ廊

下は真つ直ぐなので一直線と言うのは当たり前である。

入り乱れた男子。総勢、三十人。誰しもが額に『櫻坂姉妹命』と八チマキをして穂澄を睨みながら走ってくる。

「・・・・・・・・・逃げるぞ。」

穂澄の一言で2人は脱兎の如く走り出した。あの波に飲まれればまず助からないであろう。身包み剥がされてそのまま焼却炉なんて事にもなりかねない。

幸い、2人と男子達の間は目測30メートル。それなりに運動が得意な二人にはこのハンデは十分すぎるぐらいであった。

「確か昨日も追われてたけど、原因は櫻坂姉妹だよな。」

相変わらず愁寺は本を読みながら移動している。しかしどんな生活をすれば階段を駆け下りながら本を読めると言うのだろうか。そんなことをしたら穂澄の場合は楽勝で踏み外しそうである。

「まあ、慣れてるから。」

あれっ？今の言葉不自然じゃなかった？心を読まれた気がするんすケド!?

「しかし執事って役職も大変なんだな。イメージではもっと簡単な物だと思ってただけだ。」

馬鹿言っちゃいけないよ。毎日追いかけてみる。死ぬよ。過労とかで、いやマジでさ。

あえて心が読まれた事は放っておこう。

そう言っている間に一年の教室に入る2人。後ろを振り向くと、息を切らした男子達がこちらを恨めしそうな目で睨んでいる。ここまで嫉妬が続けばある種ホラーに近い気もする。

「あれっ？穂澄さん。お友達ですか？」

「・・・・・・友達？」

駆け込んできた穂澄を2人のお嬢様が迎える。手には弁当が握られ、尊のもう片方の手にはビニールシートが握られていた。

「ええ、コイツは社愁寺。特進クラスの仲間です。今日は一緒にお昼をと思ひまして。良いですか？」

2人は快く了解してくれた。内心ほっとした穂澄はお嬢様たちと愁寺を連れて屋上へ向かった。

「そうなんですか。良いですよ。今日ぐらい休んでください。」

「…………裏を返せば明日から労働の日々だから。」

今日神社の手伝いをしたいと言い出すと、尊は了承してくれた、だけど栞お嬢様、さらっと明日から休みなしの労働宣言しないでくださいよ。

基本的に穂澄は屋敷に住んでいるので屋敷に居る365日毎日仕事だ。時々休みはもらえるが基本、周期的な休みは一つも無いのであった。

「じゃあ、今日は帰りが遅くなりますので灯真さんに伝えておいてください。」

そして、四人はお昼を満喫した…………

放課後。今日は担任が急用とかで少し下校が早まった。全く持つて大変な担任だ。だが、しかしその分神社の仕事も速く終わりそうなので、良しとしよう。



あらかじめお嬢様たちには言っておいたので、下校は車が迎えに来るそうだと。と言う訳で今日の下校は愁寺と二人になった。

幸い、特進クラスだけが下校時刻が早まったので外には穂澄の嫉妬に燃える男は居なかつたので楽に下校する事が出来た。

さらば、男子生徒諸君。校舎からの嫉妬の目が痛いぜ！

後ろを見ると男子達が校舎の窓から身を乗り出してこちらを睨んでいる。ここまで揃うと逆に気味が悪い。一度見たあとそのまま目を合わさずに学院を後にした。

第八話 お手伝いをして（前編）（後書き）

作者急病のため暫くストップしていました。すみません。

。ゴホゴホ。こゝ、これからもがんばりますのでどうかお付き合いを。

## 第九話 お手伝いをして（後編）

「愁寺。この前借りた袴どこにやった？」

場所は愁寺が神主をしている陸奥神社<sup>むつしんじや</sup>。ちなみに穂澄の家の名前も陸奥である。確か団子屋の名前はここから取ったと昔に行っていたような気がする。

「はい、これ。」

愁寺は本堂の奥から袴を持って現れた。しかし良く考えると穂澄の頭は茶色。純和風の袴に茶髪と言うのはいつ見てもおかしい気がする。しかも追い討ちをかけるように穂澄の茶色はどちらかと言うと金色に近い茶髪なのだ。と言う訳でいつも着替えるときに置き鏡を見るのだがそのときの口癖はやはり……

「似合わないねえな……」

「まあ、気にするな。俺は本堂で憑き物落としての客が来るまでここにいるから何かあったら声を掛けてくれ。はい、これ箒。」

愁寺はそう言い穂澄に竹箒を手渡す。

ちなみに愁寺が言っている憑き物落としては代々陸奥神社に伝わる秘伝技とかなんとか。結構有名らしく1週間で大体10人ほど抜けているらしい。

まあ小さい頃は穂澄と亮平、蛭が練習に使われ落としている途中蛭が倒れて何か痙攣しながら口の周りにきめ細かい泡がぶくぶく出ていたり、そう考えると穂澄達の犠牲の上に今の人気成り立ってい

ると言う事だ。まあなんともし理不尽な気もするが・・・この際置いておこう。

「そう言えば奉里はどうして今日休ませて欲しいって言ってきたんだ？あいつは真面目だからそんな事滅多に言わないだろう。」

「ああ、何でも買いたいCDがあるから休ませて欲しいって言うってたな。」

なんともし高校生らしい休みだ。確かに昔から愁寺は妹の頼みには弱く洪水警報が出るのに川に流された奉里の靴探しに行ったり人気ゲームが欲しいと言われる学校休んで徹夜で並んだり。まあ、奉里も話に聞くほど悪女と言うわけでもないのです。そこはただ単に兄離れとかが出来ていないのかもしれない。

穂澄はそんなことを考えながら本堂を後にし外に出た。

季節は1月。そんなに落ち葉が多いというわけではないがこの頃はマナーの無い参拝客も増えたらしく空き缶やビニール袋なども片付けなければいけない。と言う訳で1月の寒空の下。通気性抜群の袴をはいて掃除をするのはある種苦痛である。そんなことを考えていると余計に寒くなるのハメに見えているのだがそれが人だ。案の定考えてしまい案の定さつきより寒くなった気がした。

穂澄が肩をブルブルと震わせていると後ろから誰かに抱きつかれる。

「ぬおっ!？」

いきなりの事でびっくりした穂澄はその抱きついた相手の手を振り払い距離をとりながらその相手を見る。・・・と

「いたたたた」

「何だ奉里か。びっくりさせるなよ。」

払いのけた時に尻餅を付いたらしくお尻を擦りながら立っていたのは社奉里<sup>やしろまつり</sup>。もちろん愁寺の妹でさつき話題に出ていたCDを買いに行っていた少女である。

黒髪を腰の辺りまで伸ばし身長は愁寺とあまり変わらず少し低め(愁寺も特進クラスの中では一番小柄)。誰にでも優しく勉強の出来る少女。

「えへへ、ごめんね穂澄くん。あんまり寒そうだったからつい、」

ついにしほがある。一応もう高校生になっただから少しは女性らしく振舞えないのか。

と心の中で言う。まあ、奉里は少し天然が入っているからそんなことを言っても無駄なので言わない。

「それでお目当てのCDは買ったのか？」

「えへへ、実は発売は明日だったんだよね。だから買いそびれちゃ

った。」

良い忘れていたが奉里はそっかしい。まあ、何と言つか玉に傷という奴だ。

「じゃあ私は着替えてくるから穂澄くんはここで待ってて、良い？逃げたりしたらだめだよ。」

チツ！バレたか。

奉里が来たのならもういいだろうと一緒に本堂に向かおうとしていた穂澄であったがそれも奉里に抑えられてしまって結局この寒空の下。最後まで仕事をする羽目になってしまった……………

その後穂澄に悲劇が襲い掛かった。

「……………愁寺、これはなんだ？」

場所は本堂。いるのは穂澄、愁寺、奉里。そして穂澄が指を指した先にはボロボロになった布がポツンと置いてあった。

「……………ぬ、布だ。」

「違う。それは知っている！そうじゃなくて何で俺の制服が見るも

無残な姿になつてゐるんだ!？」

そのボロボロになった布とは、もはや制服としての機能をまっとう出来ないほどになつてしまつた穂澄の制服であつた。

「実は、さつきつき物落としをしている時。ネコが入ってきて。その猫の中に被つていた物が取り付いて最終的には爪とぎの餌食に……」

「これは……穂澄くん。今日は悪いけどその格好で帰つてくれるかな?それあげるから。」

「いやいやいやいや!?!待て待て待て待て!?!?良く考える奉里。俺は茶髪だ。なのにこんな格好で外歩いたらめっちゃ変な目に見られるだろがうが!」

それにお嬢様達のこともある。こんな姿で帰つたらゼツツツツツツツタイ。それをネタに就寝まで弄られる。それどころか下手をすれば明日で持ち越される可能性だつて否定できない。

「じゃあ裸で帰る?」

「このまんま帰らせていただきます!さよなら。」

そうさ!俺はこんな事には負けない。きつとお嬢様達にだつて話せば解つてくれるさ。ガンバレ俺!負けるな俺!!

もちろんその後そんな淡い思いも虚しくみんなに弄られた事は言うまでもない……



第九話 お手伝いをして（後編）（後書き）

投稿したはずなのにされてなかったので書き直してまた投稿。  
辛いです（泣）。  
でも頑張ります。。。

## 第十話 散髪しようとして（前編）

「穂澄さん、残念ながらクビです。」

部屋には残念そうな顔をする灯真と真琴。そして栞と尊が立っていた。

「えっ？ど、どういうことですか！？俺が……クビ？」

いまだに信じられない穂澄。しかし残酷にも灯真の首は縦に振られる。

「何ですか。り、理由を教えてください。」

「そ、それは……」

「それは？……」

灯真が躊躇しながらも言おうとする。その灯真の溜めは実際二秒ぐらいだった。が今の穂澄には何十分にも感じられ額からは汗が滲んでいた。

「それは……穂澄くんがハゲてしまったからです。」

「……は？」

「ハゲです。」

「いやいや、ハゲの意味に疑問を持ったわけではなくて。俺はまだ

17ですよ。そんなハゲだ何て……………」

「穂澄くん……………」

穂澄の言葉が遮られ今にも泣きそうな真琴がポシエットから手鏡を持ち出し穂澄の顔を映し出した。

「あ、真琴さん。ありがとお!？」

お礼を言う途中穂澄は鏡に映った自分に絶句した。

それはもう見事なぐらい太陽の光を反射して力強く光っている頭。

OH、YES!! hey、元気か? My head!! お前いつの間にそんな力強く光を放つようになったのか? H A H A H A H A H A

「じゃなくてっ!? 危なかった。危つく変な世界に閉じ込められる所だった……………」

「すみません! 穂澄さん。私達が迷惑をかけてばかりいたせいでこんなに立派に……………」

「……………ストレスからくる円形脱毛症。怖いね……………」

尊は目尻に涙を為、泣いている。その横にいる栞はめっちゃ穂澄に哀れみの目を向けていた。

「と言う訳で、ハゲがお嬢様方の執事となると櫻坂の評判が落ちますのでクビです。」

おい、コラ！今の言葉訂正しろ。頑張って働いている日本のお父さん一人一人に謝罪しろ！

と心の中では思っていたが流石に口には出せず・・・

「それではご縁があればまたいつか・・・ああ、借金の残りの額は穂澄さんの臓器で払ってもらいますからお体には気を付けてくださいね。」

「そ、そんなーーーーー」

こうして穂澄は暗闇の中へと沈んで言った・・・

執事になる50の方法

完

「はあっ!?!?.....」

目を開けるとそこはいつものベッドの上であった。

「ゆ、夢……か。」

朝、食堂で食事中。

「　　と言つてがありました。」

朝から穂澄の元気がない事に気がついた4人はその理由を聞くと大笑いした。

「あはははは、穂澄くんが円形脱毛症でクビねえ。ないない灯真はそんな事でクビになんかしないから大丈夫だよ。」

「そうですねよ穂澄さん。灯真さんは夢のようにそんな悪人ではないんですから。」

「……………まあ、円形脱毛症になったら私はもう穂澄は要らないけどね。」

「あれっ？栞お嬢様。今凄く気になること言いませんでした？」

「……………気のせい。」

栞は顔色一つ変えないで朝食のチョココロネをモフモフとほお張っている。

「お嬢様。口の端にチヨコが付いていますよ。」

穂澄は栞に近づき頬をふきんで拭う。

「……………」

途端に栞は顔を真っ赤にしてそっぽを向く。

しかし穂澄に顔を抑えられている事によってそれもかなわず。自然に穂澄と目が合ってしまう。

「……………」

「いえ、どういたしまして。」

恥ずかしかっている栞の様子など鈍感な穂澄には解るわけがない。

そのままふきんを綺麗にたたむと再び自分の立ち居地へと戻る穂澄。

「穂澄くんも執事が板についてきたみたいだね。鈍感なのは変わってないけど。」

「はい、そうですね。穂澄さんはいつも鈍感です。」

「……………」

「？」

2人で笑つ尊と真琴、その様子を見て不思議がる穂澄と再び顔を茹蛸のように赤らめる栞。

「それはそうと、穂澄くん、そろそろ髪は切ったほうがいいのでは？」

いままで笑って聞いていた灯真が口を挟む。

「ん？そうだね。今日は学校お休みだから特別ボクが切つてあげるよ。」

真琴はのりのりでポシエットからはさみを取り出す。

確かに自分でもそろそろ切った方が言いかと思つていたぐらいだ。元々髪が伸びるスピードはあまり速くない穂澄だ。まあ、流石に一年中放つておくわけではなく、いままで自分で切つていたのだ。親父は働かないし授業料だつて収めなくてはならない。そんな中で散髪にお金を使つている暇はないのだ。まあ、ちなみにこの茶髪も自分で染めたので結構安上がりなのである。

「じゃあ、ご飯食べ終わつたら庭に来てよ。それまでに準備しておくからさ。」

「はい、わかりました。ただ、ボウズだけは辞めてくださいね。」

そう言い穂澄は髪のを切る事となつた……





第十話 散髪しよつとして（前編）（後書き）

ファイトーーーーー！

イッソッソッソッソッパーーーーッ！

投稿、頑張ります。。。

## 第十一話 散髪しようとして（後編）

尊達の食べ終わった食器を片付けた後、灯真と2人で朝食。その後穂澄は灯真から2時間ほど休みを貰い庭へと向かっていた。

「ああ、穂澄くん。来たね。」

そこにはパイプ椅子が置いてありその隣の机には五十種類以上のハサミが置いてあった。

「……………真琴さん。このハサミって一つ一つ違うんですか？」

「ああ、そうだよ。これがカット用でこつちがモヒカン用でこつちが逆モヒカン用でこつちがリーゼント用で。これがスーパースャ人用で」

まあ、いろいろとあるらしいが、今の例えだとほとんどが今回使わないはさみだらけだと思うのは穂澄だけであるうか？

「まあ、いいよ。座って座って。」

半ば強引にパイプ椅子に座らせられた穂澄はまず、シートを付けられる。

「何ですか？これは、てるてる坊主みたいですね。」

「あれ、穂澄くん。これ知らないんだ。ああ、そうかいつも自分で切るって言うってたしね。」

そのまま真琴は1人で納得したようでそのまま作業を続けていく。

「えっと、それじゃあ穂澄くん。何かご注文は？」

「髪型ですか？そうですね。真琴さんにお任せしますよ。」

「わかったよ。じゃあ始めるけど。私相手に起きていられると集中できないから寝ててね。」

「ガフツ!？」

そう言われ何の前触れもなく真琴は穂澄の首筋へと手刀を入れる。もちろんそんな事をされるとは思ってもいなかった穂澄はモロにダメージを受けそのまま暗闇へと意識が遠退いていった。その時、穂澄は思った。

ああ、今日は厄日なんだな………と

「穂澄くん、穂澄くん。終わったよ。」

目を開けると目の前には真琴がいた。穂澄は一瞬送られて今の状況を理解する。朝の夢のことを話し、そしてその経緯で真琴に髪を切ってもらった事になったが始まると同時に種痘を喰らい意識を失っていたのだ。

そうしてよく考えると確かに頭が軽くなっているのがわかる。手で触ってもモヒカンやリーゼント、スーパーサヤ人のような髪には

なっておらずひとまず安心だ。

「あ、ありがとうございます。」

「はい、これが鏡。」

渡されたのはポシエットから出された手鏡。何か少しトラウマのよ  
うな気もしなくはないがまあいいであろう。真琴の腕を信じて任せ  
た以上その結果に文句を言うわけには行かない。穂澄は心で強く念  
じ勢いよく目を開けた。

「……………」

「?……………どうかしたの」

何も喋らず手鏡を見つめる穂澄に真琴は声を掛ける。

その穂澄の頭は……………」

「黒くなってる……………」

「ああ、根元が少し黒くなってたから染め直そうと思ったんだけど。  
結構痛んでたから、いつその事戻しちゃえと思って。」

穂澄の髪は以前までは茶色くて目を覆い顔の半分はあまりよく見え  
ては居なかったが今は長めで目に少しかかっているぐらいで色は黒  
くなり、前より男前になっていた。

「穂澄くんは結構かっこいいんだから、髪の毛で顔なん隠しちゃっ  
たらもつたいないよ。」

真琴はそう言つと穂澄の頭をくしゃくしゃとかき回す。

「じゃあそろそろ休憩終わりでしょ。さっさと灯真達にも見せてきな。」

「は、はい解りました。あ、あの真琴さん。」

「何？」

「ありがとうございます。髪の毛すつきりして気持ちいいです。」

そう言つと真琴は満面の笑みを浮かべ喜んでくれた。

「それでは、」

そう言い庭を後にした。

「わあ、穂澄さんかっこいいよ。」

「……結構良い。」

「ありがとうございます。」

その後灯真に見せた穂澄は早速2人の部屋の掃除をまかされて尊の部屋に来た所であった。

最初は尊に見せる事になると思っていたが、尊の部屋には栞も居たためその手間も省けて大助かりであった。

「そうだ！穂澄さん。今からファッションショーをしましょう。」

「……………イタリアへGO！」

「えっ？お嬢様方ですか」

この際栞のボケは流しておいてまずは尊の疑問から片付ける。

「いいえ、穂澄さんですよ。こんなに髪をイメージチェンジしたんですから服も変えないと。」

「だけど、私は執事服と制服。あと私服は一式しか持っていませんよ。」

「大丈夫」

まるで狙っていたかのように二人の声が重なる。と何処からともなく現れた黒ずくめの男達が男物の服を持ってくる。

まあ、このさいあの人たちは誰ですかと言う初歩的な質問をするのはあえて辞めて置こう。

それに本音を言うと……………めんどくさい。

「じゃあ始めましょうか。はい、穂澄さん。着替えてきてください。」

「……………ガンバレ」

何を頑張るんですか!?

心でそう思いながら穂澄はいつのまには用意されていた試着室へと姿を消した。

数分後。

「着替えましたー」

そう言いながら出て来た穂澄の衣装は……

「何かロックバンドやってそうな人だね。」

「ヴォーカルみたい。」

革の手袋したり指輪いっぱいしたり、まあ、要するにちゃらちゃらして落ち着きがない感じである。

「じゃあ、次行つて見よう。穂澄さん。」

「……………GOGGO!」

その後いろいろと試した。メガネかけてバンドナして裾の短いズボ

ン履いて『萌え〜』って言うてみたり（個人的には一番苦痛だった。）  
ワイシャツ着て背広きて頭七三別けにしてみたり（17でこんなかっこうするとは思わなかった。）  
特攻服着てお嬢様達が小さい頃遊んでいた木馬に乗ったり、まあ、  
本当にいろいろした。  
そしてその結果。

「片付け……………どうしましょう。」

尊の部屋は僅か数十分で服で埋もれて散らかってしまったのだ。

「あ、あの私も手伝うので。」

「いや、いいんですよ！お嬢様。私の手に掛ければこんなのポンプ  
ンポンのチヨイチヨイツと片付きますから。良いんです。」

そして穂澄は無理矢理気合を入れ作業に取り掛かった……………



第十一話 散髪しようとして（後編）（後書き）

散髪イベントはこの小説を書き始めた頃から書くことと思っていたのでかけてよかったです。

これからヤル気があるうちにどんどん投稿していきます。。。

## 第十二話 誘惑に負けて

「それじゃあ、私達は栞の部屋に居ますので掃除をお願いしても良いですか？」

「………働けワカゾウ！」

ファッションショーを終了させた穂澄は服で埋もれた部屋を片付け始めていた。

「はい、その為に来たのですからしつかりとさせていただきます。」

顔は笑顔であったが心では泣いていた。まあ、これも試練だと思い忘れることにした穂澄。

「あつ、それじゃあ一番上の引き出しはあけないでくださいね。それ以外は大丈夫なので。」

そういい残し、二人はさっさと走って行ってしまった。

穂澄は2人を見送ると、まず散らかった衣服を片付ける。幸い何処からか来た黒服の人たちが手伝ってくれたので思っていたよりは早く終わった。その後はベッドのシーツをはがしかごに入れ、その後洗濯とアイロンを済ませた服をタンスにしまい、その後は掃き掃除をしていた。

と、その時ふと尊の言っていた机の一番上の引き出しが気になった。鍵付きの引き出しだがその鍵穴には現在鍵がささっていた。これは尊らしいミスである。と、ここで穂澄の頭の中では天使VS悪魔の対決が繰り広げられていた。

『ダメよ穂澄。あなたは雇い主の1人から見ないでと言われたのよ、あなたはその雇い主の信用を裏切るの?』

『YOU、いいんだよ。自分の欲望に素直になれば、見たいんだろ? 気になるんだろ? 大丈夫だって、尊も栞も今は2人で遊んでるんだから誰も来ねえよ。ほら、YOU、見ちゃいなよ!』

天使の行っていることも一理あるが、少しぐらいなら良いかな? それに今は他の人たちは出払ってるからどうせ誰も来ないし・・・って言うか今改めて思うと俺の頭の中の悪魔ってジャーンさんじゃなかったか!?

そんな事を考えている間にも穂澄の手は引き出しを触りそして、ガラガラと小さな音を立ててあいた。そこには・・・

「日記帳?」

少し調子抜け出あった。穂澄的には0点の答案とか、自分の恥ずかしい写真とか、彼氏の私物とかを想像していたのだから、まあ、尊なら日記を見られたくなくてああ、言うのも解らなくない。とここでまた天使と悪魔が出てくる。

『だ、ダメよ穂澄! い、今ならまだ間に合うわ。だから早くその手に取った日記を引き出しにしまっ!』

『HEYHEY、良いんだよ穂澄。YOU、見ちゃいなよ!』

「あっ! どうもジャーンさん。お久しぶりです。では早速。」

もはや天使の声など届いていなかった穂澄は。何の迷うもなくその日記帳をあけた。

「ん？使用日（初） 1月1日。ああ、今年から書き始めたのか。」

そうして開いた穂澄はその内容を読み始めた。

1月1日 晴れ

『今日もいつもと同じ良い日だった。昨日から新しく来た執事さんとは初対面で緊張してまったので執事さんに変な子だって思われてないと良いけど・・・。。。。良く考えると私って他人といえば灯真さん以外の男の人とはあんまり話したことがなかった。やはりそのせいなのか初めて会うときには心臓が痛いほどドキドキした。だけど新しい執事さんは笑顔がとっても優しく良い人だった。』

流石に誰も居ないと解っていても照れるな・・・。。。。

穂澄はそのまま読み続ける。

1月2日 晴れ

『今日は穂澄さんが真琴さんと会うと言うことを聞いて栞と一緒に庭に向かっていた。だけど二人を見つけたときは驚いた。だって穂澄さんが真琴さんを押し倒していたから・・・。。。。あんなに優しいそんな人もやっぱり怖いんだと思ってしまったけれど後で誤解だとかわかったときは少しホツとした。それは穂澄さんが怖い人じゃなかったということもあるけどやっぱり本当の理由は私が穂澄さんに

』

続きを読もうとしたがその部分で終わっていてそれ以降は消しゴムで消された痕が残っていた。

仕方がなくそこは諦め次に行く。

・  
・  
・

1月9日晴れ時々曇り

『冬休みも終わって学校に登校する日だった。私はてっきり栞と2人で行くと思っていたのだけれど、灯真さんとお兄ちゃんが何とかしてくれたみたいで穂澄さんも一緒に学校に行くことになった。私はあまり嬉しそうには言わなかったけれど内面は穂澄さんともっと話が出来ると思い凄く嬉しかった……。学校に行くと穂澄さんの友達の遠藤蛍さんにあった。蛍さんはとてもフランクな方で昔の私だったら苦手だったかもしれない、だけどこの一週間穂澄さんのお陰で男の人にも緊張しなくなったのだ。そのお陰で蛍さんとも仲良くなれて本当に良かった。』

あれっ？お嬢様達にお兄様なんていたんだ。初耳だな。

1月10日晴れ

『今日屋上でご飯を食べる時私はシートを取りに行って戻ってきた時、聞いてしまった。』

とここで穂澄の手が止まる。そこには栞に告白された時のことが書き込まれていた。

「栞が穂澄さんに寄り添って好きだよって告白している所を聞いてしまった。そしてその後キスをしている栞を見てしまった。何故だかわからないけど私は少しショックだった。私は栞の恋は応援したい。だけど穂澄さんにキスをしている所を見たときなんでか胸の奥が締め付けられるような感覚に襲われた。本当だったらここは見届けなければならぬ。出て行つてはダメだと心では解つていた。だけど、私は動いていた。……穂澄さんの言葉を遮り何も知らないふりをして2人の間に割つて入つたのだ。……本当に私は最低だ。」

とその後ろから物音がする。穂澄は肩をビクツと跳ねさせ後ろを向くとそこには……。尊が立っていた。

「どうしたんですか？穂澄さん……。」

穂澄に向けられていた笑顔が急に強張る。尊の視線の先には穂澄が持っている日記帳があったから。

「み、見ないで！」

尊は今までで一番大きな声を出して穂澄から日記帳を奪い取る、と力なくその場に座り込んでしまった。

「う……うっう〜」

尊の目からは大粒の涙が流れていた。

「あ、あのお嬢様。すみませ〜」

「いいの！わ、私が悪いから、鍵を付けっぱなしだったし、表紙に

も見ないでっけて書いて置けばよかったんだよ。」

尊は自分に言い聞かせるようにそう言う。

「ご、ごめんね。穂澄さん。私ちょっと一人にさせてくれないかな？私の代わりに栞と一緒に遊んで。」

「で、でも。」

「お願い！一人にさせて。」

その尊の言葉に圧倒された穂澄は言われた通りそのまま静かに部屋を後にした……

## 第十二話 誘惑に負けて（後書き）

人はヤル気を出せばなんでも出来るらしい。

この話は五分で書いた超ハイスピード。

白紙から五分でよくかけたと自分でも結構満足しています。それでは  
投稿頑張ります。。。



### 第十三話 仲直り(?)して

尊に部屋を追い出されてから数時間。その後の事ははっきり言ってお覚えていない。時間があつたという間に過ぎて時刻は午後七時過ぎ。穂澄は今その怒らせてしまった尊の部屋の前に立っていた。すでに夕食の時間なのに自分の部屋から出てこない尊を心配したのか、灯真が穂澄を向かわせたのである。乗り気ではなかった穂澄も灯真の頼みでは断りきれず、渋々尊の部屋の前に来たと言っわけだ。

扉をノックするのを躊躇っていたのだが他の人を待たせるわけには行かず穂澄は意を決して扉を叩いた。

コンコン

廊下に響くノック音緊張のせいとその音がいつもより大きく聞こえた。

「……………はい。」

小さな弱々しい声だが確かに尊の声で返事が来た。

「穂澄です。夕食の時間になりましたので出てきてもらえませんか？」

「ごめんなさい。食欲が無いの。ご飯は私抜きで食べて下さい。」

やはり声が弱々しい。穂澄は唇を噛み締め力を込めてドアノブを回した。

中に入ると尊がベッドの上で蹲っていた。穂澄が近づくと入ってきたことに気がついたのか尊が近くにあった毛布くまふに包まる。

その肩は小刻みだがフルフルと震えていた。

「ほ、穂澄……さん。すみません。私少し調子が悪いみたいで……あの……その」

「お嬢様すみませんでした！」

穂澄は尊の目の前まで来ると頭を大きく下げた。

「謝つてすむことではないのは知っています。私は尊お嬢様にあけないでくださいと言われたのにあけてしかも中まで見てしまつて……私を信じてくださっていたのにそれを裏切る真似をしてしまつて……」

「穂澄さん、隣に座つてもらえませんか？」

穂澄が顔を上げるが髪を下ろしているので尊の顔は良く見えない。穂澄は言われたままに隣に座り尊の言葉を待つ。

「穂澄さんは何処まで見ましたか？」

「えっ……い、1月10日まで見ました。」

ここで嘘を言つても何も解決にはならない。それにここで嘘を言つてしまつたらさっき謝つた事が嘘と言う事になってしまう。穂澄は少し間を開けたが正直に本当のことを言つた。とそこで尊の顔が毛布から少しだけ出てくる。

「本当ですか？本当に1月10日までしか見てないんですね。」

「は、はい。本当です10日以降の所は読んでいません。誓っても良いです。」

そう言つと尊は毛布から出てベッドから出て立ち上がる。

「なら良いんです。さあご飯に行きましょう」

「えっ？ええっ！？」

尊は毛布を丁寧にたたむと穂澄に押し付ける。その間に尊は先ほどの沈んだ顔が嘘のようにスキップをしながら部屋を出て行った・・・

「何で？」

とその時枕の横に置いてあつた日記が目に入る。

十日まで見たつて言つて良かったて言つたという事は十一日に何か重要な事が書いてあつたのか？

『ダメよ！穂澄。せつかく許してもらつたのにさっき謝つた事をあなたは無にするつもりなの！？』

『いいじゃんよー。スキップで出て行つたんだ。もう栞たちのごろに言つてるよ。気になるんだろ？YOU、見ちゃいなよ！』

「死ねや！！この悪魔があ！！」

穂澄は目の前に漂つていた悪魔を捕まえて踏みつけた。

『NO———!?!?』

「悪は滅した。これでもう俺は過ちを繰り返さないぞ。」

穂澄は胸を張って尊の部屋を出るとそこにはドアの影に背を預けこちらを向いていた。穂澄は尊と目が合い数秒固まる。

ニコッ

ニコッ

笑い返された。

「見なかったですね。偉いですよ。」

チュッ

頬にキスすると尊は再度スキップしながら穂澄の視界から消えていった………

「見なくて………良かった。」

穂澄はキスをされたことより日記を見なくて良かったと心の底から安堵した………

「ああ、穂澄さん。明日は<sup>しゅんや</sup>竣夜様の所に言ってもらいますから」

お嬢様達の食事が済み、灯真と一緒に食事をしている時、ふとそう告げられる。

「すみませんが竣夜様とはどちら様ですか？」

栞と尊の執事になってから少し経つが『竣夜』と言う名前の人にはあったことが無かった。しかし竣夜と言えば聞いた事がある気がする。

「竣夜様と言うのは穂澄さんをヤクザの人たちから買い取った人ですよ。」

「えっ！？買い取ったのはお嬢様達ではなかったのですか？」

穂澄は今までヤクザに売られそうな所に栞たちが偶然通りポンっと大金を払い買い取ったのかと思っていたのであった。

「そこに地図を書いておきましたのでフロントの方に渡してください。そうすれば後は案内をしてくれますよ。」

灯真はそのまま自分の食べ終わった食器を持ってキッチンの方へと消えていった。

穂澄は灯真が出て行ったのを確認するとその紙を見てみる。

『櫻坂エレクトロニクス』

櫻坂エレクトロニクスと言えばこの辺で一番大きな会社だ。

この辺に住んでいる人なら櫻坂エレクトロニクスを知らないものは居ないであろう。

なんせ小学生ですら待ち合わせに使っているぐらいなのだから他の会社よりよっぽど目立つのである。

「……………穂澄。」

とその後ろから栞に声を掛けられる。

「は、はい。何でしょう？」

灯真にもらったメモを丸めてポケットの中に詰め込む。慌てて後ろを振り向くとそこには髪をポニーテールにしてメイド服を身にまとっている栞がいた。

「……………」

一瞬の沈黙。

「こ、これは突っ込んだら負けと言う事なのか？」

ここは突っ込むべきと言う事は明白だ。しかしここまであからさまだと流石に裏を考えてしまうのが人の性さがと言う物だ。そのまま暫く2人の間に沈黙が続く。

そして痺れを切らしたのか栞が沈黙を破った。

「……………何で突っ込まないの？」

頬を膨らませ拗ねる栞。どうやら本気で突っ込んで欲しかったらしい。

まあ、突っ込んで欲しいのだからこんな格好をしているのである。

ガンツ

「いったあ!??」

「何で突つ込まないの?」

栞が穂澄の脛をつま先で蹴ってきた。

注)ちなみにこの家は洋式なのでベッドに乗るとき以外は靴です。  
つまり脛蹴られるとメツチャ痛いです

穂澄はその場に蹲り唸りを上げる。流石に悲鳴を上げれば灯真や真琴などが来てしまうので我慢する。まあ、本音は脛蹴られたぐらいで叫んだりしてかっこ悪いと栞に言われるのがイヤだったからと言  
うのが強い。

痛みを耐えた穂澄はサツと立ち上がり栞に向き直る。

「で、では。何故メイド服を着ているのですか?」

「……………穂澄に着させるから。」

……………今なんと言った?メイド服を俺に着せるから。

Why?何故に?いやいやいや俺にはそんな特殊な趣味はありやせ  
んで。

なにやら混乱して何処の方言かわからなくなってきたがとにかく  
ピンチと言う事は穂澄もすぐにわかった。

「……………冗談、穂澄には着させない。」

栞はニヤリツとしてやったりとした顔で穂澄を見る。

「……今度、櫻坂創立記念祭があつてメイド喫茶する事になつて丁度この前に頼んでおいた服が通販で届いたから試しに来ていた所。」

栞にしては長台詞だったが今はそれより創立記念祭の方が心配だ。

何故かつて？理由は簡単。

まず第一に創立記念祭なんて特進クラスの連中は聞いてません。多分去年と同様担任が忘れているに違いない。そう、去年は担任が記念祭の3日前に言ったものでその3日間死に物狂いでやったことを覚えてる。

まあ、3日前までなせ気が付かなかったと突っ込まれると痛いのでここはスルーしておこう。

次に尊と栞がメイドの姿で接客する事だ。多分いつも穂澄を追いかけている様ななやつはメイド姿を見た瞬間。狂喜乱舞するであろう。

「……だから穂澄、そこで頼みがあるんだ。」

栞は少し言いづらそう足をモジモジさせている。

「何でしょうか？」

穂澄が聞くと決心がついたのか栞は顔を上げて穂澄の目を見る。





第十三話 仲直り(?)して(後書き)

ね、眠い。何か疲れてるのかな？  
コレカラ頑張ります。。。

## 第十四話 会社に行つて

次の日。平日であつたが穂澄は灯真に言われた竣夜様に会う為に櫻坂エレクトロニツクの前まで来ていた。

ちなみに特進クラスは欠席の評価が凄く厳しく今までちよくちよくと休んでいた穂澄にとっては落第の危機であつたがこれも櫻坂の力なのか灯真が担任に言つてくれたおかげで今日の欠席はなしにしてくれているらしい。まあ、その点では結構安心ではあつたが、今一番心配なのはその竣夜様がどんな人かが気になる。

穂澄的にはボディービルダー見たいな身体でモサモサの髭を生やしてる。感じの笑い方はH A H A H A見たいな人をどうしても想像してしまう。

だが、ここでいつまでも立っつていては流石に不審者だ。現にさつきからガードマンの人がこちらを熱い眼で見ている。意を決した穂澄は会社の中へ歩を進めた。

「あの、すみません。これを渡せば良いといわれたのですが・・・」

ロビーの受付に灯真から受け取つた紙を渡す。

「はい。お話は聞いております。こちらへどうぞ。」

受付のお姉さんは紙を穂澄に返すと案内をしてくれた。会社の奥に進みエレベーターに乗る。

「32階が竣夜社長のお部屋なので着きましたら一番奥のお部屋に入ってもらえば直ぐです。」

そう言っている間にエレベーターが止まり扉が開く、

「それでは。」

受付のお姉さんは穂澄が出たのを確認すると下に下りていつてしまった。

静かな廊下に1人佇む穂澄。周りは流石世界規模の会社と言っただけあつてあたり一面塵一つ落ちてない。

穂澄はそろそろと周りを見渡しながら言われた通りに奥へと進む。

その姿は思いつきり不審者だが、こんな所に一般人がいきなり放り込まれたらと考えると誰もが同じような行動を取るであろう。

暫く進むと目の前に他の扉よりふた周りほど大きな扉が現れた。

穂澄は恐る恐るその扉を開けると………

「ハアイ ナイス トウ ミートウ ユー。」

真っ黒に日焼けした筋肉ムキムキのスーツ&サングラスの男が立っていた。

「うおっ！？し、竣夜様ですか？わ、私は灯真さんに言われてきました桂穂澄と言います。以後お見知りおきを！」

「おーい、違うぞお〜そいつは俺じゃない。」

頭をガバツと下げて挨拶している穂澄。その部屋の奥から気の抜けた声が聞こえる。

顔を上げるとそこにはデスクに肘をつき資料を読んでいるメガネの青年がいた。

短髪の黒髪の青年。歳は二十五ぐらいであろうか？顔はわりと整っており流石櫻坂の血が通っているだけの事はある。

「俺が櫻坂竣夜だ。そっちはボディガードの دونالدだ。」

「らんらー」

随分とノリの良いボディガードだがそれ以上は著作権とかいろいろなものに引っかけりそうだから止めて置こう。

竣夜に手招きされた穂澄は Donald の横を通りデスクの前に立つ。

「ふん。君が穂澄ね。俺は櫻坂竣夜<sup>さくらば しゅんや</sup>。尊と栞の兄貴だ。そしていまは櫻坂エレクトロニツクの社長代行だ。」

「は、始めまして穂澄です。」

「それはさっき聞いた。良いから座って。」

竣夜が指をパチンツと鳴らすと Donald が出てきてパイプ椅子を出してくれた。

無駄に万能だな……

そんなことを思いながら穂澄は用意された椅子に座る。こうして立場が上の人と向き合うのは多分櫻坂の入試面接以来だと思う。

「さて、それじゃあいくつか質問するから。答えて。ああ、曖昧な答えしたら即クビだから気をつけて。」

サラッと重大発言をして来る竣夜。そんなことを言われた穂澄はもちろん緊張して顔を強張らせる。そんな穂澄を知ってか知らないか、

竣夜は早速質問をする。

「最初はまず・・・尊と栞の執事をしていて何か違反するような事はなかったか？」

「・・・・・・・・違反ですか？」

違反と言ってもいろいろとあるから答えにくい。

「しつかり答えないとクビにするぞー。まあ、例えば寝起きで無防備な尊に野獣のごとく襲い掛かり服を引き裂き○○○なことしたりや　　をしたり誰にも気が付かれない事を良い事に最後は　　まで！・・・・・・・・とか。まあ、それぐらいのレベルじゃ無いのなら別に良いんだけどな」

注）内容が過激過ぎるため○　　を代用しています。  
気になる方は御自分で妄想・・・いえ、想像してみてください。

「な、ないです。」

って言うかそんなことしたら今俺はここにはいません。

そんなことを思いながら穂澄は驚いて止まりそうになった心臓をなだめる。

「次は、借金を返し終わったらその後どうするつもりだ？」

この答えは先程にくらべると楽なのですぐに答えは出た。

「そのまま櫻坂にで執事をしていくつもりですが……………」

そう答えると竣夜は走らせたペンを止めチラリと穂澄の顔を見る。

「……………じゃあ最後に一つ。尊と栞。後お前を入れて三人で遊ぶ時間はどれくらいだ？」

「まあ、曜日にもよりますが大体3〜5時間ぐらいでしかね。」

と今度は走らせたペンをデスクに置く竣夜。

「3〜5時間だと？」

穂澄が頷くと竣夜は更に難し顔をしてペンを指でグルグル回し始める。

30秒ほど回し続けた竣夜は手を止め資料にまた書き込んでいく。

「……………成る程な。よし、帰っていいぞ。」

「えっ？」

悩んでいたわりにはあっさりとした答えが出た事に声を上げてしまっ

とここで栞の約束事を思い出す。

「竣夜様。そう言えば栞お嬢様が今度開かれる創立記念祭にメイド喫茶をしたいのでメイド服を着る許可が欲しいと言っておりました。

「あつっ!?!」

穂澄の事を終え一息入れようとしていた竣夜は驚きのあまり持っていたコーヒーカップを落とし足に盛大にぶちまける。

「あいつらがメイド服なんか着たら学院の男子が狂喜乱舞するぞ」

「私もそう思います。」

コーヒーをふきおわった竣は暫く何かを考え込んでいたがふと顔を上げる。

「じゃあ栞には穂澄をつけるなら良いと言っておいてくれ。」

「えっ?何で私が?」

「……………お前もしかして気がついてないのか?」

竣夜は驚いた様子で穂澄を見る。

穂澄は気がついていないのかと言われても心当たりがないのだからはいと答えるしかない。竣夜は穂澄の答えを聞くとわざとらしく大きな溜息をつく。

「あのなあ。今までも執事は雇った事はあるんだよ。けどそういったに今みたいな質問してもお前以外は全員、一日1時間も喋ってないんだ。」

確かに一番最初の仕事の時栞にからかわれた後。尊に栞は良く執事



さんをからかうんですよ、的なことを言われた事があった。そこから考えると穂澄の前にも何人が執事は雇っていた事が解る。

「つまり、だな。お前は多分今までの執事の中で一番信頼されてるんだ。尊と栞に信頼されるぐらいなら大丈夫だろうと思って俺は今お前に栞に付き添うようにって言ったんだ。解ったらさっさと行け！ドナルド、送ってけ。」

鈍感すぎる穂澄に苛立ったのか椅子から立ち上がり穂澄の手を掴むとドナルドにつかませそして、その豪華な部屋から追い出した。

「ドナルドさんは竣夜様にどれぐらい雇われているのですか？」

部屋を追い出された穂澄は帰りのエレベーターでドナルドに話しかけた。ドナルドは部屋を出てからずっと腕を後ろに組んで穂澄の横を歩いて一言も会話を交える事が無かった。流石に黒人となると穂澄的には免疫力がなくともこの限られた空間は息苦しい。

「H A H A H A、私八五年前グライ前ニコチラニ出稼ギニ来タ時ニボデイガードヲ探シテタ。竣夜様ト出会イ。ソノママ雇ワレタノデス。」

気さくに話すドナルド。これで白塗りの真っ赤な唇をしていたらまさならんらーなのになと少し思う穂澄。

「桂穂澄サン。私は دونالد・スプーランド。コレカラモヨロシク。」

「N Kのお絵かき歌に出てきそうな名前ですね。」

ツツコミどころ満載なこの人。これからもっとギリギリなネタが飛び出てきそうです少し恐ろしい。例えば母親のあだ名がミッーとか。私の友達、中国で青いタヌキの着ぐるミ着て働いてます。とか。

そんな話をしているとエレベーターが止まり扉が開く。

Donaldに押し出された穂澄はそのまま会社を出た。

「ソレデハ、マタ次ニ来ル時マデオ互イ頑張りマシヨウ！」

二人はそう約束して会社の前で別れた……………

## 第十四話 会社に行つて（後書き）

明日からまた学校です。宿題とかしてないけど、何とかなるかな？  
・・・投稿頑張ります。。。

## 第十五話 出会ってしまつて

竣夜の事を終え一息ついた穂澄は灯真に連絡をすると「特に大事なことは無いので今日はそのまま休みを取つて良いですよ」と言われた。

特にする事も無いのだがせっかく休みを貰えたので街を見てまわることにした。

借金を親父に押し付けられてからそろそろ二週間になろうとしていた。元々学費も自分で稼いでいた穂澄は当然遊ぶ時間。遊ぶ金などは持ち合わせておらず、よくよく考えるところしてノンビリと街を歩く事なんて多分母親が死んでからは初めてだと思う。

だがしかし困つた事も必然的に多くなる例えば執事服と言うのはスーツとは違い少し珍しい服なのだ。と言う訳で人混みを歩いていると凄く目立つのだ。歩いていると数人の若者は執事服と認識できらしくまるで珍しい物を見るような目でこちらを見てくる。(まあ、確かに珍しい物なのだが……)

これが秋葉原などだったらコスプレや従業員の服で通るのだが残念ながらこの街はそんな人は穂澄以外はいないのだ。

……それが一つ目だ。そして今。現在進行形で起きているもう一つの難関は……

「ここは……何処だ？」

先程から通行人の目が気になり人目のつかない裏道を通つたのが仇となつたか大通りの方角が分からなくなりすっかり道に迷つてしまつた。

「ま……まあ、携帯があるから灯真さんに今の居場所をGPSで調べて貰えば……」

ピー

灯真に電話を掛けようと携帯を取り出すと何やら不吉な音が穂澄の耳に届く。

穂澄が携帯の液晶画面を見ると

『バッテリーを充電してくれないと電源切っちゃうんだから!!』

ブツンッ

「ちょ、おまつ!? 何でツンデレ!? せめて何故ここでツンデレをチヨイスしたかを言ってから電源きれろー!!」

穂澄の盛大な突っ込みも虚しく携帯は動かなくなった……………

暫く穂澄は見覚えのない道を歩いていた。

しかし道を知らないだけで何で心細くなるのだろうか?

とここで穂澄は足を止める。何故止めるかと言うとそこに止まる理由があるからだ。

その理由とは……………

「人が倒れている……………」

嫌な予感がしたが流石に倒れている人を放って通りさるほど穂澄は太い神経を持ち合わせていない。

「だ、大丈夫ですか？」

恐る恐る倒れている人に話しかける。とその人は唸りながらゆっくりと起き上がった。

見た目は穂澄より若く少し長めの黒髪の少女。しかしそれより気になったのはその少女の着ている服が血で滲んでいたことだ。

「あ、あの？だ、大丈夫ですか？」

「血のことでしたら大丈夫です。……スミマセン、少し立つのが辛いので肩を貸して頂けませんか？」

少女は穂澄の体にしがみつき生まれたての小鹿みたいな感じの足取りで何とか立ち上がる。よく見ると服で隠れていて見えにけったが体中包帯だらけであった。

「どうしてこんな怪我をしているんですか！？もう一人じゃ歩けないんですよ！」

穂澄が少し強く言うと少女は頬を赤く染めて惚けた目で穂澄を見tekita。

「どうしてこんな怪我をしたかって聞いているんですよ！」

更に強く言うと少女はまた頬を赤く染める。とふいに何かを言ってきた。

「私の彼氏はSなんです。」

「・・・・・・・・・・はっ?」

「私の彼氏は特殊な性癖の持ち主で私に暴力を加えることで性的興奮を得ているのです。」

「だ、ただどここまで酷いと流石に傷害事件になります。今ならまだ傷も癒えるでしょう?」

「良いんですよ。私の同意の上です。ですのでそれに私はいじめられるのが好きなようですから。」

なんと言う衝撃的告白。いじめられるのが好きなんて普通通りかかった見ず知らずの男性に言う言葉ではない。

と言うか。一秒でも早くこの場から全力疾走で逃げたい気分です・・・・

「そ、そんなんですか。それじゃあ俺は用事があるので。」

少女の顔を見ないように踵を返し来た道に戻る

「ちょっと待って。」

ことが出来なかった。少女は穂澄の足を掴み穂澄は掴まれた事によりバランスを崩し盛大にこけた。

「何するんですか!」

「包帯巻いてください。」

鼻をぶつけた穂澄はその鼻をおさえながら振り向くと少女は何処からか出した包帯を穂澄の手に握らした。

もちろん穂澄は一刻も早くこの場から立ち去りたい、が穂澄は見てしまった。少女の助けを求めるその目を……

「……わかりました。怪我をしている所を出してください。」

その時穂澄は小さな溜息を少女に聞こえないようにつけた。

「そ、そんな……こんな路上で、外で脱げだなんて……」

少女は顔を真っ赤に染めしかし光悦とした顔をしていた。

穂澄はそんな彼女を無視してまず、腕から包帯を巻いていた。

何故突っ込まないかと言うとそれはもう、疲れるから。ただそれだけ。

それから暫くして包帯を巻き終わると何とまあ、見事な半身ミイラの出来上がり

いやいや、ふざけてる場合じゃないよ。こんな街で歩いていたら絶対捕まるよ。って言うかそんな事どうでも良いからさっさと帰ろうよ、俺。

何だかんだ言って付き合ってしまう自分に嫌悪していると。



「ありがとう、私は霧山霧音<sup>きりやまぎりおとね</sup>。あなたは何て言うの？」

「すみません。知らない人に名前教えちゃいけないって母にきつく言われてるんで……」

「ふうん桂穂澄くんか。」

穂澄の言葉を見殺しただけではなくいつの間にかポケットに入れてあったはずの学院の生徒証がすでに霧音の手の内にあった。

「それじゃあ、またいつか」

霧音はペコリと頭を下げたと思うと体を翻し全力失踪で逃げ去った。

もちろん手には穂澄の生徒証が握られてある。

「ちよつ。待て！ドロボー！」

「次にあったときに返しますよー」

そうして霧音は視界から消えていった……

「た、ただいま帰りました。」

穂澄が玄関の扉を開けて中に入ってくる。

今、時刻は夜の十時。ちなみに竣夜の用事が済んだのは昼前。霧音に生徒証を奪われたその後。取り合えず自分が迷子になったと言う事実を認め近くの民家にここはどこかなどを聞き始めた。

しかしそれが間違いだったかもしれない。手ごろの家のインターフォンを押すと出てきたのは自らを100歳越えと言うお婆ちゃん。とり合えず交番が何処にあるかを聞いた……。はずだったが、いつの間にか先に亡くなったおじいさんの話やら戦前、戦後の話やらを聞かされて気付いた頃にはすでに七時をまわっていた。しかもそれだけでは終わらず、ずるずると時間は過ぎていった。

「おお、穂澄くん、遅いよお。ご飯作ってよ！」

真琴が今までで一番早いスピードで走って、穂澄の腰辺りにタックルする。

「ふうっ!？」

もちろんそんな攻撃予想していない穂澄はそのまま玄関まで吹っ飛ばされ頭をドアノブに強打する。視界の端に星が回っていた気がし

ていたがここで気にする所はそこではない。

「と、灯真さんは、居ないのですか？」

鳩尾にタツクルを喰らい酸欠気味の身体を抑えて一番の疑問を聞く、

「灯真は竣夜に呼ばれてどっか言っちゃったんだよ！」

「真琴さんは作れないんですか？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・」

2人の間に沈黙が流れる。

「ふつ。私は庭師。庭に命をかける女。小さい頃から外国へ行き庭芸を学び続けた、言わば庭師の英才教育を受けていたのよ！」

「・・・・・・・・・・つまり出来ないんですね。」

「はい。」

穂澄は小さく溜息をつきまだ痛む腰を押さえながらそのままキッチンへと向かった・・・・・・・・

## 第十五話 出会ってしまっ（後書き）

なんか疲れた50話で完結させるつもりで書いてたんだけど後三十五話……かけるかなあ？  
頑張ります。。。

## 第十六話 風邪をひいて（菜の場合）前編

櫻坂の屋敷に戻り、灯真が居ない事を聞いた穂澄はキッチンで少し遅い夕食を作っていた。

穂澄は料理が得意と言う訳ではないが、胸を張って出来ないと言う真琴よりは上手い自信があった。現に櫻坂の屋敷に来る前から自炊はそれなりにしていたのでまずくて食べれないという事はないのだ。

「ところで、灯真さんは何処に言ったんですか？」

ジャガイモの皮を剥いている穂澄が不意に隣で危ないながらも手伝う真琴に声をかけた。

「灯真はね、菜ちゃんが風邪になったから主治医に薬を貰って来るって言うってから帰ってこない。」

ザクツ！

穂澄は慣れた手つきで剥いていたジャガイモを取りこぼし替わりに自分の指をザククリと切ってしまう。

「いつつ！？って言うか、菜お嬢様風邪ひいたんですか！？」

初耳だ。まあ、今日一日屋敷に居なかったのだから初耳は当たり前と言えは当たり前ではあったが。

しかし冷静に考えるとしょうがない。何故かと言うと今は1月だ。特に昨日の夜は冷え込んだ。なのに露出度の高いメイド服なんて着ていたら屋敷の中が暖かくても風邪ぐらいひくであろう。しかしそう考えても穂澄はやはり納得できない事がある。

馬鹿は風邪ひかないって言うのに！？もしかして迷信なのかな？

「穂澄くん。なに考えてるかは聞かないけど多分凄く失礼だと思うよ雇い主に対してそれは……」

表情から察したのか、真琴は少し苦笑いを浮べる。

「それで尊お嬢様は？」

「尊ちゃんはさっきまで看病していたけど疲れて寝ちゃったよ。夕食はいらないって言ってたし大丈夫でしょう。」

「解りました。じゃあ俺はおかゆ作って菜お嬢様の所へ思っで行きますので、真琴さんは野菜でもかじっていてください。」

「えっ！？穂澄くん。今なんかすごく酷い事いわなかった！？」

しかし穂澄はそんな抗議を言ってくる真琴を無視しておかゆを作り始める。

土鍋に米と水突っ込んで、少し煮て塩入れて梅干五個ぐらい投入して、最後に鰹節！

先ほどの夕食を作るスピードとは大違いの速さでおかゆを作る穂澄。

「それでは、もって行きますので、真琴さんは出前でも頼んでください。」

「穂澄君ってさ本当はSなのかな！？」

やはり真琴の言うことなど聞く耳を持たない穂澄はさっさと菜の寝

室まで土鍋を持ちながら走っていった……………

コンコン。

「朶お嬢様、起きていますか？」

「……………ほ、すみ？起きてる。入って……………」

いつもと同じように聞こえるが少し弱々しい、やはり苦しいのか、許可をもらった朶澄はドアを開けてベッドの方へ向かう。

そこには寝巻き姿の朶が寝ていた。額には汗を溜め、息はいつもより荒かった。

「……………朶澄、お風呂入りたい。」

「ダメですよ。熱がある時は入れません。それよりおかゆ作ってききましたので食べてください。」

「……………ヤダ。」

風呂を断ったせいか頬を膨らませてそっぽを向く朶。

「食べないと熱は下がりませんよ。」

穂澄はベッドの横に置いてある台をベッドに設置し土鍋を置く。そしてそっぽを向いている栞を無理矢理起こし、座らせる。そして栞の手にさじを持たせる。

「・・・・・・・・フンッ」

「あたっ!?!」

栞はさじを穂澄に向かって投げつけさじはスコンッ和良好的音を立てて穂澄の額に直撃する。

「・・・・・・・・ヤダ!お腹すいてない。汗かいたー、お風呂入りたいー。」

熱で弱っているので暴れたりはないが無理難題を言い、駄々をこねる。

穂澄は小さく溜息をつき、床に落ちたさじを拾って蛇口でさじを洗う。

そしてベッドに戻ってくると栞はまた、反対側を向いて布団を被っている。しかし熱が高いのか布団を被っていても荒い息が聞こえてくる。

「お嬢様、布団にかぶってないで食べてくださいよ。」

栞を再度起こし穂澄はさじでおかゆをすくい栞の口の辺りに持って行く。

「ヤダ!」



栞が叫んだ瞬間、穂澄の手は栞に弾かれさじは床に落ちおかゆは床に散乱する。

プツンッ

その時穂澄の中で何かが切れた。

「……………おい、」

穂澄は限り無く低い声で栞を呼ぶ、少なくとも今までそんな声を出しているところを見た事がなかった栞は驚いて穂澄を見る。  
振り向くと同時に栞は胸倉を掴まれる。

「いい加減にしろ。自分の意見ばかり押し付けやがって！それなのに最終的には食べ物にも八つ当たりか！？俺に怒るのはまだ許せるけどな、食べ物に八つ当たりってどう言う事だ？我侭も対外にしろ！」

穂澄の目は少なくとも元旦に会った時とは別物で怖かった。もし始めてあった時こんな目をしていたら絶対雇うのを拒否していたであろう。

「あつ！す、すみません、お嬢様。気分が悪くて食べれないんですね。解りました、お腹が空きましたからいつでも良いので呼んでください。」

胸倉から手を離しさじを拾い散乱したおかゆを片付けた穂澄は土鍋を持つと出口に向かって歩き出した。

「……………待つて。」

出て行こうした穂澄に栞は服を掴み止まらせる。

「……………如何しましたか？」

立ち止まった、しかし穂澄はいつものように目を合わせてくれない。揺れる黒髪に阻まれ栞が目を見ようとしても見えない。

「……………うつ……………ひつく。」

「えっ？」

穂澄が驚き後ろを向くと栞は目を押さえ涙を流していた。

穂澄は土鍋を置くと直ぐに栞の元に駆け寄る。

「大丈夫ですか！？どこか痛い所でもあるんですか？」

やっと目を合わせた穂澄。その事に安心したのか、栞はねじが外れたかのように泣き出す。

「……………行かないで……………ご飯食べるから。ここにいて。」

穂澄の胸に飛び込んだ栞は痛いほどに服をつかみまた大声で泣き出した……………



「……………一緒に寝て。」

「……………いやいやいやっ!」

栞に掛け布団をかけられ腕を絡まれてくる。

「……………お休み。」

しかし栞は穂澄の言う事など無視してそのまま目を瞑って寝息を立て始めた。

寝息を立てたことを確認した穂澄はそのままベッドを抜け出そうとした……………が。

手と足を絡められて出る事が出来ない。

「お嬢様。一応女性ですので足をそんな風に使うのはいけないと思うのですが。」

「……………昔、兄様も私が風邪を引いた時こうして一緒に寝てくれたの。とても暖かった……………で、どうした?」

「い、いえ。」

そんな事言われて離してとは言えずそのままその日は一緒に寝ることになってしまった……………



第十六話 風邪をひいて（栞の場合）前編（後書き）

学力調査をこの前やったけど、全然だった。一応成績は普通だけど、そろそろ高校受験。小説書いていていいのかとこの頃考えます

まあ、何とかなるかな？

投稿頑張ります。。。

第十七話 風邪をひいて（穂澄の場合） 中編

穂澄は深い眠りから目を覚ました。特に夢を見ていたわけでもなくベッドが寝苦しかったわけでもない。

しかし何処か疲れている。と、言うかなんだか体がいつもより重く感じたのは事実だ。カーテンの隙間から朝日が丁度、目に入る。眩しくて窓ではない方のカーテン。つまり天蓋のカーテンに手をかけ、そして引く。

ただそれだけの動作なのにどうしても辛い。前にも何度か会った事のある倦怠感、これはもしかして……………

「ゴホツ……………風邪、ひいた？」

「……………三十九度ジャスト。これは栞ちゃんに貰ったね。」

真琴に額をポンツと叩かれる。それだけでも辛い。息をするだけで喉が焼けそうだ。

横では心配そうに穂澄を見つめる尊と居心地が悪そうにした完全に風邪を完治させた栞。袋から薬を取り出している真琴がいた。

「これ、灯真が貰って来た薬だからこれ飲んだらゆっくり寝てね。灯真がまた医者の方に行つたから、今日は私しか居ないの。と言つて訳で大人しくしててね。」

真琴は看病が面倒らしく目で『動くな』と訴えてくる。いつもならこんな事はしないがたぶん昨日の夕飯の時、放つて置かれたことに腹を立てているのであろう。

「さて、2人は学校でしょ！さつさと行つて！」

「で、でも穂澄さんが心配で・・・」

「・・・・・・・・それに穂澄が居ないと、学校怖い。」

なかなか渋つて動かない2人。

「つて言うか私が居ないと学校怖いって事は「私が居れば怖くない」というわけですか？」

まあ、そうなるであらう。2人は少し答えを渋るがゆっくりと頷く。そして、この行動が穂澄の執事魂(?)に火をつけた。

「ふふふ・・・・・・・・」

「あれっ?どうしたの穂澄くん。熱の上がりすぎて壊れちゃったかな?」

「ふふ・・・はーははははっ!こんな事で休むだと?否!私はお嬢様方に南国パラダイス行きを阻止してもらつた恩があります。これぐらいでギブアップ?否!さあ登校しましょう。」



穂澄はクローゼットから制服を取り出すと目の前に女性さんにんが居るのにもかかわらず執事服を脱ぎ捨て着替えだす。

一応、真琴が寸前のところで2人の目を隠してくれたが、その2人も穂澄が何をしていたのかはわかっていた。

クローゼットを開けてから僅か10秒足らず、制服を着てそして鞆を持つ。

もちろん顔色は肌色と言うより、土器色に近い……って言うか下手すると死にます。

「ほ、穂澄くん。落ち着いて、ね。いくら穂澄君が頑丈でも三十九度の熱で学校に行くなんて。」

しかし聞く耳を持たない穂澄は無言で尊、栞の腕を掴み、自室を出て行った。取り残されたのは真琴1人……

「ほ、穂澄さん。あ、熱い。無理しなくても良いんです。私たち2人でいきますから。」

「……無理しないで寝てていいの!!」

「いえいえ、お2人だけで学校に送り届けるという事。それはパンダの檻に笹を投げ込む事と同じです！パンダだってナメちゃあいやせんで！アイツもね愛らしい顔してるくせに迂闊に近づいたら殺られるんです。学校はそんな人ばかりなんです！そんなところにお

2人を行かせるなんてお父さん！許しませーん！！」

もう何がなんだかわからないがとり合えず、お仕事頑張ってるみたいです……………」

学校。いつもと同じ地獄に校門の前に到着し、二人の手を握ったまま校舎へと向かう穂澄。当然の事ながらいつも通り男子の目がそこから降り注ぐ。  
とここで……………」

「ほつすみい〜」

この声はやはり蛩だ。この禍々しい殺気を感じないのか、穂澄の間に合いに簡単に入ってしまう。

「あゝっ?」

「……………どどどどど、どうしたの？穂澄、今日はメツチャ殺気立ってるけど……………」

平常心を保とうとしているが声が震えていて怯えているのが目に見える。

「いや、今日は、体調が悪くて。」

「……………うん。あれ、女の子の口」

「違います！」

「・・・もしかして、熱あるの？お前。だから髪も黒く」

「それ以上、戯言まじごと言つならお前が中学生の時の秘密校内放送で全部暴露するぞ。」

穂澄は現役の不良に一睨み利かせ、そのまま学校内に行ってしまった・・・

階段を駆け上がり一年の教室に2人を送り届けるとそのまま特進クラスラスの教室までダッシュ。

階段を登ることに段々穂澄の顔色が悪くなっている気もしなくはないが、誰もその事について声はかけない。なぜかと言うと理由は簡単だ。

凄く怖い。

目が会つたら殺されそうな勢いの穂澄、階段を降りてくる生徒は全員端の方へ避けていく。

「おはようございます。」

時間ぎりぎりに教室の飛び込んだ穂澄。まだ、時間ではなかったがすでに教卓には教師がおり、生徒もみんな着席している状態であったので、今日室内の視線を一斉に浴びる。

もちろん散髪してからまだ一度も学校来ていないので初見の生徒達からは歓声上がる。

女子は黄色い声をあげ、男子も珍しいものを見るような目で穂澄を見る。しかし一番目に付くのは、穂澄の顔色が教室の奥から見ても悪いことがはっきり解るといふ事だ。

しかし妙な殺気に包まれている穂澄に誰か言い出す勇気を持たずクラス全員が息を呑んでいる。

穂澄も最初の一言だけでそれ以上喋ろうとせず自分の席につき、そして机に倒れこむように寄りかかる。

その時クラス全員はやはり体の調子が悪いんだということに気付く。

「か、桂。もし調子が悪いなら今日は早退しても良いんだぞ。」

「あ、っ？」

顔だけ起こした教師に話しかけんじゃねえよと言う感じの目で訴える。

教師は穂澄を無視してそのまま授業を始めることにした。

これは後から気付いた事なのだがその時、教師の足は少し震えていたという……

そして昼休み。弁当は灯真が昨日、穂澄が出かけた後用意して冷蔵庫に入れておいたらしくちゃんと鞆の中に入っていた。

ちなみに授業はほとんど覚えていない穂澄。教師も生徒も殺気を感じながら授業を受けていたのでひきつけを起こす人や保健室に逃げる生徒が続出したほどだ。

「この時間を抜ければ、後は下校だけだ。ふふふつ。誰もお嬢様達には指一本触れさせませんよ。」

目の前の椅子に向かって話しかける穂澄。しかし当然目の前にあるのは椅子だけだ。誰も座っては居ない。

穂澄にしか見えならしい。

話を終えた穂澄は弁当を持って立ち上がる。そして教室を出た。

廊下にはいつもと同じ男子生徒達が待ち伏せしていた。

「来たぞ！桂穂澄だ！行けえええー！」

穂澄が出て来た瞬間、男子生徒の波が突っ込んでくる。

「ちっ！」

もちろん穂澄はそれを避けるべく走り出した。

しかし熱のせいだ。いつもよりペースが遅い。直ぐ後ろに波が迫ってきた。

と、ここで穂澄が携帯を取り出す。

「おい、蛍か？今何処だ？」

どうやら相手は蛍らしい。

と携帯からは陽気な声が聞こえて来る。

『ん？今は購買にいるよー。なあいいか？よく聞け。なんとあの伝説の焼きソバパンアンコ添えが買えたんだよ！』

「今、特進クラスの廊下で男子生徒に追いかけてる。そんなゲテモノ食ってる暇あったら助ける！いいか？後10秒で来い。じゃないとここでお前の秘密を暴露するぞ。」

『えっ？ちよつと待て。購買から特進クラスの廊下って、走っても三十秒はかかるぞ！如何すれば二十秒のハンデ乗り越えるんだよ！』

「9・・・8・・・7・・・」

『わかった！わかったから、今から10秒にしろ。直ぐ行くから！』  
ブツンツ！そう言い電話は切れた。穂澄は荒い息の中とり合えず時間稼ぎをするべく、遠回りをして波を回避する。  
しかし息が荒い、目の前が少し歪んで見える。視界が狭い。などの末期症状に苦しむ穂澄。

「おい、来たぞ！まだ時間じゃないよな!？」

慌てて飛び出てきたのは蛭だ。穂澄のスピードに合わせて隣を走っている。

顔は真っ青だ。そんなに中学の秘密をばらされたくないのか。そこまで真剣だと逆に聞いてみたいものだ。

穂澄は汗だくの頬を制服で拭い、ニヤリと邪悪な笑みを浮べる。

「ああ、まだ時間じゃない。それじゃあ頼んだぞ!」

そう言った瞬間穂澄は蛭の制服を掴み、後ろの男子生徒の波の中へ押し出す。

バランスを失った蛭はそのまま波と衝突しそして男子生徒の波は衝突した事により先頭が倒れ、その後ろも倒れとドミノ倒しの様に倒れた。

「悪いな、蛭。今度団子作ってやるから勘弁してくれ。」

そういい残し穂澄は特進クラスの廊下から姿を消した。



第十七話 風邪をひいて（穂澄の場合）中編（後書き）

誰か私に感想を書いてください・・・

何か読者数は出てるけど誰も感想をくれないのでちょっと鬱気味・・・

・・・

でも、頑張ります。。。



## 第十八話 風邪をひいて（出会い）後編

「失礼します。」

昼休みになって暫く、額に汗を溜める穂澄が一年生の教室にまるでSPの様に転がりながら入ってきた。

その事により教室内の視線が一気に穂澄に集まる。

「ほ、穂澄さん。本当に大丈夫ですか？」

「……体、辛くない？」

「大丈夫です。敵は蛭に任してきましたからここは安全です。」

多分その時教室内の生徒は敵って誰！？と心の中で突っ込んだに違いない。

「それでは行きましょうか。」

穂澄は廊下に出て辺りを見回してから栞達を誘導する。

その時教室内の誰もが思ったであろう。

この人大丈夫か？と……

屋上はいつもどおり穂澄と栞と尊の三人であった。

時間は昼休み。しかし食事をしているのは誰もいない。安心したせいで集中力が切れたのか穂澄は糸の切れた人形の様に倒れ菜と尊はその看病をしていた。顔はやはり土器色だ。そろそろお迎えが来るのではないかと少し心配になったりもするが、今は生きてるので看病の方に集中する人。

「お嬢様方。私は大丈夫なので、お昼を食べてください。」

「ダメです。人の顔は土器色にはならないのに穂澄さんの顔土器色じゃないですか！」

「・・・・・・・・絶対安静！」

「し、しかしお昼ご飯を食べないと私としては仕事か？」

なんだ？視界が歪む。お嬢様達は何人にも見えるし、それに段々くら・・・・・・・・く。

「えっ？穂澄さん！」

「・・・・・・・・穂澄！」

声が聞こえる。頭では認識できているが体が反応してくれない。聞こえています。ただそれだけなのに言えない。

2人の心配する顔が目の端に写った。

そしてそのまま穂澄の意識は暗闇へと堕ちていった・・・・・・・・

BAD END!

「いやっ！死んでないからね！生きてるからね！！」

まだ十八話目。目標まで後三十二話！作者も頑張ってます

暗い意識の中。額に冷たいものが乗る。

気持ち良い。タオルかな？それに誰か手を握っていてくれる。  
かあさんが死んでからこんなこと一度もなかったからな……

「先生？これで良いのー？」

「ああ、OK、OK、良いんだよ！景気良くやれば。血管浮き出る  
ぐらいじゃ死なないよ。」

とその時。身の危険を感じ暗闇の中から飛び起きた穂澄。  
と、次の瞬間。自分の寝ていた場所に注射器の針がベッドにザック  
リと突き刺さる。ちなみに顔があった場所である。

「あっ！あぶっ！？」

急なことで声もまともに出ない。

とり合えずここがどこかだ。掛け布団がある以上屋上ではない事は確かだ。

薬品の臭い。そして暖房の効いたヌクヌクの部屋。そう、保健室だ。穂澄は保健室のベッドに寝かされていたのだ。

「ちっ！避けたか。」

隣には心配そうに手を握っている栞と尊。そしてその横に蛭。ちなみに片手に注射器を持っている。

しかも逆手で。

もちろん、今の避けたか。と言ったのも蛭だ。

「お嬢様すみません！お昼の用意も出来ずに倒れてしまっなんて・・・」

穂澄がベッドの上でわたわたとしながら弁当箱を探す。

「大丈夫だよ。もう四時だ。」

「えっ？」

その言葉に驚き保健室の壁にかけてある時計を見ると、短針はもう四時をさしていた。

そしてその声の主のを見た穂澄はベッドから転げ落ちる。何事かと栞たちは反対側に回り込み。穂澄を抱き起こす。が、その時の穂澄の顔は明らかに引きつっていた。

「しゅ、しゅしゅしゅしゅ！？秋水さん！何でここにいますか！？」

どうやら知り合いらしい。

「知り合いなのですか？」

「知ってるも何も！この人は俺の妹の主治医なんです！って事は真希菜もいるんですか！？」

明らかに怯える穂澄。そんな事はまるで他人事の様  
に頭をボリボリとかく自称主治医。

彼は叶秋水<sup>かのしゅうすい</sup>。二十六歳。真つ白な髪の毛は別に苦勞したわけではなく、染めていて。穂澄の妹真希菜の主治医をしている・・・はず。

「灯真に頼まれてな。お前を治してくれとね。身体はもう大丈夫だろう、薬飲ませたからな。」

確かにもう体のたるさや熱さなどは引いていた。

「って言うか穂澄さんって妹さんいたんだ・・・」

「・・・初知り」

そろそろ穂澄が執事になって一ヶ月が経とうとするがそんな話は聞いた事はなかった。そこにいた菜と尊は口をあけて驚いている。が、それよりも今は穂澄がソワソワして落ち着きがない事が目に留まった。

「どうした？トイレならあっちだぞ。」

「違います！あなたが居るって事は真希菜も此処に居るって事でしよう。」

明らかに妹に会うのに躊躇いを持つ穂澄。隣で蛍が呆れ顔をしているからして多分穂澄が戸惑っている理由を知っているのである。そして秋水もニヤニヤしている事からしてその理由を知っているであろう。

「呼んでやろうか？おーい、ま〜き〜な〜！」

「ヤメろ！大声を出すな！！今真希菜に会ったら」

ガラガラ

明らかに穂澄の方が大きな声を出してしまった。そして保健室の扉が開く。

そこにいたのは栞たちよりもう一回り小さい少女。今時の少女らしく髪は前の穂澄と同様明るい茶髪をしていた。

「先生？今私の名前を呼びましたか？」

「いやいや、名前を呼んだのはアイツだよ。」

秋水が少女に笑い穂澄を指差す。

もう大声を出して秋水を止めることは出来ない穂澄はとにかく少女の視界に入る前にベッドの下に入ろうとする、が。

ガシッ

制服の裾を蛍に掴まれて隠れない。

おまつ！？離せ！

団子はいらぬから兄妹の対面を喜べ！

以心伝心張りにアイコンタクトで意思を飛ばす。

明らかに昼間の腹いせであろう。顔は笑っていたが、その奥に隠れた表情は黒くあざ笑っていた。

「あっ！」

少女の音がする。恐る恐る穂澄が少女の方を見ると目が合う。

「に、兄様〜！」

少女は花が咲いた様な笑顔を見せ穂澄に走り寄って来る。

第三者から見れば感動の再会。しかし穂澄の顔はどんどん引きつっていく一方。

少女は穂澄に近づき、そして・・・飛んだ。いや、飛びついた。

「へブウツ!？」

鳩尾に綺麗に頭から突っ込む少女。穂澄は間抜けな声を上げる、が一応少女をしつかり抱きしめてやる。

「兄様！兄様！！お久しぶりです！！！」

「・・・ああ・・・真希・・・菜・・・いつも言っているが、会うたびに・・・飛びついてくるのはヤメろ。お前は胸に飛び込んでくるつもりでも身長差からして俺にとっては鳩尾なんだから、って言いかももう少し下だったたらもう、再起不能になるから、本当に勘弁してください・・・い・・・い・・・」

息絶えそうな穂澄は搾り出すような声で伝える。多分昔からこれが再会の挨拶みたいになっているのである。流石に鍛えていてもアしだけのスピードで突っ込んできたら誰でも痛いであろう。

真希菜を離し、蹲る穂澄に心配そうに駆け寄る栞たち。

「むう、ダメ！兄様に近づくな！！」

真希菜が穂澄と栞たちの間に割ってはいる。

明らかに嫉妬の顔だ。

「真希菜、ダメだろ。初対面の人には先ず挨拶だ。」

「ヤダ！真希菜。この人たち嫌い！」

しかし真希菜は頬を膨らませて栞たちからソツポを向いてしまう。

「それより、兄様！私、先生から許可貰ったからまた一緒に暮らせるんだよ！嬉しいですよ。」

「えっ？秋水さん、どう言う事ですか？」

「病気の進行を見る為の一時的な退院だ。」

「しかし今、俺は」

櫻坂の家に住んでいる。

そう言いたかった。が、真希菜の前で陸奥庵がなくなったとはどうしてもいえない。父親が俺に借金を押し付けて逃げたなんて口が裂



けてもいえない。

そう思うとやはり真希菜と一緒に暮らすのは無理があった。

「それより、もう下校の時間だ。さっさと出てけ。」

「えっ！どういうことですか！？」

返答するのが面倒になったのか秋水はそのまま保健室から穂澄たちを追い出し。そしてそのまま必然的に真希菜と一緒に帰る事になってしまった……

第十八話 風邪をひいて（出会い）後編（後書き）

この頃、腰が痛くてパソコンの前に座る事が出来なかった。若いのに腰が悪いのかな？と考える今日頃ごろ・・・  
投稿頑張ります。。。

## 第十九話 借金が増えてしまつて（前書き）

どうも作者です。

初めての前書きですがどうしても言いたかつた事があるので言わせてください。

執事になる50の方法で感想をくれた十五歳主婦よりさん、夜さんありがとうございます、これからも頑張りやす。

他の人も出来れば感想、&評価をしてくれたら幸いです。。。

## 第十九話 借金が増えてしまつて

とても困つていた。いやはや、それはもう今までの中で五番目ぐらいに困つていた。

まあ、たいした事無いと思う人も居るかもしれないがダメ親父と生活を続け拳句の果てには借金を押し付けられたなんて人生を送つてきて今の状況が人生で一番困難だと言うほどでもないのである。

「兄様。おんぶして！」

穂澄は駄々をこねる真希菜を背負い栞と尊の四人で帰宅途中であつた。

元々体力の無い真希菜は穂澄に再会できた事ではしゃいだせいか暫く歩いていると穂澄の背中で小さな寝息を立て始めた。

「そう言えば真希菜ちゃんっていくつなんですか？」

「………小学三年生？（予想）」

栞と尊は穂澄の背中で眠っている真希菜を起こさない様に小さな声で話しかける。

「えっ？ああ………年齢ですか？いやっ。その………」

明らかに言いずらそうな穂澄。歩きながらなにやら考え事をしていくようだ。

そして決心がついたのか、不意に一言。

「中学三年です………」

一瞬。本当に一瞬、栞と尊の顔が引きつった気がした。そして足も止まってしまう。

真希菜は体躯的には栞達より一回りか二回り小さい、そして何より真希菜の必要以上に高い兄への独身欲。

これは小さい頃子供に夢を聞いたとき『おとーさんのお嫁さん。』  
『的な感じの無垢な心。つまり真希菜もまだ年端も行かない子供だと思  
い、まあ目を瞑ってきたが………中学三年って………』

「今年真希菜ちゃんって受験の年なんですか？」

「………14歳？」

「はい、今年受験で、今は15歳です………」

15歳。つまりそれは栞たちと同じ年と言うことだ。

(ちなみに栞たちは二月生まれ。)

その事でシヨツクを隠せないのか顔を少し青ざめる2人。

「まあ、人にはそれぞれの愛の形って言うものがあるし………」

「………うん、私たちだって竣夜兄様の事好きだし………  
………」

「お2人とも無理にフォローしなくて良いです。逆に悲しくなるので  
気持ちだけで結構です………」

明らかに下手なフォローを入れる2人。心なしか先ほどより心の距  
離的なものが離れている気がする。いや、マジで、本当に。

そのまま3人(+1)はそのまま気まずい雰囲気<sup>かも</sup>を醸し出しながら

帰宅への道を歩いていった……

「ただいま、帰りました。」

気まずい雰囲気を抜け出した穂澄は溜息を一つ。  
櫻坂の家に来てしまっただけでまだ背中で寝ている真希菜の顔を見る。

まず灯真さんに言わないとな。

一応栞たちは真希菜の歳の話をする前にO・Kを出してくれていたが流石に灯真に無断で真希菜を櫻坂の家置いて貰うのには気が引けた。

そしてそのまま真希菜を背負ったまま穂澄は食堂へと歩を進めた。  
時刻は七時過ぎ、考え事をしている間に栞たちは着替えと手洗いを済ませ既に食堂の自分の席についていた。しかし食事をしている様子は無い。

ちなみにここでは七時以降ならば食事が並べられているので2人は座っている場合いつもは食事を始めているはずであった。しかし2人は食事をしていない。だが廊下から少し見えるテーブルにはしっかりと食事が並んでいるから、食べれないというわけでは無さそうだ。つまり、食べる雰囲気ではないということなのか？

穂澄が疑問を抱きながら食堂に入ろうとしたその時

「3000万を肩代わりしてくださった事は感謝します。しかし3000万返せばもう穂澄はここで働く理由もありませんよね。」

穂澄は足を止め瞬時に食堂からは視角に入る廊下側へと身を隠した。聞き覚えのある声、凜とした表情。黒髪を一つに束ね、レディーススーツを着こなしている女性。

そうあの人は穂澄の姉、桂凜かつらりんであった。

「ここに3000万の小切手があります。これで穂澄は自由ですね。さあ穂澄を返してください！」

食堂を覗くと強張った顔の栞と尊、苦虫を噛み潰したような顔をしている真琴、そして冷静を保っているがどこかいつもより笑顔が暗い灯真。

凜は灯真に3000万と書かれた小切手を渡す。

「どうして穂澄君を返して欲しいと？」

まるで何かの時間稼ぎをしているのだろうか。いつもの冷静な灯真が安易な質問をする。

凜もその事に気がついたのか怪訝な顔をするがすぐに凜とした表情を取り戻しそして言った。

「私は真希菜の治療の為に穂澄をあのだメ男の所に置いて行ってしまった。そして穂澄は特進クラスで成績を維持しつつ寝る間も惜しんで毎日バイトの日々……。私はそんな穂澄が可哀想でずっと自分を憎んでいました。そしてお金を貯めて穂澄と一緒に暮らす為、陸奥庵に言ったら既に売却済みで……。そして秋水さんから今日此処に穂澄が働いていると聞き来ました。幸いここには櫻坂の人が肩代わりしてくれた3000万が丁度あります。これで穂澄には

学業に専念してもらうつもりです。」

しっかりとした口調で言う凧。その言葉を聞いた穂澄は何故か息を呑んだ。多分緊張していたのであろう。

執事を辞めれる。普通に暮らせる。

頭の中でその言葉が駆け巡る。しかしそれと同時に心臓が痛いほどに高鳴った。

理由はわからない。もしかしたら自分は辞めたくないのか？と考える。確かに肩代わりをしてもらった事は感謝している。その恩を少しでも返そうと今日まで一生懸命仕事をしてきたのだから。しかし3000万を返せば肩代わりをして貰っていた金は全て返せる。そんなことを考えていると後ろで声がする。

「んんん？兄様どうしたの。怖い顔して？」

その言葉は食堂にも聞こえたのであろう。続いて話し続けていた凧の言葉が聞こえなくなっていた。穂澄は真希菜の口を押さえるが既に遅かった。

「穂澄！」

食堂から出て来た凧は穂澄を抱きしめる。目尻には涙を浮かべたいっぱい抱きしめる。

「ゴメンね。今まで辛い思いをさせてしまって……………」

「ね、姉さん。俺」



「穂澄君。ちよつと来てくれませんか？」

穂澄が何か言おうとした時灯真が言葉を遮る。凜は穂澄に抱きついていて見えないが穂澄を見る灯真の目は真剣そのものであった。穂澄は小さく頷き凜と連れて席につく。

「穂澄さん。もしかして辞められてしまうのですか？」

「………穂澄。」

2人が今にも泣き出しそうな顔でこちらを見てくる。

「灯真さん。と言いましたね。3000万は返しました。これで穂澄が此処に居る理由もありません。契約書を渡してください。」

ついに灯真も苦虫を噛み潰したような表情に変わる。穂澄はこんなに追い詰められた灯真を見たのは始めてであった。

運動から家事まで何でもこなしてしまう灯真は今まで平然としてきていたのでこんな顔は見た事は無かった。それだけ今の状態が不利と言えよう。

菜も尊も穂澄には辞めてほしくないと願っている。だからそれを知っている灯真は真剣に向き合っているのである。

「ほ、穂澄君はどうなんですか？」

灯真らしくない逃げ腰だ。しかし穂澄にもわからない。辞めたくないと思っっているのだろうがそう口に出してはいえない。そしてこの返答を読んでいたかのように凜が口を開く。

「必要ないわ。借金は返した。もう此処にはいる理由が無い。それ

だけの事。行きましよう穂澄、これ以上は無駄だわ。」

穂澄の手を取って立ち上がる凜。そして穂澄はその手に引っ張られて立ち上がってしまう。

振り払う事はできるがただ一言。『俺はここで執事がしたい』それだけの言葉が出ない。どうしても言いなりになってしまう。そうして歩き出し、食堂を出ようとした。

「Hey, cute girl! チョットタンマネ。」

食堂の入口に立ちふさがったのはドナルド。

「なっ！何ですか！？私たちはもう此処には様は」

「いえいえ、あるんですよ。桂凜さん。」

出てきたのはスーツを着て不敵笑う青年。

「しゅ、竣夜様!?!」

そう出てきたのは竣夜。そして指をパチンツと鳴らすとドナルドが凜と穂澄を持ち上げそのまま先ほど座っていた席に座らされる。

そして竣夜は向かえの席に座った。その顔は不敵にそして今までで一番良い笑顔で笑っていた。

「すみませんが穂澄君を返すわけには行きません。」

「なっ！何故です！私はちゃんと3000万。」

「確かに私どもはそれを肩代わりしそしてその3000万で穂澄さ

んが押し付けられた借金はチャラです。」

「な、ならっ！」

「押し付けられた借金はね。」

まさに悪役の笑み。穂澄はその笑みを見て背筋がゾツとするのを感じた。楽しんでいるのかは知らないがとても生き生きとし喋る竣夜。そして再び指を鳴らす竣夜。ドナルドは懐から紙の束を凜に手渡す。

「じ、これは！」

「はい、食事代、電気代、光熱費、制服費、娯楽費、学院の授業料、仕事について三日目に壊した皿……etc。合計2000+1000万。もし穂澄君を返して欲しいのであればこれを払って下さい。」

つまり今払った3000万に+3000万=6000万払えと竣夜は言っているのだ。

凜の顔がどんどん青ざめていく。

「し、しかし。この+1000万の記載は何処にも」

「ああ、それでしたからある人に融資を頼まれて、団子屋の再建の為。」

「えっ？それって……」

「ええ、あなた方のお父様です。今は酒もタバコもギャンブルもお辞めになって団子作りをしていますよ。まあ、融資金は穂澄さんに

押し付けている所は変わりませんが。」

「そ、そんなの認めない！穂澄は連れて帰ります！」

「そんなのは認めないのはこつちです。借金をまだ返していないのに執事を連れて逃げるのか？ふざけるな。穂澄を返して欲しいのであれば残り3000万持って来い！」

竣夜が立ち上がりドスの効いた声で凜を脅す。

パチンッ

本日三回目の指鳴らし、それは・・・

「お帰りだ。 دونالد、丁重にお返ししろ。」

「了解シマシタ。」

「えっ！待ちなさい、穂澄！」

Donaldに抱えられた凜と真希菜はそのまま櫻坂の家から追い出された・・・

「穂澄さん！」

「穂澄！」

栞と尊が泣きながら穂澄に抱きついてくる。  
竣夜は溜息をつきネクタイを緩める。

「あ、ありがとうございます、竣夜様。」

「ああ、別に良いって、妹達のお気に入りの執事を手放さずに済んだから、まあ、借金は増えたけど後5億3000万頑張れ。」

「はい、頑張り　　って？5億？」

おかしい、借金は+3000万のはずじゃあ……..  
穂澄は首を傾げドナルドが出していた紙を見る。確かに融資金を合わせて+3000万だ。  
って言うか5億って……..

「あの、5億って何ですか？」

「いやあね。さっき灯真から緊急の呼び出しが合ったから会議すっぽかして来ちゃったんだよ。そしてその案はボツになって会社は5億損したってこと　だ・か・ら。後5億3000万頑張って」

そう言い残し、竣夜は笑いながら家を後にした……..

「穂澄さんこれからもよろしく！」

「……..よろしく(一生)」

「えっ！ちよっとっ！5億って働いて返せる額じゃないですよー！」

夜。穂澄の声が夜空に響きめでたく執事続行！&借金+5億3000万円

ちなみに次の日ゲツソリと寝不足の穂澄が居たので理由を聞くと働きすぎの過労死する夢を見たと涙ながら語ったらしい……

## 第十九話 借金が増えてしまつて（後書き）

どうも作者です。前書きにも書きましたが感想をくれた方ありがとうございます。うございます。

と、ここで話は変わりますが今回の十九話、友達に見せたら『もう完結で良いんじゃない？』と言われました。いえいえ、一応五十話完結と言う事で書いておりますので大丈夫ですが、一応五十話完結の後もキャラ語り、アナザーストーリーなどを模索中・・・

まあ、今回の話をまとめると凜が不憫でしようがないと  
竣夜が凄くカッコイイと言う事です。結構この二人は好きなのでこれからもちよくちよく出そうかと思っています。

まあ、後書きなのに長くなつてしまったと言うツツコミはさておき、感想&評価待ってます。

それでは投稿頑張ります。。。

## 第二十話 誕生日パーティーにて

凜が櫻坂の家に乗り込んできて借金が増えてから早一週間……

・ 穂澄は増えた借金5億3000万を返すべく一層自分の身体にムチを打ち働いていた。

そして今日はその中でも比較的楽な仕事……と想像していたのも一瞬であった事をこの行事が終わった後に知る事になるとは穂澄はまだ気付いていなかった……

『櫻坂栞、櫻坂尊誕生日パーティー』

そう書かれた横断幕の下櫻坂気の庭では栞たちの誕生日パーティーが開かれていた。

当初親戚と家族、そして灯真、穂澄、真琴だけで祝おうと思って居たらしいのだが親戚が次々と用事でキャンセルの知らせが届き人数的に合わなくなってしまったので急遽、学院の友達を誘う事になった。

穂澄的には自分が執事をやっている事を知られたくないのだが灯真に『それでは今年のパーティーは無いですね……お2人とも楽しみにしていたのに……いや！良いんです。穂澄さんのことが学院にばれたら困ると言えばお二人も泣きながら許してくださいと……  
……etc』

などといった間にか断り辛い雰囲気になってしまっ始まってしまったこの誕生日パーティー。

とり合えず穂澄が知っている顔触れは蛭と愁寺と奉里だけであったので大丈夫であろう。この3人は穂澄の友達ではないかと思うが蛭



は毎朝登校時に会っているので親しくなり、奉里は元々同じクラス  
だったらしい。(気付いていなかったが)  
そして奉里の兄、穂澄の友達と言う事で愁寺も誘われたと言う事で  
あった。

後は学院の一年生と竣夜様、ドナルドぐらいで少し変装すればバレ  
る事は無かった。  
が、しかし

「穂澄さん！」

「……………穂澄ー！」

大声でこちらに手を振りながら走ってくる今日の主役達。

「はい、なんでしょう。飲み物でしたら、どうぞ。」

冷静を装っているが心の中では絶叫する穂澄。瞬時に用意してあつ  
たメガネを掛けて顔をわかりづらくする作戦を決行した。

そしてステンレスのお盆(?)に置いてあつたジュースを二人に手  
渡す穂澄。

「違います、これ預かっています。」

「……………生徒証。」

穂澄に手渡されたのは紛れも無く穂澄の生徒証。前に竣夜の会社に  
寄った帰りにM女に盗まれた生徒証。

「………」

「そう、来ていますよ。穂澄くん。」

後ろから声を掛けられ一瞬にして戦闘態勢を取った穂澄。もう明らかに来客の目は穂澄に向いていた、がそんな事は気付いていない。穂澄の目は目の前にいる女に向いていたから。

頭に包帯右手は布で吊っており、座っているのは車椅子。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言おうとした。

よくも生徒証を盗んだな！あの後大変だったんだぞ！としかしその前に聞きたいことが霧音を見て思ってしまった。

「如何したんですか？その怪我。」

「私がああなたの生徒証を預かった後、彼氏の所に行ったら生徒証を持っているところを見られて『俺以外の男の物を持つんじゃないよ！』と言われ散々暴行」

暴行　多分そう続いたのだろうが、誕生日パーティーが開かれている場所では少しヘビー過ぎる話。穂澄は慌てて霧音の口を塞いだ。

「ヤメろ、その話は今此処ではヘビー過ぎる。って言うか俺より大変な目にあってたんですね！」

朶たちに聞こえないように霧音だけに聞こえる声で喋る穂澄。そう言うとは何処か光悦とした表情を浮べる霧音に穂澄は後ろへ飛び退く。何か今一瞬。いや、本当に一瞬、S心が芽生えそうになった自分に少し怖くなる穂澄・・・

「穂澄さん。紹介するね。こちらは霧山霧音ちゃん。私たちのクラスメイトなの。」

「……………おとMOだち」

「言葉の中に無理矢理Mを入れるのは辞めてくれませんか。」

穂澄はこの数分でどつと疲れたような気がする。とり合えず理由を取り繕ってその場から離れたは良いがこのパーティーがまだ続くと思うとゾツとする。

その後は料理の片付け、新しい料理を出すなどをしてそれなりに有意義な時間が過ぎていった。栞たちはそれぞれの友達と話をして盛り上がっている。と、ふと、ここで少し穂澄は思った。

女子より男子の比率が高いのだ。特に男好きと言うわけでもない二人が男子をこんなに呼ぶであろうか。それどころか、穂澄は学院に再び通い出してから一度も栞たちが男子生徒と話をしている所を見た事は無かった。

「まあ、それ程でも気にする事はないか……………」

そう思い穂澄は新しいジューズを持ってくるため邸の方へ向かっていった。と、その時声が聞こえて来た。

「俺と付き合ってくれないか？」

穂澄は足を止めて好奇心からかそちらの方を見てしまうとそこには男子生徒と尊が邸の陰になる場所に隠れていた。

どうやら尊が告白されたらしい。相手は…………どこかで見た事あるような。

「ありゃ、サッカー部の奴だよ。ほら、この前選抜に選ばれてテレビに出てた。」

「ああ、ナルほ？・・・ど！」

後ろに居たのは蛭。何処からか持ってきたアイスの棒を加えながら尊たちの方を見ている。

「今日はアイス何て出してないぞ。何処で見つけてきたんだ。」

「冷蔵庫に入ってた。」

「勝手に人ん家の冷蔵庫開けんな！」

2人で小声で争っていると、尊の方で進展が合ったらしい。声が聞こえる。

「すみません。私好きな人が居るんです。そ、それじゃあ・・・」

立ち去ろうとする尊の手をその男子生徒は掴んだ。

「な、何で！そんな奴より俺の方が良いに決まってるだろ。俺だったら大事にするし。」

尊を壁に押し付けてもう片方の手も握る。

「い、痛い。離してください。」

しかし男子生徒は離す気配はない。それどころか無言で顔を近づけ

キスをしようとしている。尊は涙ぐみながらそれを阻止しようと頭を振り回すが手を抑え付けられている時点でそんな事は不可能だ。男子生徒の顔が近づいて、後数センチと迫る。

「おい！」

男子生徒が声に驚いて振り向く前に蛍がその男子生徒を殴りつける。その男子生徒は思わぬ攻撃を受けそのまま地面に倒れこんだ。

「嫌がつてんだろ。さっさと帰れ！」

蛍が少しドスの聞いた声を出すと男子生徒はだらしなくそのまま逃げていった。

「お嬢様、大丈夫ですか。」

穂澄は今にも倒れそうな尊に駆け寄った。青ざめてはいる様だが助かったと思ったのか笑みがこぼれる。

「蛍さんありがとうございます。穂澄さんも、もう大丈夫ですから。」

尊はそう言い穂澄の手を借りず立ち上がった。しかし何処か足が覚束ない。

そんな尊を心配したのか蛍が近づき。

「尊ちゃん。俺と一緒に話さない？そうすればまた、楽しくなれるからさ！」

蛍はふら付いている尊に手を貸す。

尊も蛍の笑顔で少し気が楽になったのかそのままパーティーに戻っていった。

穂澄はとり合えず、機転を利かしてくれた蛍に感謝し、安心したのかその場で小さく溜息をついたのであった……

パーティーも終わりに近づきチラホラと帰る人も出てきたこと穂澄は仕事を済ませたのでパーティーから少しはなれて所の芝生で小休止していた。

とそこに音も無く朧が在られたのであった。

隣に座り一言も喋らない朧。ちょっと怖いのがあったのかと思いついてみる事にしたが

「ほすみいゝキスさせろ。」

「ああ、キスですか。それぐらいなら……って何言ってるんですか!？」

穂澄は近づいてくる朧に対し慌てて距離をとる。と暗がりでもわかるぐらい朧の頬は赤い事に気がつく。

そして片手に紙コップ。しかしパーティーで出していたのはグラスであったので朧が紙コップを持っているはずが無い。穂澄はまさかと思いついて朧からコップを取ると、

「これって、お酒じゃないですか！？どうしてこんな物が。」

「ほたるくんに貰ったの。キスさせる。」

穂澄がガツクリとうな垂れる、多分尊を元氣付けるためにしたことなのだがそれが菜の手に渡りそして今、穂澄が絡まれているのである。って言うか尊も酒は飲んではいけません。

「聞いているのか？穂澄。キスさせる。」

「お嬢様、語尾にキスさせるが定着してますよ！？」

これはなんなのであろうか、穂澄も酒にはあまり詳しくはないがこれは酒乱なのか？いや、どう考えてもキス魔か・・・いや、酒乱がキス魔になるのか？ああ、もうどっちでも良い。今重要なのはここでどう切り抜けるかだ。

とり合えず穂澄は菜から距離を取る。と・・・

「うっ・・・ひっく」

「何で泣くんですか！」

「らってえ、ほすみが私のこと避けるから、私のこと嫌いなんらっ  
て」

もはや呂律すら回っていない。って言うか酒乱の泣き上戸ってどんだけ難しいんだよ。

「大丈夫です。私は嫌ってなんか居ません。とり合えず、部屋に戻

りましょう。」

「やだあ！キスさせる！」

駄々をこね始めた。しかたなく穂澄は栞の近くによりバタバタと暴れたせいで服についてしまった草を払う。

「キスさせる！」

「ダメですよ。そう言うのは結婚する人としかしちゃいけないんですよ。それにキスしたら妊娠しちゃいますよ。」

まるで何処かの幼稚園児に説教するかのごとく穂澄は言う。まあ、ぶつちやけ相手をしているのが面倒になったのかもしれない。

芝生に寝転んでいる栞を起こし背中の草を払う穂澄。

「じゃあ、結婚する。」

そして栞は一瞬の隙をつき穂澄を押し倒したそして唇を重ねる。場所がパーティーをしている場所から遠い関係で誰にも見られていないが、穂澄は生きた心地がしない。

「んん〜！」

何処にこんな力があるのか、まるでタコの吸盤の様に張り付いた栞の唇は穂澄から離れない。

しかし根気良く離そうとしたため少し離れそうに成った次の瞬間。栞は穂澄の首に片手を回し、そしてもう片方の手で穂澄の鼻をつまんで来た。

注)マジで窒息するので真似はしないでください。



それから二分ほど。穂澄は無呼吸でキスされ続けた。そろそろ意識が遠退き始めたころ。満足したのか栞は満面の笑みを浮べたまま鼻と口を解放する。

そして荒い息で空気を吸う穂澄。

今始めて穂澄は酸素のありがたみを知ったであろう……

「えへへへ結婚だあ」

凄く上機嫌な栞。だが押し倒されて下敷きになっている穂澄は酸欠で視界が歪んでいた。

ガサツ

とその時誰かの足音がし穂澄がそっちの方を向くと。

「穂澄さん……栞……」

そこには呆然と立ち尽くす尊が居た。虫は周りに居ない。他の所に言っているのか？

「ち、違つんです！尊お嬢様。これは。」

「るいです。」

「えっ！」

穂澄の良いわけの声の方が大きかったせいで聞き取れなかった。しかし次の瞬間穂澄は聞いたことを後悔する。

「ずるいです！私も穂澄さんとキスしたいですー！」

「はあっ!?!」

良く見ると頬が赤い尊。そして片手には紙コップ。

「啜ッッッッッッッ!!!!」

次の瞬間。尊が穂澄に向かってダイブしそのまま再び酸欠寸前までキスされたことは言うまでも無い……

## 第二十話 誕生日パーティーにて（後書き）

何か感想を貰ったせいか。テンションが上がりに二十話まで来てしまいました。

七話ぐらいで躓き、二ヶ月間投稿無しの苦難を乗り越えそれから十三話投稿。何だか自分的にも嬉しい限りです。

ああ、後思った事なんですが、話数を進めることに一話一話の話が長くなっている事に気がつきました。これからどんどん長くなると思つと五十話に辿りつく時にはどうなっているのであると思つ今日この頃。。。

投稿頑張ります。。。

## 第二十一話 誕生日パーティー後にて

「お2人共、もう寝てください！明日も学院へ行くんですよ！」

パーティーが終わり穂澄は酒でベロンベロンの2人に懷かれてしまった為。片づけが出来る状態ではなかった。まあ、そこは灯真が気を利かしてくれたのでまず、真琴に2人を入浴させた。

流石に風呂に入れば酔いも治りそのまま静かになってくれると思っていたのだが、真琴に二人を預けてから数十分キッチンでパーティーの後片付けをしていたらやつれた真琴が戻ってきた。今にも倒れそうな真琴を抱きかかえ理由を聞くとフロの中で雁字搦めにされた後、酸欠寸前までキスされたらしい。真琴の後ろには風呂に入っ少しは酔いが醒めたのか大人しくなった栞と尊がいた。

「穂澄さん。お水ください。」

「……………尊。これでいいんじゃない？」

テーブルの上に置いてあったペットボトル。

「あー！それは飲んじゃダメ！」

珍しく真琴が大声を出す時既に遅し2人は一本のペットボトルを半分ずつ飲み干した。

そして真琴の顔はどんどん青ざめ、変わりに栞と尊の顔はどんどん赤くなっていた。

「真琴さん。もしかしてあれは……………」

「うん、ウオツカ。」

注)ウオツカは酒の中でもアルコール度が40%以上の超級のお酒です。しかし味はせず子供でも一気飲みするぐらいは出来るらしい。だが小学生などが一気飲みしたら死にます。

「何でそんな物、ペットボトルに入れておくんですか！」

「だ、だって、灯真がお酒嫌いだから私が持っているところ見ると没収されちゃうんだよ！」

「はっ！そんな事よりも、お嬢様方大丈夫ですか!？」

幸いおいてあったペットボトルは200ml2人で仲良く半分ずつ飲んだのでまだマシであった。が、十六歳の、それも小柄な少女たちがウオツカを一気に飲んだのだ。はつきり言うとても大変な事である。

穂澄は抱きかかえていた真琴を手放しそのまま2人へ寄り添う。

「ほ、穂澄くん私の心配

「薬飲んでさっさと寝てください。」

「ヒドイッ！薄情だよ穂澄君、私ぐれちゃうよ!？」

「大丈夫ですか?さあ、早く寝ましょう。」

マルつきり真琴を無視してそのまま足取りが覚束ない2人を連れて穂澄はキッチンを後にした……

取り残された真琴はキッチンの隙間風に当たりながら身体を振るわ

せた。理由は寒いから、そして・・・

「あれ程酒の持ち込みは禁止と言っていたでしょう？」

それは限り無く静かに優しい声、だが後ろから漂ってくる気配は殺気。

その後真琴は灯真にきっちり怒られたのは言うまでも無い・・・

「穂澄さんって良い匂いしますね」

「肌も柔らかい。すりすり」

誕生日の日だから2人で寝ると言ってきた二人に穂澄は『それではどちらの部屋で？』と聞くと2人は間髪居れず『穂澄の部屋』と答えるのであった。と言う訳で今、穂澄の部屋で遊んでいる2人（正確には穂澄で遊んでいる2人。）

「穂澄、誕生日プレゼントは何くれるの？」

ふいに言う琴、尊の方も見ると期待で目を輝かせている。

「ええ、一応。手作りで団子を作っておりますが明日のお昼にでも

渡そうかと。」

「えへへ、お団子かあ。早く明日にならないかな？」

2人は満面の笑みを浮かべ笑っている。何だかこの2人を見ていると微笑ましい限りである。

しかしまだ顔の赤い2人であるからして多分酔いはまだ醒めていないのであろう。まあ、栞はともかく尊は酔っていないければ穂澄の部屋で足を投げ出し寛くわんぐなんて考えにくい事でもあった。

「それでは明日がありますのでお2人共今日はもう寝ましょう。」

時計を見ると既に時刻は日付が変わっていた。十六歳とはいえ灯真からあまり夜更かしはさせない様にと言われているので早く寝かせないといけない。とり合えず2人が穂澄の部屋から大人しく出て行くわけではないので此処で寝かせて、穂澄は二月の冷え込む応接室のソファで寝ようと思っている。

「わかったよ、穂澄さん。」

「うん、寝る。」

「えっ？」

以外に素直に言う事を聞く二人。穂澄は少し拍子抜けしたのは間抜けな声が漏れる。と言うよりここまで素直に言う事を聞いてくれたのであれば自分の部屋に行けと言っても言う事を聞いてくれたかもしれない。と今更ながら後悔する穂澄。

2人はそのまま穂澄のベッドの中に潜り込む。

「ほーすーみーさん」

「ほーすーみー」

2人がめっちゃこつちを向きながら掛け布団をめくり手招きしている。

これが狙いか！

まるで悪魔の誘惑のように二人は笑みを浮かべながら穂澄を誘っている。

穂澄は一瞬誘惑に負けそうになるが寸前の所で我に返り足を止めた。そして平常心を保ちながら気付かないふりをする穂澄。

「ど、どどどど、どうしたんですか？お2人共。」

「穂澄さ〜ん。挙動不審です。」

「わかつてるくせにい〜」

更に逆効果だったらしく2人は更に激しく手招きをしてくる。

そんな2人に逃げ道をなくしどうしようかと思っている穂澄。そして天の助けか、ただ運が良かったのかその時。

「ひいひいーっっっ!!」

下の階から真琴の悲鳴が聞こえてくる。多分ウォツカの事で灯真に怒られているのであろう。

まあ、いつもなら放って置く出来事なのだが今、穂澄にとってはこの状態を打開する為の最高のチャンスであったので。



「ああ、真琴さんの悲鳴が聞こえます！多分酒に酔った灯真さんが野獣の如く・・・etc」

そんな適当な理由を言い穂澄はとり合えずダツシユする。後ろから声が聞こえるが今はそんな事気にしている余裕はない。そのまま部屋を出る時扉の隣にある電気のスィッチを消し、ドアを閉め、そのまま階段を二段飛ばしに一階に向かっていった・・・

バンッ

勢い良く食堂のドアを開けて飛び込む。そして目の前にいた2人の人影。

うつ伏せに倒れて半べそをかいている真琴、その真琴を押さえつけ良い笑顔で背骨を押さえつけている灯真。

ゴキッベキッゴリゴリ

まさに骨に異常があつて当然と言う感じの音が食堂に響く。

「痛い痛い痛い痛い痛いッッッッッ！！！」

「じゃあこの痛みを骨に染み込ませて酒なんて持ち込まないようにしてやりますよ」

その前に背骨やら肋骨やらがなくなりそうな勢いであるとはいえない穂澄。

とその時痛みに悶えながら泣いている真琴の目が穂澄を捉える。

「ほ、穂澄く」

ん、助けて！

と続くであろう。しかしその言葉は灯真によって遮られ灯真からは『邪魔しないでくださいよ？』と言う感じの笑顔に向けてくる。が笑顔の裏には殺気のようなものが漂ってくる。

「H A H A H A 真琴さん。マッサージですか？良いですね〜それじゃあ！」

身体を反転させ食堂から出て行く穂澄。また、後ろから助けを求める声が聞こえるがここで助けたら痕が怖い事は明白である。

穂澄はそのまま応接室に向かい、そして就寝した……………

……………次の日、真琴の姿が無かった為、灯真に聞いてみると『通院しています』と笑顔で言われ少しゾツとした。



第二十一話 誕生日パーティー後にて（後書き）

どうも作者です。前々回ぐらいに前書きで感想&評価を待っていますと書いたら本当に来ました。

辰さん。どうもありがとうございます。

とても励みになっています。

それでは投稿頑張ります。。。

## 第二十二話 酒の影に騙されて

次の日。穂澄は恐る恐る自分の部屋を覗いていた。理由はもちろん昨夜の事が原因だ。普通は一日経てば酔いは醒めているはずだがウオツカを飲んだ事と昨日の弾け振りから見えて注意しすぎたと言う事はないであろう。そして扉を少し開け中を見ると案の定二人は穂澄のベットの所でスヤスヤと小さな寝息をたてていた。そして最善の注意を払い部屋の中に入る。そのまま天蓋のカーテンの中に入って肩を揺する。

「お二人共、朝です。おきてください。」

「うう〜ん」

「……………ぐ〜」

尊は目を擦りながら起き上がるが栞はそのまま寝息をたてたまま眠っている。

尊は目の前に穂澄がいることに気がつくと急に掛け布団の中に潜る。

「ど、どどどどどうして、穂澄さんが私の部屋にいるんですか!？」

「えっ? いや、ここは私の部屋ですしそれに私は執事ですから別に起こしに来ても不自然では……………」

尊は掛け布団から鼻から上だけ出して今の状況を確認する。その時点で尊の顔が茹蛸ゆでたこの様に真っ赤になっていた。

そして尊は此処は自分の部屋ではなく隣には栞が寝ていることにも気付いた。

「そ、そうだ。私、蛍さんからジュース貰ってそれからお風呂入って……あれっ？その後は……」

どうやら酔いが回っていた時の事は覚えていない。これなら昨日キスしたことも覚えていないであろう。

穂澄は尊に気付かれないように小さく溜息をついた。

「それより、私が起こしに来ると何か悪い事でもあるんですか？」

尊は穂澄がそう言った瞬間、忘れかけていた穂澄の事を思い出したのか、再度出かけていた掛け布団にまた顔を隠す。

「だ、だだだだっ！パジャマ姿だし髪だっ！ボサボサだし……  
……ううっ！！」

尊は掛け布団を蹴っ飛ばし、そして風のように穂澄の隣を通り抜けそのまま部屋から出て行った。

その姿は毛布を頭から被っていた。それほど寝起きの自分が見られたくないのか？と穂澄は思うが

それよりあの状態で走っていたら柱とかにぶつか

ガンツ！

「きゃっ！」

心配していた事が的中したのか、遠くで柱にぶつかったような音がしそしてそれと同時に尊の悲鳴が聞こえてきた。

まあ、取り合えず。尊は起きて仕度を始めたみたいなので、次は栞

を起こす番であった。

「栞お嬢様。おきてください。朝ですよー」

肩をポンポンツと叩くと栞が寝ぼけ眼でゆっくりと上半身だけ起きます。

穂澄が目線に入っているのだろうがまだ完全に覚醒していないのか挨拶はまだない。

「お嬢様、おはようございます。」

「……………!」

声を掛けられた事で穂澄の事を認識したのか反応があった。そして一言。

「結婚しよう。」

ゴトンツ

穂澄は目覚ましを設定していた時計を切る為に持っていたのだが今の一言で落としてしまった。

「なっ!?! ななななっ!?!」

お、覚えていた!?!

そんな事が穂澄の脳の中を駆け巡ると、

「……………ぐ」

再び目を瞑りポテンツと枕に頭を預ける栞。

「ね、寝言……だよ……な」

まるで自分に言い聞かせるように言う穂澄。流石に栞が昨日の事を覚えていたらこれからの栞への接し方に大きな支障が出る気がしてならなかった。

と、栞がいきなりガバツと起き上がった。

「……アイス食べたい。」

「えっ？」

「……頭痛い。アイス食べたい。」

「……あの、二つの共通点を読めないのですが？」

栞は尊と同じく布団を蹴つ飛ばし起き上がりクローゼットの中に入っていた。

もちろん、クローゼットの中は四次元空間……とかではないが小柄な栞が入るようなスペースはある。

そして寝ぼけ眼のまま再び出てくる。

「……穂澄の匂いしかない。」

「普通、服で判断しません！？そう言う事は」

栞は穂澄のその一喝で目が覚めたのか完全に目を開け。回りを見渡す。



そして再度穂澄と目が合った。

「……………」

「……………エッチ」

「何でっ!?!?」

栞はそう言つと穂澄の疑問には答えずにそのまま部屋を出て行ってしまった……………

そして食堂。

2人が出て行った後ベットメイクをしていた為少し時間が掛かったせいか、既に2人は食事を進めていた。既に着替えを済ませ髪もセットし制服を着ている2人の元に穂澄は近づいていく。

「おはようございます。お嬢様。」

「うう……。お、おはようございます。」

尊は再び顔を赤くしてパンをモソモソと口に運ぶ。

穂澄は栞の方を向くと栞は穂澄の顔をジッと見ているが答えない。

「おはようございますっ。」

再び言つと栞もやつと口を開いてくれた。

「…………おはよう」

何だ、さっきの事で怒っていた訳じゃあないのか……

「エロ澄くん。」

前言撤回ッッッッ!!

間違いなくさっきの事引きずっています、中佐!!

まあ、中佐つて誰と言つッッコミは無しとしよう。

今は真琴と尊から向けられている軽蔑の目を何とかするべきだ。

「いやいや、お2人共違いますよ。私は何にもして」

「……………穂澄はさっき私の寝起きを襲つて　なこ

としようとして私が悲鳴を上げようとしたら『いいのか？あの事、

学院でばらすぞ』つて脅され　」

「いやいやいやいやッ！なんですか!？　　つて!？それに

あの事つて何ですか!知りませんよ私は。ほらっ、2人もそんな目  
しないでください。」

さらに強い軽蔑の目を向けられ居心地が悪くなつてしまつ。

「お嬢様方、穂澄くんで遊ぶのもいいですがそろそろ登校しないと  
間に合いませんよ。」

「「「はい」」」

灯真がキッチンから出てきて三人に呼びかけると、

3人は揃って声をあげそして先ほどの軽蔑の目は消えていた。  
そして

「じゃあ行きましょっつ！穂澄さん」

「・・・・・・・・穂澄は朝ごはんいらないよね」

そう、わかっている人もいるかも知れないですか穂澄はまだ、朝ごはん食べていません。

「・・・・・・・・わかりました。私にはどうせ拒否権はありませんし、  
そんな笑顔にせられたら断る事なんて出来ませんよ・・・・・・・・」

そうしてそのまま穂澄は空腹のまま家を後にした・・・・・・・・

## 第二十二話 酒の影に騙されて（後書き）

どうも作者です。

サブタイトル、解りにくいと思いますが、これは一応酒の事を考えすぎた穂澄が痛い目にあつたとか、そんなことを思つて決めました。分かっている人もいるかもしれませんが、サブタイトルの『〜』と言つのはそろそろねた切れです……。と言つ訳で『〜』は三十話までにしてその後は普通で行きたいと思ひます。

つと、ここで言い忘れていた事がありました。十五歳主婦さんよりさんありがとうございました。

まさかりピーターになってくれるとは思つていなかったものでびっくりしました。

本当にありがとうございます。十五歳主婦よりさんを始め読者さんの為に、

投稿頑張ります。。。

## 第二十三話 陸奥庵について（前編）

「すぐく……空きました。」

「何がですか？」

「……お腹でしょ？」

徒歩で20分ほど歩く為一步一步がそのまま空腹の腹に響く。別に一食ぐらい食べなくても大丈夫ではないかとは思うが穂澄は昨日の昼からるくに食べていません。

理由は昼に団子作りを始め、完成したと思ったら灯真にパーティーの仕度を手伝ってくれと言われ、そのパーティーが始まったら始まったでウェイターのような仕事をさせられ、やっと休憩を貰い食事を貰おうと思ったら竣夜とドナルドに皿の物は全て食べられた後だったというわけだ。

まあ、その後も似たり寄ったりでパーティーの片づけをし、間違っ  
てウオツカを飲んでしまった2人を寝かしつけその後、食堂では一方的なプロレスが行われていた。

流石にそんな事をしている横で食事を出来るほど穂澄の神経は太くないわけで……そして今に至る……

「……穂澄、それよりお団子持ってきた？」

「そうですよ！今日のメインディッシュはお団子ですよ。」

「いや、お団子はどんなに頑張っても食後のオヤツですよ。」

菜と尊に挟まれ通学する穂澄。第三者から見ればこれほど羨ましい

事はない筈なのだが、生憎、今の穂澄はそんな嬉しさに浸っている  
気力も体力も無いのである。

「ほくすくみい〜！」

後ろから声がある。もちろん解っている。蛭だ。

あの、蛭だ！昨日2人に酒を飲み、穂澄に迷惑を掛けまくった相手、穂澄は糖分やらいろいろな物が不足している脳で考えていると怒りが何処からか沸々とこみ上げて来る。  
そして、

「死ねえツツツツ！！！！」

瞬時に身体を反転させ渾身の左ストレートが亮平の顔面に突き刺さった！

「……………ん？亮平??」

左ストレートを喰らい鼻から大量の血をまさに噴水の如く噴出しながら倒れこむ亮平。

「あつ。ごめん、人違いだった、テヘツ」

「テヘツ じゃないよ！俺はただ蛭のマネして後ろから近づいただけなのになんで鼻を陥没させられそうまでの勢いのパンチ喰らわなきゃならないの!?!」

「それは…………俺の後ろに」

「立ったから…………とか言つなよ！言ったら今度は俺の拳が飛ぶからな！」

思考を滅茶苦茶早いスピードで読む亮平。

「穂澄さん？この人は・・・」

「・・・・・・・・誰？」

穂澄に殴られて鼻からダラダラと血を流している（現在進行形）人物はすけのぼしりょうへい杉崎亮平。

注）初登場の様だがしつかりと一話に出ています。

「今、蛍の事を考えてたから後ろから蛍みたいな声を掛けられてっ  
い・・・・・・・・」

「まあ、別に良いけど・・・って言うか、どうなってるんだよ！？  
陸奥庵！」

陸奥庵とはもちろん穂澄の実家の団子屋の事。

「どうした？ゴキブリでも大量発生してたか？」

「違うよ！親父さんがまた商売を初めて大繁盛してるんだよ。さっ  
き見に行ったら取材まで受けてたし。」

何があつたか知らないけどどうやら完全に立ち直ったみたい  
だな親父は・・・

そう思いながらとり合えず穂澄はティッシュを取り出し亮平の鼻に  
詰める。

「おお、ありがとう。」

「まあ、いいさこの借りはいずれ返してもらおうから」

「まあ、この傷はお前がつけたんだがな」

「・・・・・・・・・・」

2人の中で暫しの沈黙。そして置いてきぼりされている2人の少女。

「さて、お嬢様方、さっさと学校に行かないと遅れてしまいますよ  
ー」

「ちよっ！ちよっと待てえい！？」

しかしそんな亮平の言葉も無視して歩き出す穂澄。

本当に息がピッタリである。それに栞たちから見ると穂澄はいつもより生き生きしている気もした。

やはり、亮平とは仲が良いのだろうか？

「何だ？ストーカー。どっかの時代劇みたいな呼び止め方しやがって。」

「いやいや、まずストーカーじゃないし、俺も学院の生徒だから通学路こつちだし！それに時代劇みたいな呼び止め方って言うのは突っ込まないで、実は俺もちよっぴり後悔してるんだから」

亮平が盛大に穂澄に突っ込む・・・がそこには穂澄の姿は無く良く見ると先の方に栞たちを抱えダッシュで逃げている穂澄の姿があった・・・・・・・・



「どうした？元気が無い。」

亮平からの逃走を振り切り朧たちを教室に送り届けた後そのまま男子達の追跡を振り切り特進クラスの自分の席へと腰を落ち着けたのであった。

「いや、良く考えると俺ってめっちゃハードは生活送ってんじゃないかなあって思ってる。」

「………何を今更。」

今頃気がついたのか？と、まるで嘲笑うかのごとくへっとな軽く笑われる穂澄。

まあ、学院の花とも言われている櫻坂姉妹を両手に持ち楽しそうに登校している青年を見れば嫉妬の目が集中する事は間違いないといえれば間違いない。

「そつえば陸奥庵が元に戻ったらしくて今、みんなが騒いでた。」

「そんなに、驚く事なのか？」

「だって、俺の親父が『陸奥』の文字を店に付ける事を許したぐらだからな。」

愁寺の父親はこの地域のほとんどを占めている人だった。近所のトラブルから病気がちのお年寄りの世話まで、何でもこなすまさに完璧超人であった。

その親父さんに認められた店は陸奥神社の『陸奥』を店の名前に入れて良いと決められていたらしい。

そして内の親父は愁寺の親父さんに認められる事をしたらしく正式に『陸奥』の二文字を手に入れたのだから

それに当時は愁寺の父親は気難しい事で有名で『陸奥』の二文字で店の評判を高めようとして来た人をことごとく追い返していてその中あっさりとその二文字を手に入れた親父は一時期英雄扱いまでされていたのだ。

「まあ、その内顔でも出すか・・・」

「んっ？何か言った？」

愁寺には聞こえない声でポツリと言う穂澄。

「いや、なんでもない。それより授業。始まるぞ。」

時刻は既に授業時間、そして少し遅れ気味に入ってきた教師。そして授業が始まった・・・

## 第二十三話 陸奥庵について（前編）（後書き）

どうも、作者です。この頃結構速いスピードで投稿中。嬉しい限りです。

それにしても、一話で出たきりの亮平がやっとの事でてきました。まあ、本当のことを言つと出そうとは思っていたが出すタイミングを外して如何しようかと悩んでいました（汗）。流石にいなかった事にするには亮平が不憫過ぎるし、と言う訳で蛭代わりに今回出演と言つ形になりました。

後言つことと言えば、今回は少し短めです。キリが良いところが今回の場所だった物で、これ以上書いてキリの良い所を探すととなるとやっぱり長くなるのでやめました。

まあ、マイペースに投稿頑張ります。。。

## 第二十四話 陸奥庵について（後編）

「それじゃあ、ここはテストに出すからしっかりと勉強しておけ、以上」

教師の言葉と同時にチャイムが鳴りそしてその瞬間数人の生徒が教室から飛び出して行った。

そう、今は昼休み。つまり、さっき走って出て行った生徒は購買に向かっていったのである。

まあ、穂澄には関係ないことだ。いつも通り灯真から渡された弁当を片手に栞たちの教室に向かおうとする。

つと。 団子忘れたら怒られるな。

そう思い鞆から昨日の昼に作って置いておいた団子を取り出す。ちなみに穂澄は一応陸奥庵の二代目と言う事であったので団子の腕は父親には劣るものの通常の団子よりは、はるかに美味しいものとなっていた。

穂澄が片手に弁当。もう片手に団子の重箱を持ち教室を出ようとしたその時。

「穂澄くん！」

声を掛けられる。振り向くとそこには特進クラスの女子3人がいた。穂澄は首を傾げる。

別に、悪いことしてない………よな？

「何ですか？」

「陸奥庵の事なんだけど。穂澄くんも手伝ったりしてるの？」

「いや、俺は今は陸奥庵には住んでない。」

「「「えっ？」「」」

女子三人組の声が重なる。

しまった！

穂澄はその時気がついた。

穂澄が今櫻坂の家で執事をしていることを知っているのは、虫、愁寺、亮平だけであった。そうなる場所でこの女子三人組に知られるとまずい事になる。特に口が軽い女子の事だ、一日も経たずに噂は学院中に広まるであろう。特に廊下で三列に並んでクラウチングスタートの形で待っている男達には知られたくはない。

「ああ、そいつは今櫻坂の家に」

「黙れッッッ！！」

軽率にも大声で言おうとした愁寺の頭に穂澄の上履きが投げつけられる。

愁寺はそんな事は思いもしない為スコーンツと良い音を響かせながら椅子事床に倒れ、そして穂澄は女子三人組の横を通り愁寺に耳打ちする。

「あのなあ？俺が執事やってるって事は秘密なんだよ！良いか？言

うなよ。言ったら今度奉里の前でお前の服全部剥ぎ取るぞ。」

「わかったから、離せ。つーかお前、自分の事守る為には何でもするな……」

まあ、当たり前と言えば当たり前である。

今でも十分きついこの生活がこれ以上きつくなったら、はっきり言うとな人生が嫌になってくる可能性が高くなる。

そんな事になったら執事の仕事など出来るはずが無い。

「あ、あの？穂澄くん。それで今は何処に住んでいるの？」

「えっ！？ああ、今は陸奥庵を離れてアパートで1人暮らししてるんだ。それじゃあ、俺は行くから。」

質問にさっさと答えた穂澄は愁寺に当たった上履きを回収するとそのまま特進クラスの教室を出て全力疾走して行った。

そしてもちろん待っていましたと言わんばかりにクラウチングスタートの構えをしていた生徒達が走って追いかけてくる。

「つーかお前たち、いつ飯食ってんだあー!?!」

全力で逃げ切る穂澄はそんなことを言いながら今日も仕事をこなす為、一年の教室に向かって行った……

「失礼しますっ」

そしていつも通り男子生徒たちを振り切り教室に辿り着いた穂澄はそのまま入ってくる。

と………

「穂澄さん、こっちです。」

「………早く来い。」

栞たちは他の女子3人ほどと床にシートを敷いて円を書く様に座り談笑していた。

穂澄もそのまま言われた通りに栞と尊の間に座らせてもらう。

「あの？屋上には行かないのですか？」

「はい、今日は奉里ちゃんから陸奥庵の話聞いて穂澄さんのお団子をみんなで食べようって話になったんです。」

「ああ、これですか？別に数も足りてると思いますし良いと思えますけどお二人は良いのですか？せっかくの誕生日プレゼントなのに。」

「………穂澄のお団子を2人占めには出来ない。良いの。」

まあ、この場合は尊もいるので栞が言った2人占めは間違いではないがなんとなくしっくりこない気がする。

シートを囲んでいるのは栞、尊。そして穂澄の目の前に奉里が座っていた。

「そう言えば、奉里はこのクラスだったんだな。」

「うん、ゴメンね。穂澄くんのお団子美味しいからつい、自慢しちゃって……………」

舌を出して笑う奉里。

まあ、ただの団子で此処まで喜んでもらえるのであれば良いであろう。

穂澄はシートの真ん中にその団子を置き開けると五十個ほどであるうか重箱に詰められていた。

「わあ、穂澄さん、美味しそうですね。」

「……………美味しそうだけど、もし奉里が団子の話しなかったらもしかして2人でこれ食べさせるつもりだったの？穂澄は。」

梨がポツリと穂澄だけに聞こえるように呟くが、穂澄は気にして入られない。とり合えず受け流しどうぞと勧める。

そしてその5人はお弁当の前にその団子を一つ取り口に運んで言った。

そして感想は……………

「美味しい〜」

「……………確かに」

「流石、穂澄くんだね」

大好評であった。久しぶりに作った物だったもので少し心配な面も



あつたが好評だったのでとり合えず安心した穂澄。

そしてその後5人は弁当を食べずに重箱に詰められた団子を全て平らげたそうであつた……

## 第二十四話 陸奥庵について（後編）（後書き）

投稿完了！

先ほど自分の作品を見ていたら気付いた事があった。

実は完結させたと思っていた作品が完結済みになっておらず長期連載中止の文字が出ててびっくり・・・と言っわけで完結に設定し直したら無事に完結済みになりました。。。

つと、話は変わりますが一昨日ハツと閃きで思いついた作品を書き投稿。。。

と、言う訳で疲れました。まあ、今はこっちの作品を6：4ぐらいで優先させているので多分投稿スピードはあんまり変わりません。

と言う訳で

投稿頑張ります。。。

## 第二十五話 S真について

昼休みの団子は好評で良かったが弁当が余る事は誤算であった。

菜と尊が喜んで食べてくれていたのは良いが弁当は手付かずで穂澄はいつもより重い弁当を片手に菜と尊、そして奉里をつれて学校の帰り道を歩いていた。

「ほすみさん。お団子美味しかったからつい食べちゃって・・・  
・大丈夫だよ。多分灯真さんもそんなに怒らないよ（多分）。」

「・・・うん。灯真だって鬼じゃないんだから許してくれるよ（おそらく）。」

「そうだよ、穂澄くん！別に悪気があってやったわけじゃないんだし灯真さんだって許してくれるよ（誰か知らないが）。」

落ち込んでいる穂澄の事を励ますつもりで言っているのであるがそれが逆に辛い事もあり、しかも本性が隠しきれない分悲しくもなってくる穂澄。

そう、この弁当はいつも灯真がお嬢様達の栄養バランスを考えて作っている為、昼は団子だけしか食べなかつたとは流石に良いにくいのである。

「そう言えば穂澄さんはその・・・」

「・・・陸奥庵。」

「そう！陸奥庵。もし借金を返し終わったら陸奥庵を継ぐんですか。」

尊が陸奥庵の名前を思い出せずにいた所、栞が尊の心を読み取ったように告げ口をする。

「いえ、中学に上がるまではそう思ってたんですけど、一回親父が店を畳んでるし、それに俺には5億3000万の借金がありますから……」

最後の借金の事を言うと穂澄はより一層暗くなる。って言うか、5億って一生働いて稼げる金額かどうかも定かではない。

「あっ！」

と、此処で奉里が大声を上げる。

当然、いきなりであった為3人は肩をビクツと跳ねさせる事になった。

「ど、どうした！？奉里。」

奉里は答えない。しかし指だけをその驚いた方へ向けると……  
そこにはヤンキー座りをしているおじさんがいた。

「お知り合いですか？」

「……父親？」

「えっ？え〜と……」

奉里は言いにくそうにしているが穂澄の顔色を伺っている。

穂澄は厳しい顔をしてその男を睨んでいる。そして無言のまま奉里に荷物を預ける。そして………

「親父っ！！」

「えっ？」

そしてヤンキー座りをしていたおじさんもこっちを向いて立ち上がりこちらに寄ってくる。

「オヤ」

「死ねっコラアツツっ！！」

穂澄がつかれて寄って行ったと思ったら自称穂澄の父親が穂澄の首にラリアットを決めた。

「ゲフウツ！？」

穂澄はまるで交通安全教室の車に吹っ飛ばされるマネキンの様に私たちの前に転がってきた。

「だ、大丈夫ですか！？穂澄さん。」

「………生きてるかー？」

「お、おじさん。何してるんですか！？」

しかし自称穂澄父は息を荒げたまま地面に伏している穂澄を見続けている。

そして穂澄は喉を抑えたまま、ゆっくりと起き上がった。

「ゲホツ！ゴホゴホツ。な、何するんだ親父！」

「黙れ！このダメ息子がつ！何だ、特進クラスで成績上位だけじゃ飽き足らず、下校に可愛い女子3人連れて！見せしめか！？ハーレム見せ付けてんじゃねえよ！？こちらアル中に加えてヤニまで辞めてイライラしてんのに見せ付けてくれやがつて！！??？」

と一方的な言葉だけ押し付けてきていると撲殺したい気分であるが此処は我慢しよう。

「穂澄さん。この方が？」

「………お父様？」

「まあ、一応これが俺に借金を押し付けて逃げた父親ですよ。いやーホントにこいつつたら……ってそれよりオヤ」

何か愚痴を喋りそうになりそうだった穂澄だったが気を持ち直した。

「いや〜君達可愛いね。俺は穂澄の父親の桂架捺かつらかなつね。」

「お嬢様達の手を握って自己紹介してんじゃねえよ！」

「うつせえっ！こちとら美捺みなつが死んじまってから女成分が足りないじゃ！それに陸奥庵をまた再会したから金も無くて此処二週間団子しか作って食ってねえんだよ！」

素早く反転して架捺に襲い掛かった穂澄を架捺は叫びながら応戦す

る。美捺と言うのは穂澄の母、今はもう亡くなっているが元気で活発的な人だったらしいとか何とか（奉里談）

腹が減って？

とここで穂澄は何やら思いついたらしくニヤリと悪い笑みを浮べる。そして手提げ鞆から弁当を取り出す。

「むっ！それはっ!？」

「ほらほーら親父。メシだぞ。」

穂澄はまるで野良犬にご飯をあげるかのごとく架捺の目の前で弁当を左右に揺らす。そしてノリが良いのか、それとも空腹で自我を失い掛けているのか、まあ、とり合えず第三者から見ると青年がオッサンを手懐けていると言う世にも奇妙な光景が広がっている。

「良しっ！取ってこーい！」

幻のトルネード投法！で穂澄はそのまま結構重量のある重箱を空高く放り投げた。

そしてやはり穂澄の父親。ノリが良いのかそのまま四速歩行で弁当の方へ走っていった……

「良し、行きますよ。2人共。奉里！お前はあっちだから送らなくて良いな。」

「うん、大丈夫。また明日ね。」

穂澄は呆然とした顔で架捺を見送っていた二人の手を持ち、そして

奉里に形だけの気を向け、そのまま走っていった……

「え〜と、全部で125万円ですね。」

ニツコリと笑いながら灯真はソファーに座りながらパチパチとそろばんを弾いていた。

目の前には200kgと書かれている重石を足の上に乗せ正座している穂澄。

「高ッ!？」

穂澄が声を上げると灯真はそろばんから目を離し、穂澄の方を見る。何気ない普通の顔、だが妙な威圧感を感じる。

主に『誰が喋って言いと仰いましたか?』って言う感じの威圧感だ。穂澄は口を紡ぎ重力の力に抵抗する。

「と、灯真。これはやりすぎじゃないかな?」

最初は笑って見ていた真琴であったが流石に冗談じゃなくなって来ている事を察したのかオロオロして灯真に辞めさせる様に言う。確かにその判断は賢明だ。だってさっきから足の感覚がなくなって



きてるんだもん

「真琴。私はね、やはり甘かったんですよ。穂澄くんに対してしつ  
けと言う物を怠っていたんですよね。だって、私が丹精込めて作っ  
た栄養弁当を穂澄くんのせいで手をつけてもらえず、最後に父親か  
ら逃げる為に弁当を投げ与えたって、はっはっはっ」

声では笑っているがもちろん顔は笑っていない灯真。

「だ、だけど2人のお弁当入れの重箱って125万もしたっけ？」

「いいえ75万ですよ。あれは、比較的安く売ってもらったんです。

「  
一般常識を考えると75万って言ったらお父さんの一大決心並みの  
値段です。」

「ちなみに後の50万は私の心の治療費です。」

「高いっ！高いよ灯真！そんな事言って実はS真になってるでしょ  
！？」

注）S真とはSの灯真のことです。

「はっはっは。今更何を言ってるんだ真琴。当たり前だろ。」

その後、数時間に渡り正座をさせられていた穂澄。もちろん重石は  
200kgではないであろうが、精神的な面でボロボロになった穂  
澄は足の痺れもあってその日は夕食にありつく事は出来なかった。  
そして正座が終わった時灯真は穂澄と出会ってから一番の笑顔をし

ていたらしい。

「穂澄くん。借金に125万追加しておきましたから後、5億3125万円ですね。頑張ってください。」

125万と言ったら大金だ。しかし5億3000万と比べるとチリに等しく感じてしまうせいかな穂澄は借金が増えた事によるショックは少なくて済んだようであった……

## 第二十五話 S真について（後書き）

どうも、遅れました。作者です。  
なんて言うか・・・飽きてきた。

これも九月の最初に飛ばしすぎた影響かな、思いますがSな登場人物たちを書いていると何だか楽しくなるのは自分がMだから？それともSだからいじめられているキャラを見るのが嬉しいのか・・・  
自分的には後者の方がまだいい気もしなくはないですが・・・  
と、話は変わりますが75万の一大決心と言うところがありました  
が、アレは家の父親です。

24年間使ったダイニングテーブルの支柱が折れた為とても不安定になってしまいました。元々折りたたみ式だったのが支柱がボロボロになり。現在資材をポルトでくっ付けた即席とキャスターでこれ以上不安定なものがあるのかと言うぐらいヤバイ支柱。

計、三本で支えています。って言うかさっさと買えと言いたい今日この頃・・・

投稿頑張ります。。。

第二十六話 創立記念祭で（前編）（前書き）

すみません。サブタイトルの『て』は限界です。

丁度、折り返しに入ったのでサブタイトルはこれからは普通にしていききたいと思います。ご了承ください。

## 第二十六話 創立記念祭で（前編）

「さて、創立記念祭を三日後に控えたこの日。そろそろ出し物を決めよう。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

教室は静寂に包まれる。そして

「ふっざけんなっつっ！！！！」

いつもは大人しい特進クラスの男子達も机に片足を乗せ本や筆記用具が教師に飛ぶ。

「あたっ！？いつてっ！？ぎゃー！！！！！！」

特進クラスの教室に教師の悲鳴が響いた。

数分後。

「えーそれでは創立記念祭の出し物を決めたいと思います。」  
「  
教壇に立っていたのは穂澄であった。」

そして教室の隅にはキリストの様に貼り付けられた教師がぐつたりと坐っていた。

「それでは出し物を出してください。」

穂澄がチヨークを握り出し物を決めていく。

まあ、出し物と言っても特進クラスはほとんどの生徒が勉強を主に生活しているので手間が掛かるのは好ましくない。と言うより後三日でそんな手を込んだものを作るのはぶっちゃけめんどくさい。

出てきたのはクレープ屋、お化け屋敷、たこ焼き屋、喫茶店などなど、まあ定番の物であろう。

と、ここでぐつたりと坐っていた教師がピクリと動く。

「あ、ああ、桂・・・お前は・・・」

「黙れ、そのまま下校時間まで寝てろ。」

穂澄は進行をしなければいけなくなった腹いせかそれとたださな穂澄が見え隠れしているだけか。

まあ、今は教師の最後の言葉を聞こうとしよう。

「おまえは・・・一年のメイド喫茶に行くことになってるから・・・  
・・・当日は一年の出し物を手伝え。」

そして教師は息を引き取った・・・

さて、「冗談はさておき。

「一年のメイド喫茶?.....」

頭の片隅に何かが引っかかる。どこかで聞いたような単語だ。

メイド喫茶                      メイド                      メイド服

穂澄の頭の中は連想ゲームの如く動き頭の隅に残っている単語を引っ張り出す。

メイド                                      栞                                      狂喜乱舞.....

「あっ!? 忘れていた!」

約一ヶ月ほど前の事である覚えて無くても仕方が無い気がする。 竣夜の会社に行く前夜、栞がメイド服の姿をしていった一言。

『創立記念祭でメイド喫茶やるから兄様の許可取ってきて。』とか何とか言われた。

いや.....だって普通忘れるよ。だって許可とってから変態M女に会ったり風邪ひいたり借金が増えたり誕生日パーティーで酒のことがあったり陸奥庵のこともあったし.....

今更だが、俺のここ、一ヶ月つてめっちゃ労働してないか!?

改めて振り返ってみると密度の高い一ヶ月を送っている事に気が付く。と同時に現実逃避にも走りたくなるのだがそんな余裕はない。

「お、俺。そう言う訳で一年のところ行くから！」

チヨークを愁寺に投げ渡しそのまま栞たちの元に向かう。

竣夜と約束した事は穂澄も一緒にメイド喫茶で働いて栞と尊を守る事にあつた。しかし栞たちから何の返事も無いと言う事は向こうも忘れていた可能性が高い。

あの教師に感謝しないといけないな。忘れててそのまま創立記念祭が始まってたら狂喜乱舞は間違いなかった……

考えただけでゾツとする。あの獣と化している生徒たちと栞たちと一緒にの教室に入れたら大変な事になる。

穂澄はそのまま廊下を走りながら栞たちがいる一年の教室に向かった。

階段を二段飛ばしに降り、そして直ぐそばの角を曲がりそのまま教室の中に入った。

「お嬢……さ……ま？」

「いらつしゃいませ〜」

入ったと同時に目に入ってきたのは二日前と言うのに完全に喫茶店風に改装された教室であつた。

そして穂澄が驚いていると一年の女子生徒たちがメイド服で出てくる。

「あつ！穂澄さん。どうしたんですか？」

「み、尊お嬢様もその格好で創立記念祭に出るんですか？」



教室の奥にいた尊が穂澄に気付き寄って来る。どうやら周りを見回しても柔はいないようだ、多分他の仕事に行っているんだろう。と、それより今気になるのは尊の格好だ。

当然メイド喫茶であるからしてメイド服は着るであろう。しかしどちらかと言うと柔より常識人の尊の事だ。恥らいを持って裏方の仕事をする事を心の隅で願っていたのだが……案の定、フリフリのメイド服を着てはしゃいでいた。

穂澄は一瞬現実逃避をしそうになりながら、何とか声を振り絞って尊に聞く。

心の底では本番は裏方をやると言う答えを期待しながら……

「うん、喫茶店のメイドリーダーに選ばれたの！」

うん、現実には甘くない

この際、メイドリーダーって何？と言う疑問は放っておこう。とり合えず穂澄は今何故此処に来たのかを説明した。

「えっ！？兄様がそんな事を行っていたんですか！？すみません。聞いていなかった物で。」

突然の事で教室内も騒がしくなる。穂澄の周りには見渡す限りの女子生徒……

「……あれっ？男子生徒はいないんですか？」

今更ながら当然の質問。見渡す限りの女子生徒。その中には男子生徒の姿は一つも無い。

普通創立記念祭などの大事は男子の力仕事の主になる為男子の存在は必要不可欠なのであるが……

「……ふっふっふ、此処は女の園その。一步踏み入れた男子はメイドたちに心を奪われ骨抜きに」

「栞お嬢様。後ろからいきなり出てこないでください。」

こんな事をするのは栞しかない。それに言葉の独特の貯めから振り向かずとも栞と言う事は容易に想像できた。

「ちっ！」

「いや、舌打ちされても困るんですが……」

「……わかってる。今はこれを預かって来ただけ。」

栞が取り出したのは一枚の紙切れ。そこには。

『桂穂澄をメイド喫茶の助っ人と処しよす。by担任』

と言うものであった。

その紙を見ると周りの生徒たちも担任の言う事なら良いかと納得しながら再び作業に付いた。

「で、でも。栞。穂澄さんは男だから女の園の実現には大きな障害に……」

「尊お嬢様。何、野望ゲームみたいな台詞を言ってるんですか……」

尊の言葉に呆れる穂澄。

「……大丈夫、穂澄には女装してもらってから。」

「……はっ？」

数秒の間。

そしてようやく理解する穂澄。

「いやいやいやっ！私はそんな特殊な趣味は持っていません。」

「……いやあ強制だし。」

「そんな軽く言わないでください。私にとっては新たな人生の道が開ける可能性があるんですよ!？」

そんな事思う穂澄に少し引き気味の周り。

「そ、そうだよ！穂澄さんが女装なんて……うう、女装。」

「何、まんこ満更でも無い顔してるんですか!？」

頬を染め『女装』と言う単語を連呼している尊にツッコミを入れる穂澄。

「……さて、冗談はさておき。穂澄は執事服で手伝って。」

「冗談だったんですか!？」

栞はニヤリと笑みを浮べる。多分さっき、後ろから話しかけて驚かなかった為の嫌がらせなのであろう。

そう考えると簡単に引っかけた自分に嫌悪しながら穂澄はガクツと肩を落とした。

ちなみにその後、尊が栞に『やっぱり穂澄さんは女装させない?』と提案していた事は穂澄は知らずにいた……

## 第二十六話 創立記念祭で（前編）（後書き）

どうも、作者です。この頃、見てくれているかも解らない後書きが趣味です。

本編とは違った形で読者様と接する事が出来るのが面白いのか、ただただ、自分の愚痴を聞いてもらっているのかは定かではないのですが……

はい、と言う訳で。祝、執事になる50の方法、本編折り返し！！連載を始めて早半年とちよつと……ようやく此処まで来ました。ここからラストパートを掛けたと思います。まあ、早くかけすぎて残り五話辺りで息切れしない事を願いながら頑張ります。感想&amp;評価をくれたユウさん。ありがとうございます。出版されたら買うと言うところまで書いてもらって感謝感激雨あられ……古いかな？

まあ、投稿頑張ります。。。

## 第二十七話 創立記念祭で（中編）

「それで実際、本番では何をするんですか？」

創立記念祭を明日と控えた前夜。

穂澄もこの三日間特進クラスをほったらかしにしてまでメイド喫茶を手伝っていたが具体的な事はせずに教室の飾り付けや予算の確認などメイド喫茶の内容などはこれっぽっちも教えてもらっていない。

「内緒です。」

「……………うん、内緒。」

さつきからずっとこの調子である。何度聞いても二人の少女達はクスクス含み笑いをして決して内容を教えようとはしない。

昼間、作業をしているとき、他の生徒に聞いてもそうであった。奉里は目を逸らし少し苦笑いをし霧音に限っては教えてほしかったら私を罵れなど言ってくる。

そんな趣味はないため断ったがどうしても気になってしょうがない。それに当日は2人の警護をしながらメイド喫茶を運営しなければならないのだ。本当は学校を休んで欲しいぐらいである。

「穂澄さんはいつも通りに執事服を着て私たちの手伝いをしてくれれば良いよ。」

「……………穂澄はいつも通りに。」

そう言って満面の笑みを浮かべてくる2人。

現在、尊の部屋で明日のメイド服を穂澄が繕っている所である。

穂澄は裁縫から料理、家事一般は得意である。何故得意になったかと言うと、母、美捺はおっとりとした性格と言うか人より初動に誤差があると言うか。とにかく料理をしたら鍋を焦がし掃除をしたら掃除機のコードに絡まりなどなど。とにかく家事一般は何も出来ない母親であった。と言う訳で穂澄がほとんどしていたのである。それに加えて美捺が死んだ後は父親は泥酔し姉の凜は真希菜の治療費を稼ぐべく朝から晩まで仕事。となるとやはり残った穂澄が家事をする事になる。

などと言う事情で穂澄は家事一般が得意なのである。

「……………」

三人の間で沈黙が続く。最初は2人とも穂澄がこんな事まで出来るのかと興味の目で見ていたがそろそろ十分近く経つ。尊はともかく栞はベッドの上で跳ねたり椅子の上で穂澄を見ながらウズウズしていた。

「……………ほすみ。まだ着れない？」

「まだですよ。それに今日は後、お風呂入って寝るだけじゃないですか。メイド服は明日にしてください。」

栞は穂澄の後ろでブーブー言っているが穂澄は針に神経を集中している為何も言わない。

尊は創立記念祭の準備で疲れたのかいつの間にかベッドの上でスヤスヤと寝息を立てていた。

「……………ほすみ、暇！」

「すみません。今は手が離せないので真琴さんにも遊んでもらっ

てください。」

「……………真琴は今日は検査入院。」

ああ、そうであった。誕生日パーティーの後、酒の事で真琴は灯真に背骨をゴリゴリツとやられていたのだ。

今日は以上が無いか泊り込みで検査すると言っていたので今は居ないわけだ。

「じゃあ、灯真さ」

「……………灯真はお買物。読みたい本があるらしい。」

そうだった。さっき、少し出ますので寝てくださって良いですよと言われたばかりである。

「それじゃあ、何か自分で遊ぶ物を探してください。」

「……………え〜」

栞は再びブーブー言っていたがふと、そのブーイングも止む。どうやら飽きて何か探し始めたかと穂澄も裁縫に集中する。が、現実には違う。

栞は悪戯な笑みを浮かべながら穂澄の背中をジ〜と見ていた。そして

「……………ほーすみ〜」

ダイブ！

「うわっ!?!?」



当然予想していない穂澄の体は揺れる。そして背中にぶら下がって  
くる栞を落とさない様に慌ててバランスを取る。と、

プスッ

「あっ」

「えっ？」

栞が珍しく普通に声をあげ穂澄はその方を向く。と手には針が深々と刺さっていた。

「あっ！………つう！？」

その怪我を見た瞬間。穂澄は手に激痛が駆け抜けた。人差し指と中指の付け根の肉の部分に針は刺さりよく見ると少し貫通していた。

「………穂澄！ごめんなさい。大丈夫！？」

栞は血相を変えて穂澄の背中から降りて正面に回りこむ。

「だ、大丈夫ですので、心配しないでください。」

穂澄の頬に一筋汗が通る。笑顔は少し引きつっておりどうやら相当無理をしているのであろう。そのまま穂澄は痛む手に力を入れ。もう一方の手で針を抜いた。

血は一滴ずつではあるが止まる様子はない。

「………あっ………つう………」

栞はこんな事になるなど思いもしなかったので顔を青ざめ言葉を失っている。

穂澄は素早くハンカチを取り出し手首にきつく縛り付ける。そしてティッシュで血を素早くふき取る。

「ふう、良かった。カーペットを血で汚したから灯真さんに怒られちゃいますよ。」

心配している栞に穂澄は苦笑いを浮べる。が栞の表情は明るくならない。むしろ怒らない穂澄の優しさが心に響き目尻に涙を溜めてしまっている。

「……………ふう……………ぐす。ゴメンね穂澄。ゴメンね。」

「栞お嬢様。こっち向いてください。」

「えっ?」

ムニツ

穂澄は栞の頬を両手で軽く引っ張る。

「笑った顔が一番良いですよ。じゃあ私は包帯巻いてきますので。」

笑いながら言い聞かせるように言う穂澄。

穂澄は栞の頭を撫でると血を落とさないように注意を払いながら部屋を後にした。

残された栞は1人。

「穂澄、ありがとう。」

小さくそつ言った・・・

第二十七話 創立記念祭で（中編）（後書き）

どうも、作者です。

評価が高くなってるので出来るだけ早く投稿していますが絶対指名ZEROx2CUBEの方も書きたくなってきました。

どちらもバランスを取って投稿できると良いですが出来ればZEROx2CUBEの方も評& amp・感想ください。  
投稿頑張ります。。。

## 第二十八話 創立記念祭で（後編）

「いらつしゃいませー」

いよいよ始まった創立記念祭。一般の人も出入りが自由な為にメイド喫茶は混雑していた。

主にその客は九割が男性。そしてその狙いは栞と尊にあつた。

何でもメイド喫茶で話をして、仲良くなり電話番号まで聞こうと企んでいるらしい。まあ、それを阻止する為に穂澄がいるわけで現在も進行形で頑張っているのだが。

「はあはあ、栞ちゃん。可愛いよ。」

明らかに変態チックな男子生徒。

しかし栞はなれない接客で気付いていない。

「……………お待たせしました。以上でよろしいですか？」

いつもは学校であまり見せないらしい笑顔も今日は接客と言つ訳で全開にして振りまいている。

「はあはあ、栞ちゃん！」

と、ここで1人の男子生徒が栞の背後に近づき栞に触れようとしてきた。

バシッ！

が、大きな音と共にその手は叩き落とされる。

「いつつう!？」

男子生徒は手を叩かれた事でその場に手を押さえながら蹲る。目の前には栞と男子生徒の間にわってはいる穂澄がいた。手にはプラスチックの30cm物差しが握られていた。どうやらそれで叩いたらしい。確かに物差しと言っても思いつきり叩きつけられれば蹲るほどのダメージは与えられるであろう。

「失礼ですか。当店ではメイドさんへのおさわりは禁止です。一応学生ですので。」

穂澄はそう言い蹲っている男子生徒を教室の外に追い出した。この間、僅か五秒たらず。もちろん接客に夢中な栞は男子生徒が後ろにいたことすら気付いていない。

「な、何するんだ!あと少しだったのに。」

「お客様。入口の所に貼り紙が貼ってあります。それにご入店の際に注意事項も言いました。知らないとは言わせませんよ。」

穂澄が一睨み利かせて物差しで貼り紙を差す。

壹、メイドさんへのおさわり、口説きは禁止。

貳、食事などが終わったら混雑を避けるため早めに退席する。

参、カメラなどは持ち込み禁止、廊下からの撮影も禁止。

四、これらの事が護れぬ場合、護らなかった場合。強制的に退席していただきます。

確かに貼り紙にはそう書いてあった。そして男子生徒のポケットにはその来店の際に渡した張り紙がしっかりと丸めて入っていた。

「と、言う訳で。さようなら」

穂澄は勝ち誇った笑みを浮かべそのままがつくりとうな垂れる男子生徒の前から姿を消した。

「はい、今ので十七人目ですね。」

穂澄は隣のクラス。つまりメイド喫茶の料理などを出す準備室に戻っていた。

そこには栞たちのクラスの女子達が楽しそうになにやら書いていた。

「解りました。栞、十七人目と。」

1人の女子生徒がチヨークで『正』の字を書いていく。どうやら規則違反で退席させられた男の数らしい。

「えっと、今は栞が、十七人。尊が、二十四人。へえ、結構差がっていたね。」

「ええ、私は絶対栞の方が多かったのに」

そんな事を話している女子生徒たちの近くには大量のマッチの棒が置かれていた。

もしかして……

「何してるんですか？」

「トトカルチョ」「」

2人の女子生徒は同時に言った。やはりそうか、さつきから退席させた人数とその相手が目星をつけた相手を数えておいて欲しいといわれたのは。

今更ながら気付く穂澄。まあ、自分の金ではないので別に良いのだが。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

と、ここで準備室に機械音がなる。穂澄はすぐさま自分のポケットからおもちゃの通信機を取り出す。

まあ、この距離ならおもちゃでも十分なようだ。

「こちら、ドラゴン1、どうした。」

『こちら、ドラゴン5。怪しい動きをする客を発見。直ちに現場に急行せよ。』

この際、怪しいコードネームの事は放っておこう。とり合えず、穂澄はおもちゃの通信機をそのままポケットにしまつとそのままメイド喫茶の方へ歩を進める。

だが、歩を進めるといっても、準備室の扉を開け、数歩歩けばメイド喫茶だ。穂澄は2人に危害が及ばないように足早に扉に手をかけ



る。

ガンッ！

何かに当たった音がする。

いや、それより扉が開かない。

「あれっ？クソっ！こちら、ドラゴン1、ドラゴン8。どうなっている。」

『こちらドラゴン8。準備室の扉は体格の良い男子生徒五人ほどに押さえつけられている模様。相手はその間に防衛目標に近づく模様。』

「チッ！二手に分かれたか！考えたな・・・」

一体、ドラゴンは何人いるんだと言いたい。が、今はそれどころでない。とにかく此処を出なくてはいけない。

現時点で動けるドラゴンは5と8、9だけ、しかし3人とともに女子生徒だ。屈強な男子生徒を押しつけて扉を開ける力などない。

穂澄は特進クラス上位の頭を無駄にフル回転させながら打開策を考えていた。

と、ここで後ろから息を掛けられる。

「うわっ！？」

穂澄は背筋がゾクゾクツとするのを感じ瞬時に飛びのいた。そして後ろを見るとそこには霧音が立っていた。

「ふっふっふ、私の出番のようね。」

霧音は頭に包帯片方の手は吊っており足は依然車椅子。って、言うかさっさと入院してください。

「な、なにをするんですか？」

「あなたが私をいたぶればあなたの心の奥底に秘められたSな穂澄！訳してS澄えすみが覚醒し」

「要するに黽こつて欲しいだけでしょ。あなたは！」

「それより、ドアを蹴破った方が早くないかな？」

いつの間にか居た奉里がそう進言する。しかし普通、そんな事をしたら怒られ

「よし！それ採用！！」

採用しちゃうんだ……

穂澄は奉里の案を採用にそのまま廊下側とは正反対の窓際まで下がり一気に走り出す。そして

「究極！ゲシュント・キックツツ！！」

屈強な男達を跳ね除けドアを吹き飛ばした。そしてそのまま間髪入れずメイド喫茶の中に入り込み、息を荒げ今にも襲い掛かりそうな男子生徒を成敗したそうだ……

その後・・・ドアをとび蹴りでひん曲げた事により教師にきつちりと説教され、その後も恐れを知らぬ男どもの退治をし、そして創立記念祭は幕を閉じた・・・

「穂澄さん！私すっかりと接客で来てましたか？」

「ええ。完璧でした。」

「・・・私？」

「栞お嬢様は何度かお客様に紅茶ぶちまけてましたよね？」

「うっ！」

痛い所を付かれ栞は黙り込む。

創立記念祭は大成功で終わり、穂澄の方も2人に気付かれず何とか男たちから護りきつたのだ。

そして現在は帰宅して尊の部屋で雑談会をしていた所であった。

「ほらっ！穂澄さんも立ってないで座っていいよ。」

「えっ？ですが。」

いつもは椅子などに座るが今日は2人ともベッドの端に腰掛けていた。流石にベッドの端に座るのは不味いと思ったのか？穂澄はそのまま立っていたのだ。

「……………私たちが良いって言ってるの。」

「なら、失礼します。」

穂澄はそう言ってベッドの端に腰を落ち着けた。

「それにしても、今日は穂澄さんは何をしていたのですか？」

「……………確かに接客はしてなかった。」

獣と化していた男どもを退治していたなどとは言えず、穂澄は数秒考えてしまう。

「え、えっと、裏方の仕事をしていました。紅茶入れたり。テーブル拭いたり。それにメイド喫茶なのにメイドさんが接客しなければ意味が無いじゃないですか。」

2人は納得の表情を浮かべ頷いた。どうやら怪しまれずに済んだら

しい。

「……………あつ！」

「どつされました？」

「……………メイド服、部屋に置きっぱなし。皺になる前にクロ  
ーゼットに閉まってくる。」

栞はそう言っただけでベッドの端から降りるとトトトと足早に尊の部屋  
から出て行ってしまった。  
残されたのは穂澄と尊。

そして数秒の沈黙。穂澄は如何したかと尊を見ると目が合い、しか  
しすぐに尊は逸らしてしまった。

あわわわ！？どうしよう。栞がいたから気にしなかったけ  
どいきなり二人つきりになっちゃうと緊張するよぉ

心の中では叫びながら、表にはその表情を出さないように気をつけ  
る。

まあ、穂澄ほど鈍感な青年だったら気付かないと思うが……………

「ほ、穂澄さん。今日は疲れましたね。栞もいなくなったことだし。  
私たちも寝ましようか。」

わあっ！？ばかばか！！折角穂澄さんと2人つきりなのに、  
そんな事言っただけでそうですね。って言われて出て行っちゃっ  
たら如何しよう。呼び止めるのも不自然だし……………

頭の中で更にパニックになる尊。

コツンッ

と、なにやら肩に何かが乗っかってきた。

それは……………穂澄の頭であった。

「えっ！？ほ、穂澄さん！」

尊は驚いて穂澄の顔を覗こうとするが肩に頭を乗せられている状態では髪の毛が邪魔で見えない。そのため、今の穂澄の表情は読み取れない。

だ、大胆だよお！やっぱり竣夜兄様が言ってたみたいに男の人はみんな狼なのかな！？もしかして朧がいなくなるのを待ってたんじゃないのかな！？

「……………グー」

「えっ？」

不意に聞こえた寝息。尊がびっくりして耳を済ませると、確かに聞こえる。

「ほ、穂澄さん？穂澄さん？」

「……………グー」

返事はない。どうやら本当に眠っているみたいであった。

何だ。寝てるのか。びっくりしたあ！そうだよ。穂澄さんいつも私たちのために働いてくれてるんだもんね。

ポテンツ

と、穂澄の頭がずれて丁度尊の膝の上に落ちてきた。俗に言う膝枕だ。

いつもの尊なら嫌がっていたであろう。しかし尊は嫌がらず、むしろ笑みを零していた。そして・・・

「いつもありがとう。穂澄さん。」

目に掛かっている髪を撫でながら尊は良し良し、と穂澄を撫でてや  
った・・・

第二十八話 創立記念祭で（後編）（後書き）

どうも、作者です。

明日、と言つより、もう今日ですが、兄が帰ってきます。どうやら就職の内定が決まったらしく一週間ほどの帰省・・・と言つ訳で明日は休みで兄のこともあるので今日は徹夜中・・・貯め書きもこの間にできればと思います。ではでは投稿頑張ります。。。





そう、目の前には……

「んっ！んんっ」

尊が寝ていたのであった。

足を絡められ腰から下は依然動かす事は出来ない。動かせるのは上半身だけ。

「落ち着け。落ち着くんだ！穂澄。」

声を出してはいけないことは解っていたが。声を出さなければ冷静を保てないと思い、出来るだけ小声で自分に言い聞かせる穂澄。

自分がさっきまで暗闇だと思っていたのは尊が穂澄の頭を自分の胸に押し付けていたわけであり……

これ以上考えると鼻血が出そうになりそうなのでやめよう。今はどうやってこのピンチを抜け出すがポイントだ。

さりげなく起こして寝ぼけている間に拘束からぬける　　NO・

柔ながらもかく尊は結構寝起きは良い。失敗する可能性が高い。

今こそ自分に秘められた能力を発揮して抜け出す　　NO・こん

な時にそんな簡単に出来たら人生困りません！

どうせ無理だからと決め込んでこのままひと時の休息に入る

NO・もし灯真に見つかつたらかなり危険な気がする。

現実逃避をして尊の胸に顔を押し付けまくる　　NO！これは執

事と言う前に人間として不味い気がする。

と、言うわけで良い案が浮かばず結局最初の案にした穂澄。息を整えいざ、

「尊お嬢様！朝ですよ！寝ぼけながらゆっくりと起きてくださいね

」

パチッ

尊の目はいつも異常にはつきりと開いた。やはり現実には甘くない。少しでも可能性に身を投じた自分が馬鹿だった。

「あれっ？穂澄さん。今何処から声を きゃっ！？な、何で穂澄さんが私の横で寝てるんですか！？」

やはり反応はわかりきっていた。尊は短い悲鳴を上げて掛け布団を被りながらベッドをサササッと移動する。

「す、すみません！起きたらこんな状態で……このままと言つのも不味いんで起こしたんですが……すみません！」

穂澄はベッドの上で土下座をする。

「えっ？起きたら？」

と、尊は警戒していた目を辞め昨日のことを思い出す。記憶を辿りそのまま考える。

『いつもありがとう。穂澄さん。』

私、お礼を言った後確か菜を待ってたんだけどいつまで経っても来ないし穂澄さんも起きそうになかったからそのまま起こさないように布団に入って……！！！！！！

一瞬にして尊の頭の中でフラッシュバックが起きる。

そうだ、私は昨日。穂澄さんが全然起きなかったから・・・

昨日の夜。栞は流石に自分が寝るときは穂澄を起こそうとした。しかし揺すつても起きないし今は自分と穂澄だけと言うこともあったのか、少し大胆な事をしていたのであった。

例えば・・・

『えへへ、穂澄さんを隣に寝かせて、私も寝る！えへへ、恋人みたいだね。ほ・す・み なんちゃって！！』とか

『穂澄さんって寝顔可愛いよねー抱きしめたくなくなっちゃうよ。』と  
言い抱きしめたり

『何だか眠くなってきたなあ。だけど穂澄さん離したくないしなあ。良いか！別にこのまま寝ても。』と、睡魔に負け、抱きしめたまま寝たりとか・・・

そしてその穂澄が目の前にで土下座している。

真相を知った尊は顔が赤くなればいいのか青くなればいいのかあたふたしていた。

と、それを怒っているのと勘違いしたのか穂澄は頭を下げたまま。

「すみません。こんな破廉恥は執事要りませんよね。すみません。借金は違う方法で集めますのでここは辞めます。」

破廉恥は私なんです。とは流石に言えない。しかしこのままでは穂澄が辞めてしまう。そうなれば栞はまたブスツとつまらなそうな顔をする毎日になるであろう、そして尊自身も今まで一緒に居た執事がいなくなれば調子が出なくなるであろう。

「だ、大丈夫です！穂澄さんなら見られても平気ですから！」

「えっ！？いや、お嬢様。それはそれでいけない気がします。」

逆に心配されたようで穂澄はオロオロし始めてしまった。

「いやっ！別にそういう意味じゃなくて。まあ、確かにそういう意味になるんだけど・・・とにかく私は穂澄さんにはずっと執事をしていて欲しいの！だから辞めるなんて言わないで！私の傍に居て！！！」

はあっ！？しまった！最後の方は明らかに告白になってしまった。いくら穂澄さんでも気付いちゃうよ。どうしよう！恥ずかしいよぉ～！

顔を手で覆い頭をブンブン振り回す尊。そして指の間から穂澄を見る。と、穂澄は泣いていた。

「えっ？」

「すみません。お嬢様。そこまで信頼してくださいなのに失望されるような事をしまして・・・わかりました。私はこれからもうずっとお2人のために傍に居ます。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

どうやら違う解釈をされたらしい。それで良かったのかそれとも本当の意味で解釈して欲しかったのかは尊にも良くわからなかったそうである。



第二十九話 平穩な休日にて（後書き）

どうも作者です。

眠い・・・現在2；35分です。

とり合えず今回は朝のーこまを抜き出した物でありました。

比率的には栞の方がエピソードが多いのでこれからはバランスよく尊の方も書きたいと思います。

それでは投稿頑張ります。。。

### 第三十話 卒業式の準備に追われて

三月。

三年生は進学、就職、ニート、フリーターなどに分かれる事となった。

そして穂澄たち2年は最上級生になるべくそれなりの準備に追われていた。

「愁寺は花をセットして、おいコラッ！ 啻。サボるなー」

櫻坂学院、第一体育館。穂澄たち二年生は終業式の準備に追われていた。壇上で指揮を取るのは穂澄。手には大量の資料が握られていて持ちきれないほどである。こう言うことを進んでする穂澄ではないのだがこうして慌しく指揮をしているには理由がある。それは昨日に遡る。職員室に呼び出され教師に言われた一言。

『お前、出席日数が少し足りないから実行委員長やれ』

その一言で今の忙しさに至る。もちろん断りたかったが半ば脅しに近かったので仕方が無く引き受ける事になってしまった。

「ほすみ〜、お腹すいたよ〜」

「働かざる物食うべからずっ！働いたら団子作ってやるからさっさとやれ！」

しかしその一言がいけなかった。

一瞬の内に体育館内にいる生徒の動きが活発になる。穂澄の団子は学年の中での噂でもあり何でも天皇が絶賛したと言う噂も（もちろん



ん嘘などだが………)

「いやっ！？待てっ！今のは虫限定だぞ。学年全員分どうやって作るんだよ！」

しかし時既に遅しとはこの事なのか、生徒達の動きは止まらず更に活発になっていく。

ちなみにその後、予定より二時間以上早く終わって穂澄は家庭科室で団子作りに勤しむ事になった………

場所は家庭科室。

話は飛ぶが、予定より早く終わってしまった準備。そして終わったと同時に起きた団子コール。仕方が無く穂澄は栞たちに頼み、団子の材料を調達してもらった。幸い2人とも団子を作るといっただけで喜んでくれて費用は私たちが払うと言ってくれたので少し安心した。

しかし………

「あゝ！手がアンコ臭くなる！！！」

団子作りを始めて一時間とちょっと。愁寺、亮平に手伝ってもらって何とか300ほど作った。

「穂澄。蛭はどうした？」

「あゝ？蛭はツマミ食いするから、適当に作ったの渡して帰らせたんだよ。」

「まあ、確かにあいつは付き合いは良いけど食べ物になると見境がなくなるからな……」

喋りながらも手を止めない3人。愁寺も亮平も中学に上がるまでは良く陸奥庵で手伝いをしていたのでそれなりに手際が良い。それに素人が見ただけでは違いもわからないであろう。

「よし、もう良いだろ。これぐらい作れば。」

出来上がったのは大皿の上にピラミッド型に積み上げられた団子。学年で準備していると言っではいたがしていたのは五十人ほど、1人5〜6個あれば十分であろう。

そのまま3人は休んでいる生徒がいる教室に団子を持っていった。

「ほっす〜み〜さん。」

「……………ほっす〜み〜」

「ああ、お2人共どうしたんですか？」

特進クラスの教室で休んでいた穂澄の元になにやら上機嫌じょうきげんな2人が近づいてきた。

特に制限があるわけではないが普通クラス。しかも一年生が特進クラスに来ることなど滅多に無い。

「いや、お団子美味しかったです。」

「……………また作って。」

2人の手には小皿がありまだ数個の団子が残っていた。それに2人の口の端にはアンコがついている。

「…………お2人共、気をつけてくださいね。付いてますよ。」

穂澄がハンカチを取り出して2人の口元を拭く。

「ひあっ!?!あ、ありが……………とう……………ごぞいます」

「……………大胆……………」

「えっ?何か言いましたか? 栞お嬢様。」

「……………なっ何でもない!」

鈍感な穂澄。周りからの視線も関係なし、と言うより疲れているため周りへの集中がかけているのか気付いていない。栞と尊は急なことで顔を赤くしそっぽを向いている。

「そう言えば、お2人共何故此処に来たんですか？」

穂澄はハンカチを畳みながら顔を赤くしている2人に聞いた。

「……………穂澄の顔が見たかったんだよ！」

栞が叫んだ為、その声は教室中に響き周りの生徒が穂澄達の方へ向く。

「えっ？」

穂澄も予期してなかった為びっくりして声を上げてしまう。

「いやいや、嘘ですよ。穂澄さん、本当はお団子のお礼を言いに来ただけです。」

「……………やーい、引っかった。」

不意を付かれた仕返しのもりだったのか栞は悪戯な笑みを浮べる。まあ、確かに引っかったのだから成功と言えるであろう。

「……………まあ、会いたかったって言うのは本当ですけど……………」

「えっ？何か言いました？」

尊は小声で喋っていたので聞こえなかったのか穂澄が聞き返す。

「えっ！いい、いえ、それよりそろそろ下校ですから帰りましょう。」

無意識のうちに言っていたのか尊は顔を再び赤らめ、そして誤魔化しながら栞と穂澄の手を持って教室を後にしようとした。

「い、いや。お嬢様。まだ仕事が」

「いいよ、穂澄。団子のお礼だ。帰って良いよ。」

愁寺の言葉にクラスの生徒たちも頷く。確かに今日一日一番働いたであろう。穂澄は疲労が目に見えていた。

「あ、ありがとう。じゃあ、お言葉に甘えて。」

そして穂澄はそのまま尊に連れられ学院を後にした……

### 第三十話 卒業式の準備に追われて（後書き）

どうも作者です。

そろそろ九月が終わりますねえ。この覚醒して投稿し続けた九月。今思えば何で十八話も書けたのか不思議でしょうがない自分。読者数を確認しても八月は8500人ぐらいだったのに九月は70000人ぐらいで桁が違っし・・・まあ、あと二十話まで来ましたのでご期待に応えるように頑張ります。

あと、評価& amp ;感想をくれた光さん。ありがとうございます  
た。

では、投稿頑張ります。。。

### 第三十一話 春休み 突入！

外は小雨が降っていた。比較的アウトドア派の栞と尊だったが流石に小雨が降る日に外に出る事も無く部屋で勉強をしていた。そう、今はもう春休みに入ってしまったのである。

上の学年に親しい親友のいない穂澄。あの、神話に残るほど頑張った準備に比べると呆気なく拍子抜けと言うのが正直な感想であった。

「穂澄さん。ここは如何すればいいんですか？」

「ああ、ここは証明の問題です。教科書に載ってますのでそこを見れば解りますよ。」

流石に特進クラスで上位を保っているだけの事はある。穂澄は問題を見ただけで瞬時に判断し教科書のページを言うのだ。もしかしたらバイトの大学生より教えるのはうまいかもしれない。

まあ、こうして教えているのは頼まれた事もあるが実は灯真の厚意で家庭教師として教えている。

そして報酬は借金から差し引くと言うわけだ。5億3000万の借金。家庭教師で稼げるとは思ってはいないものの稼がないよりはマシであるうと穂澄は今、勉強を教えているのだ。

「……………穂澄。遊ぼうよ。」

……………しかし勉強をしてくれない問題児もいるのだ……………

栞は穂澄の背中の上よじ登りぶら下がっている。元々勉強は一夜漬けでするタイプの栞。しかもそれがいつも成功するのが性質が悪い。

と、言うわけで春休みの宿題も一日でやるつもりらしい。

「栞お嬢様。今日は雨が降っていますし、今は尊お嬢様の勉強をしています。どうせなら一緒に勉強してそのあと遊びましょうよ。」

「……………いやだっ！今遊ぶ。」

栞は駄々をこねながら穂澄の肩を掴んでぶら下がっていた手を首に回す。

その為、栞の体が密着してドキツ……………何て言う暇はない。首に手を回された事により首が絞められて非常に息苦しい。

「ぐっ……………お嬢様。苦しい！苦しいから！離して。」

「……………遊ぶなら離す。」

「……………し、しかし！」

穂澄は尊の方を見ると尊は教科書を片付けながら苦笑いを浮かべていた。

「良いですよ、穂澄さん。今日の分は終わりましたから栞と遊んでください。」

「えっ？一緒に遊ばないんですか」

「はい、今まで私が穂澄さんを占領してましたので今度は栞が占領する番です。」

満面の笑みを浮かべながら尊は言う。何だかその顔を見ると幸せと言



うか何かホワーと体が浮き上がる感じが……

「って！？違う。これは酸欠！死ぬから、栞お嬢様。許可貰いましたから離してください。いや、マジで！！」

最後の酸素を口から振り絞った穂澄。その事で栞もようやく納得してくれたのか。手を離し床に着地する。

「……………私の部屋に行こ。尊ありがとう。」

栞は穂澄の手を取ってそのまま軽い足取りで尊の部屋から出て行った。

尊はその2人を見送り……そしていなくなったと同時に溜息をついた。

「……………ホント私って甘いよお。折角穂澄さんに勉強教えてもらったのに栞に譲っちゃうし……やっぱり私って意気地なし？」

そんな事を言いながら尊は1人部屋で悩み続けた……………

「それで何をするんですか？」

栞の部屋に来たのはいいのだが栞は無言のまま椅子を持ってきてなにやら大きなテーブルを持ってきた。

「……………麻雀。」

「何故に？」

その大きなテーブルは確かに麻雀の卓であった。どうやら本当にするらしい。

「しかし、2人じゃ面白くありませんよ。」

「……………大丈夫。」

栞がパチンツと指を鳴らすとその瞬間、穂澄の隣で風が吹いた。そして気がつくと栞の隣には黒服の男性二人が立っていた。

「うわっ！出た！？何処から出てきたかは聞かない事にしますけどあなた達いつも待機してるんですか！？」

それは十一話、十二話に出て来た黒服のお兄さん達。あえて突っ込みは控えていたが三度目の登場にもなると流石に無視するわけにはいかない。

「……………穂澄早く座って。」

栞と黒服のお兄さん達は既に麻雀をジャラジャラ音を立てながら混ぜていた。

穂澄は気付かれないように小さく溜息をつきながら席に座りそのま

ま一緒に混ぜながら麻雀は始まった……………

「……………とり合えず、一回役満に振り込んだら終わりね。」

四人が山を作り、自分の手牌が決まった時、ふい、に栞が言う。そんな手牌に自信があるのか穂澄は息を呑み注意する。

黒服のお兄さんがサイコロを投げ親は何と栞に決まる。これも運が悪いのか穂澄は嫌な予感しかしない……………それにしても黒服のお兄さん達、一言も喋らないので凄く怖いんだけど……………穂澄はそんな事を思いながら、身構える……………と。

「……………ロン。天和<sup>テンホー</sup>」

「……………えっ?」

注)天和とは 親で配牌時に和了っていると成立。天からの授かりものとか言われているとかなんとか……………

「えーっ!???」

いきなり負けが成立する穂澄たち。栞はニヤリと不敵な笑みを浮べる。

「……………じゃあ、罰ゲームだ。」

「えっ!?!?聞いてないんですけど!?!?」

役満一回で負け。と言うのは聞いた。しかし罰ゲームなんて聞いていない穂澄は当然慌てる。しかも栞の目は黒服のお兄さん達には向いておらず穂澄にしか向いていない。つまり罰ゲームは穂澄限定の可能性が大きい。と言うかそうなのであるが………

「……………穂澄、脱げ。」

「脱衣麻雀!?!」

穂澄はあまりに驚いた為椅子を跳ね飛ばし立ち上がってしまった。何となく体を張った罰ゲームだとは思っていたがまさか年頃の女子に脱げなんていわれる日が来るとは……そんな事を思いながらまんざらではない顔をする穂澄。

いやいやいや!無理だから、何で?脱衣麻雀。って言うかこれ絶対俺を脱がせたいから始めたんだよな。

「そっだっ!お嬢様。こう言う事は三回勝負って言うのが鉄則なんですよ。」

「……………わかった。それじゃあ、あと二回。」

一瞬嫌そうな顔をする栞だがどうやら了承したらしい。再び山を崩しジャラジャラと混ぜ始めた……………

それから数分後。

一巡目、黒服お兄さん、その舌。

「ポンツ！」

穂澄は一巡目いきなり仕掛ける。

穂澄は頑張った。そりゃあ、負ければ脱がされる。そして多分……と言つか絶対黒服のお兄さん達が勝っても穂澄に脱げと言っただろう。何たって柔が指を鳴らしただけで走ってくるぐらいなんだから。

「……………良くやった穂澄。」

柔の薄い笑み。

「……………ロン、チホウ地和」

注）地和とは 子で1巡目以内でツモ和了ると成立。誰かの鳴きが入ると成立しない。地からの授かりものとか言われているとか何とか……

再び穂澄の負け……………

しかしまだ一回ある穂澄は諦めない。

また、数分後。

「・・・・・・・・国土無双」

穂澄はその日暴れるが、黒服の男達に服を脱がされ、棊に苛められ  
たとさ・・・・・・・・

### 第三十一話 春休み 突入！（後書き）

どうも作者です。最初に言っておく事があります・・・サブタイトルを考えるのめんどくさくなった！

と言う訳で三十一話から普通でいきます。

あとは今回の内容についての注意事項。作者は麻雀、ほとんど知りません！と言う訳でご了承ください・・・

ではでは感想&評価待ってますので

投稿頑張ります。。。

## 第三十二話 メイドさん探し

「……メイド、欲しくね？」

その一言が始まりだった。栞と尊、そして穂澄と言う顔触れで遊んでいる時であった。ふいに栞が言った。

理由はこんな大きな屋敷にメイドさんがいないなんておかしい！らしい……一理ある気もしくないが別に執事2人でこの三ヶ月やりくりして来たのだ今更いらないであろう。

そう思いながら穂澄は栞たちに頼まれ灯真にメイドさんを雇う許可を貰いに来ていた。

まあ、穂澄としても思いつきで出て来た案が灯真に通用するわけがない。と思いながら歩いていたので。

「そうですね。それじゃあ雇いますか。」

「雇うんですか!？」

人生は自分の考えどおりには行かない。まさに穂澄は今そう思う。

「いや、確かに穂澄くんが来る前までは私1人でやりくりしてましたし別に必要と言っ訳ではないですが居て困る事はありません。この際雇いましょう。」

「で、でも誰を雇うんですか？」

「うん……それじゃあ、秋水の所に行ってください。紹介してもらっように電話しておきますから。」



灯真は暫く悩んだ後、秋水の名前を出す。  
ちなみにあとから聞いた話であるが灯真と秋水は高校時代の同級生  
だったらしい。

「わかりました。それでは行って来ます。」

「はい、行ってらっしゃい。気をつけて下さいね。」

穂澄はそのまま栞と尊を連れて、秋水の病院へと足を速めた……

「それで秋水さんの家は何処なんですか？」

昨日とは違い暖かな太陽の下3人は街中を歩いていた。

「秋水さんの家は街の外れの方にあるのでそろそろ……あ  
っ！ありました。」

穂澄が指を指した方には確かに『叶医院』と書いてある看板があっ  
た。

あまり大きくは無いが丁寧に何より治療費が安いと言う理由で街の  
人たちには結構人気の病院であった。

病院の前には白髪の白衣姿と言うまさに白装束の人が居た。

秋水だ。多分秋水1人居れば街中の待ち合わせにも楽になる。と言  
うぐらい目立っていた。  
穂澄たちが秋水に気がつくと同様も気がついたのか駆け足で寄っ  
て来た。

「おう、3人も良く来たな。じゃあ俺は午後から診察入ってるか  
らさっさと済ませるぞ。付いて来い。」

秋水はタバコを銜くわえると病院の隣の路地に入って行った。3人は付  
いて来いといわれたのでとり合えず付いて行くが日が全く入ってな  
いので足元が見えにくい。

「ああ、足もと気をつけろよ、時々猫が居るから踏ん付けると引っ  
搔いて来るぞ。」

秋水にそう言われ最善の注意を払い路地を抜けるとそこには……

「弓道場？」  
があった。

秋水はタバコを銜えたまま靴を脱ぎ弓道場の中に入っていく。穂澄  
たちも慌てて靴を脱ぐと弓道場の中に足を運んだ。

中は意外と広く日も差し込んでいた。と、奥の練習場に誰か居た。

凜とした表情で穂澄ほどではないが長身の少女。腰ほどまである髪  
を一つ結びにして降ろしている姿は何処か凜に似ていた。

「おい、水穂。こっち来てくれ。」

秋水が声を掛けるとその少女は気付いたかのこっちに駆け足で寄って来る。

「アイツは俺の妹で叶水穂。かのつみずほ アイツならメイドになるんじゃないか？」

秋水が離していると、不意に口に銜えられていたタバコが取り上げられる。

「あつ！」

「『あつ！』じゃない！！弓道場は禁煙！！何度言ったら解るの、兄さん！」

どうやら何度も注意されているらしいが秋水は全く反省の色を見せない。

「水穂、櫻坂姉妹だ。挨拶しろ。」

「えっ！？櫻坂姉妹って・・・」

水穂はふいに栞たちの方を見ると顔を真っ赤に染める。

先ほどまでも秋水に怒っている剣幕は今も感じるられない。

「あ、あああの！わ、私叶水穂と言います。来月から櫻坂学院に入学する事になっていてお二人にあえて光栄です！？よ、よよよろしくお願いします。」

思いつきり口ごもっているがとり合えず挨拶を済ませると安心したのか一息つく。

「ああ、それと、こっちは穂澄くんだ。」

「……………穂澄？あの、桂穂澄か！？」

安心していただけた水穂の顔が一瞬にして強張りこちらを睨んできた。

初対面だよな……………

穂澄はその睨む目に押されながらも心の中では冷静に考える。確かに秋水とは真希菜の事もあり、もう5年以上の付き合いになる。しかし秋水に妹がいたなどと言う話は今聞いたばかりで会った事すら記憶にない。だが水穂ははっきりと桂穂澄と言っている以上人違いと言う事ではないし、そうすると穂澄が関係していない所での繋がりがあるのか……………？

穂澄はそんな事を考えていると水穂がなにやら言葉を続ける。

「私はお前が嫌いだ！」

「えっ？」

流石に初対面の少女に嫌いと言われれば誰でも同じような反応をするであろう。

水穂の言い分を聞いたため暫く穂澄は黙っておく事にした。

「櫻坂姉妹に近づき誘惑し、それだけでは飽き足らず四六時中付きまといまるで執事の様に振舞うその姿！許すまじ！桂穂澄。私と勝負しろ！！私が勝つたらもう二度と櫻坂姉妹に近づくな！！！」

思いつきり八つ当たりじゃん！？

そう言いたかったけれど目が怖くていえない。  
それに私が勝ったら二度と櫻坂姉妹に近づくなって穂澄には何のメリットもないし……

「そ、それで私が勝ったら何か貰えるんですか？」

「なっ！？ 貴様は何処までも強欲なのだな！ よしわかった。もしお前が勝ったら私が貴様の言う事を三つ聞いてやるう。」

お前から貴様に格上げされていることはまあ、放っておこう。  
それにしても安易な発言をした穂澄が馬鹿だったのか逆に水穂を怒らせてしまったような気がする。

「勝負は弓道三本勝負！ 着替えて来い！」

投げ渡されたのは胴着。良く見ると水穂も着ていた。

どうやら穂澄には拒否権はないらしく。

前を向けば水穂が睨んでいて、秋水は呆れている。

後ろを向けば尊があたふたしていて栞が『面白くなってきたな』的な笑みを浮かべている。

穂澄は小さく溜息をつき更衣室で胴着に着替え始めたのであった……

……

穂澄は着替え終わり試しに弓を射って見る事にした。  
結果は的には届かずどれも直ぐ前で落ちてしまう。

「ふ、ふふふふ、これで私の勝利も近づいて来たな！いいだろう。  
貴様は一本でも的のど真ん中を射ったら勝ちにしてやるう。」

高笑いを上げながら水穂は余裕の笑みを浮かべていた。  
と言つか的にも届いてないのに三回でど真ん中を射抜けるはずがない。

「穂澄。」

と、不意に秋水が後ろに立っていた。

「何ですか？秋水さん。」

穂澄は今、勝つことよりも負けた後どう水穂を言い含めるかを考えていた為後ろに立たれている事に気がつかなかった。

「背筋は伸ばして一本の棒が刺さってるようなイメージで立って視線と垂直になるように弓をひけ。おまえは運が良いからな。出来るぞ。」

秋水のなにやら余裕の笑み。何か勝算があるのか、その顔を見ると段々と穂澄もヤル気が出てきた。

「それじゃあ、射って貰おうか？」

「わかった。」

神経を集中させ・・・背中には棒が刺さっているようなイメージで、そして目線と垂直になるように・・・射れ！

瞬間。穂澄は射った。もちろん、弓道など始めてやった。素人がどんなに頑張っても的に届くはずがない。水穂はそう思ってこの戦いを挑んできたのだから・・・そして矢は・・・

ストンツ

的に当たった。秋水が近くに行き、何処に当たったか確認する。

「あゝあ、水穂！真ん中に当たってるわ。」

「えっ！えっ！？」

水穂だけではなく穂澄も驚いた。

自分としては的に当たるかさえ不安だったのにまさか本当に真ん中に当たるなんて・・・

と言う訳で穂澄はめでたく勝利を収め穂澄は水穂に『メイドになれ』と言っただけ・・・

### 第三十二話 メイドさん探し（後書き）

どうも作者です。

覚醒して投稿しまくった九月も終わり十月に入ってしまった。

覚醒し続けたままならこのまま十月中に完結できるんですが、何と、

兄が帰ってきてパソコンを占領中・・・

こうして兄の居ない時間に投稿するしかない為遅れるカモ・・・

まあ、頑張ります。。。



### 第三十三話　メイドさん、初仕事

夜、櫻坂の屋敷。

「くっ！まさか本当に執事をやっていたとは……」

ソファーに座っているのは水穂そして机を挟んで正面のソファーに座っているのは栞と尊、そして灯真であった。

穂澄は水穂の横に立っている。

「それでは、契約書にサインしてもらいます。えっと……水穂さんの場合はわざと辞められる場合がありますので、規則違反をした場合は罰金と言う形になりますので気をつけてください。」

契約書、それは穂澄も書いた物とほとんど同じであった。しかし違う部分も幾つか見られる。

櫻坂家の人には決して危害を加えることが無いよう。

雇い主はお嬢様、　様と言うこと（注、男の場合）

雇い主を最優先に考える事。と、ここまででは一緒だったのだからその下に幾つか付け加えられていた。

この規約に違反した場合。一回につき10万円の罰金に処す。

穂澄と仲良く。

「待て！罰金までは良いでしょう。だが何故私がこいつと……」

「・

「ダメ……ですか？」

「……いや……なの？」

どうやらこれを書いたのは栞たちらしい。2人が不安そうな顔をすると水穂は黙ってしまう。

「くっ！2人の頼みなら仕方がない。わかりました。穂澄。よろしくお願いします。」

仲良くしている所を2人に見せる為か、握手をしてきたが水穂は力を入れてきた。

穂澄も応戦するがそんなに握力に自身がない穂澄は呆気なく力負けしてしまう。

「そろそろ……離しませんか？」

「いえ。私たちは仲がいいのでしょうか？もう少し……あと少しで折る！」

「今、小声でなんか物騒な事を言いませんでした!？」

「水穂さん。そろそろサインをしてください。」

呆れた灯真が事態の修正をしようと水穂を座らせる。

水穂は座ると契約書に書かれている事を飛ばし読みして最後の部分にサインをした。

「はい、ありがとうございます。それではこれに着替えてください。」

「えっ!?!」

出されたのはメイド服。

水穂はそれを見ると明らかに嫌そうな顔をする。

「契約書の最後にも書いてありますよ。『あなたをメイドとして雇う。原則屋敷の中はメイド服で過ごす。』って」

水穂が契約書を引ったくり再度確認すると確かにはっきりと書いてあった。

「それでは水穂さん。着替えましょうか!」

「……………お着替えタイム。」

2人は手をワキワキさせながら水穂に近づく。

「穂澄くん。私たちは外に出てましょう。」

「そうですね。」

「ま、まて穂澄!助け」

「雇い主の命令は聞かないといけませんよ。それでは」

穂澄は笑みを浮かべながら応接室のドアを閉めた。

ガチャリと応接室に音が響く。どうやら鍵を掛けられたらしい。

水穂が迷っている間にも栞たちは迫って来る。

「ま、待ってください。」

「大丈夫ですよ〜ちゃんと着せますから。」

「……………良いではないか〜良いではないか〜」

その夜、応接室に水穂の悲鳴が轟いた……………

次の日。

「きて下さい。」

誰かの声が聞こえる。穂澄は睡魔に襲われながらも目を擦りながら起き上がる。

「おはようございます。」

「ああ、すみません。灯真さん、寝過ぎして……………」

穂澄の動きが止まる。目の前には長い髪をツインテールにしてメイ

ド服を纏っている水穂がいたからだ。

「おはようございます。」

昨日の水穂からの殺気は消えていた。と言つかめっちゃメイドっぽくなってる。

「あ、あの？何かあったんですか？」

穂澄は額に嫌な汗をかきながら聞く。と一瞬水穂が後ろを向いた。寝起きで気がつかなかったが、穂澄の部屋の扉が少し開けられておりそこから2人の視線が注がれていた。どうやら水穂は見張られているらしい。

「すみません。今起きますのでもう良いですよ。お嬢様達のところへ行って下さい。」

「解りました。穂澄さん。」

こちらにニツコリと笑み（口の端はかなり引きつっていた。）を浮かべそのまま穂澄の部屋を出て行った。扉の向こうでは栞たちの話し声が聞こえている。どうやら見張られているのは本当だったらしい。

穂澄は時計を見るとまだ、6時少し前。いつも起きる時間とそう、変わっていないかった。

と言うことは栞たちがいつもと比べて早起きなのであろう。

「さて、着替えるか。」

穂澄はテーブルの上においてあった執事服を着てそのまま自分の部

屋を後にした。

階段を下りていると栞たちの声が聞こえてきた。覗いてみるとどうやら水穂と3人でなにやら話している。

「……………今度は朝ごはんの仕度。灯真は中庭の掃除を頼んだから、穂澄と2人でやるんだよ。」

「えっ？ふ、ふふふ2人ですか!？」

「ダメだよ。穂澄さんはいい人だから仲良くなつてね。」

どうやら2人の差し金で灯真を追い払いキッチンに穂澄と水穂に仕事をさせるらしい。まあ、多分灯真もそれを承知で中庭の掃除に向かったであろうが……………とり合えず穂澄は話を聞いていないふりをしながら階段を下りて行く。

「3人ともおはようございます。」

「!……………お、おはよう!」

「あっ!お、おはようございます。」

2人とも挙動不審です。

そう言いたかったが2人が早起きして頑張っているのに水を差すわけにもいかずそのまま気にせずキッチンへ向かう。

と、後ろでは栞たちが水穂の背中を押しているが水穂はその一歩を踏み出せずにいる。穂澄は三人に聞こえないように溜息をつき、

「水穂さん。朝食の準備をしますから、手伝ってくれませんか？」

「えっ！？は、はい！」

穂澄は水穂を連れてそのままキッチンへ入って行った……

「水穂さんは料理は出来ますか。」

「は、はい！すすす、少しなら。」

2人きりと言う空間で緊張の糸が切れたのか起こしに来た時の面影はすっかり消えていた。

「お嬢様たちなら席についてるので普通にしてくれて良いですよ。」

「何だ……早く言え！」

変わるの早ツツ！？

水穂の引きつった笑みも穂澄がそう言うで一瞬で消え昨日のきつい瞳に戻ってしまった。

「大体なんだこの服装は？こんなフリルだらけのひらひらした服動

きづらくてしょうがないではないか！？なんで私がこんな事を・・・」

そして2人が居ないことを良い事に穂澄に愚痴りだした。やれ、動きづらいだの。お前には執事服似合わないだの。

「わかりましたから、水穂さんはお米を研いでください。」

「水穂さんと言うのはやめる。なんだから気持ち悪い。」

真顔で少女に気持ち悪いといわれるのは流石にきつい。穂澄はそう思いながら冷蔵庫に貼ってある今日の献立を見た。

これは灯真が栄養バランスを考え作っている為一つでも材料を入れ忘れるとあとでお仕置きを受ける事があるため穂澄はまず料理する時はこの献立を見ることにしているのだ。

「おい、聞いているのか!？」

「じゃあ二つ目のお願いです。呼び捨てで良いですね。」

二つ目のお願いとは昨日穂澄が水穂と勝負した時に決めた事、穂澄が勝った場合水穂に三つお願いを言えると・・・

そして一つ目は櫻坂のメイドになる事。

そして二つ目は今、のお願い。

多分、普通に呼び捨てでいいか?などと聞くと『馴れ馴れしい!』と怒られるのは目に見えていた。と言う訳でお願いと言う形で言ったのだ。

水穂は一応勝ち負けでの約束はしっかり守るタイプらしくメイドになれと言った時も愚痴は言っていたがしっかりとメイド服を着てこうして働いているのだ。



「くっ！人の弱みに付け込むとは何と卑劣な！？」

「解りました。卑劣でも最低でも良いですから。さっさと仕度しましょうよ。灯真さんに見つかったら怒られます。」

穂澄は献立に目を移しながら冷蔵庫から食材を引っ張り出している。

「何だ！その態度は！」

水穂は怒ってこっちに寄って来た。しかし足もとには米俵があつて水穂はそれに見事に足を取られた。

「きゃっ！？」

ガンツ！

水穂は倒れた。それも穂澄の背中に、しかし人の背中に倒れただけであんなに良い音はしないであろう。

水穂は恐る恐る穂澄の顔を覗くと・・・

「気をつけてくださいね……………」

額から血を垂らしている穂澄がいた。

水穂にぶつかられその震動を抑えることが出来ずに冷蔵庫の角に頭を打ちつけたらしい。

「あ・・・ああ…………ち、ちがあゝ」

「えっ？水穂？」

様子がおかしかったので穂澄は水穂に近寄るが顔が青ざめている、  
そして穂澄と向き合った瞬間。目を回し倒れた。  
倒れた水穂は『ちがぁ〜』とうわ言の様に言っている。

「医者の妹が血が苦手で如何するんだよ……………」

その後水穂を栞たちに任せ穂澄は朝食の準備をしたがもちろんいつ  
も2人でやる仕事を1人でそれもいつもよりも短い時間で出来るわ  
けもなく、その後帰ってきた灯真にみっちり叱られた……………

第三十三話 メイドさん、初仕事（後書き）

どうも、作者です。

二話連続投稿。あと十七話・・・そろそろ終わりと言つのも良いですがなにやら寂しいような悲しいような・・・  
まあ、投稿は頑張ります。。。

第三十四話 買物上手（前書き）

投稿遅れました。  
すみません。。。

### 第三十四話 買物上手

日はあつと言う間に過ぎていった。穂澄と言えば春休み栞たちの相手をし家事をして過ごしたぐらい。しかしそれでも結構な重労働である。それでも今日まで仕事をこなしているのは水穂のおかげであろう。水穂が櫻坂にメイドとして雇われてから数週間。初日の様な失態は慣れのせいか少しずつ少なくなり今ではほぼ完璧に仕事をこなすようになっていた。

そして今、昼食の食器を洗っている時であった。

「すみません。2人で買物に行つて来てください。」

穂澄と水穂が食器を洗っている間灯真はすでに夜の食材を確認していた。それで食材が少し足りない事に気付き二人に頼んだのであった。

「解りました。じゃあ、穂澄。行こう。」

水穂は濡れた手を拭き壁に架けてあつた買物鞆を取る。

この数週間で水穂は穂澄への印象を改めていた。

毎日しっかりと仕事をこなし、特に栞たちに何かすると言う行動を見なかった水穂は自然に噂は間違いだったと悟ったようだ。それについ先日、借金の事を水穂に聞かれ今までの事を謝ってきたぐらいだ。

「息抜きも必要ですから買物が終わったら2人とも少し散歩でもしてきてください。」

「解りました。それじゃあ、行つてきます。」

穂澄は灯真に財布と買物メモを貰い水穂とキッチンを後にする。

「・・・もしかして私はメイド服のまま外に出るのか？」

「まあね。」

玄関まで来た水穂はふと気付く。

この数週間水穂は仕事の時間は全て屋敷の中で過ごしてた。と言う訳で今日が始めて仕事中に外に出る日である。

この頃はいつもメイド服で過ごしていた為玄関に来るまでは違和感を感じなかったが扉に手をかけた瞬間そのことを考えてしまった。

そして穂澄に聞くとさも、当たり前如く肯定されてしまったため決心がつかないのか後一步が重い。

「抵抗がありますか？」

「だ、だって！ほ、穂澄は執事服でと外に出る事に違和感はないの？」

穂澄の執事服といえばスーツの様に前を止めるタイプではなく何と云うかオーケストラで指揮者が着ているような服。

つまりジャケットみたいな感じである。

スーツならまだ良いがそんな服を着ていたら視線を浴びる事は間違いないであろう。

「確かに最初は抵抗があつたけどもう慣れた。」

「そ、それに誰か友達に会うかもしれないし！」

そんなにメイド服で外に出たくないのか駄々をこねる水穂。

「大丈夫ですよ。いつもは弓道場で髪を一つ結びにして凛々しく弓を射ってる水穂がフリル付きメイド服で髪をツインテールにしながら歩いてるなんて誰も思いませんよ。」

棘のある言葉に水穂は顔を真っ赤にする。

「それじゃあ行きましようか。」

水穂は穂澄に背中を押されながらそのまま半ば無理矢理屋敷の外に出て行った……

「ママ？あれなにー？」

「しっ！見ちゃダメよ。」

穂澄たちは商店街に来ていた。穂澄は慣れていている為普通に歩いているが水穂は顔を真っ赤にして穂澄の後ろに隠れながら歩いている。

しかしそれが逆に目立ってしまったている。周りからは訝しげな顔をされヒソヒソと二人の耳に聞こえてくる。他には携帯を片手に写真を持っているもの。

こっちを向いて拜んでるおじいちゃん。まさに多種多様であった。

「ほ、穂澄。まだなのか！」

水穂はこの視線に耐えられないのか穂澄の肩口を強く掴みながら訴えている。

一方穂澄はどうやら急ぐ気はないらしく水穂に掴まれている事もあがるがいつもより歩くペースは遅い。

「え〜と。八百屋は・・・」

穂澄は手短な八百屋に入っていく。

そしてその様子を見ていた野次馬も同時に八百屋の周りに集まる。

「すみませーん。人参と南瓜かぼちゃください。」

「へいつ！兄さん、今日は彼女を連れて仲がいいねえ！」

頭にねじりハチマキをした八百屋のおじさんが店頭に出てきて人参と南瓜を袋に詰める。

どうやら穂澄はこのおじさんと知り合いらしい。お代を払った後も悠長に世間話をしている。

「ほ、穂澄！早く行こう。」

水穂は肩を締め服を引っ張る。



「うんうん。若いねえ！兄さん。これはおまけだよ。」

そう良い穂澄はおじさんに野菜の詰め合わせを受け取る。

「ああ、ありがとうございます。それじゃあこれで、また来ますので。」

「おう。彼女もまた来てくれよな。」

「わ、わわわ私は彼女なんかじゃありません！！」

穂澄たちは野次馬を通り抜け次の店に向かう……

どれぐらい時間が経ったであろうか。穂澄はその後、肉屋、魚屋、本屋などによってしかもその店主は全員知り合いらしく必ず買う時に三十分は世間話をして必ずおまけを貰って帰るとまさに主婦の鑑かがみとも言える買物をしていた。

だがしかしその間水穂はなんと言うか生きた心地がしなかった。野次馬からの写メの嵐。

そして人ごみを通る時にはお尻を撫でられる始末である。

「それじゃあ、そろそろ帰ります。」

「あらあ！？そう、それじゃあこれはおまけね。取っというて！」

最後に寄ったのはデザートの店。栞たちにと1ホールの苺のケーキを買って最後におまけでチョコレートケーキを1ホール貰うと言う始末。

この際、こんなこととして大丈夫なのかと・・・穂澄の体からおまけをしたくなる様な気体が出ているのでないかと考えるのは辞めよう。

そしてケーキを貰った穂澄はそのままゆっくりとした足取りで屋敷へ歩を進めた・・・

「灯真さん。ただいま戻りました。こっちが頼まれた物で、こっちがおまけでもらった物です。」

穂澄が袋をドンツとテーブルの上に置く。この際おまけの袋の方が二回りほど大きかった事はそっとしておこう。

「ありがとうございます。それではお嬢様達のところに行ってください。午後は遊び相手がなくて少し機嫌を悪くしてますので悪しからず。」

灯真はそのまま袋を持ってキッチンの方へ消えて行った。

「それでは私たちは行くぞ。」

既に真っ赤になった顔を普通の状態に戻し平常心を取り戻している

水穂を先頭に2階へ上がる。  
と、上がっている途中栞たちとばったり会う。

「……………買物なんて速く済ませられないの？」

明らかに不機嫌そうな顔をする栞。2人で遊んでいたらしいが穂澄たちがいないとやはりつまらないらしい。

しかしこんな時の為に灯真が忠告してくれていたのだ。対処法はもう考えている。

「さつき、買物に行つて来ましてね。苺のケーキを買ったらおまけでチョコレートケーキも貰いましたね。今から少しどうかと思っていました。」

その一言で栞の眉がピクリと動く。

「ケーキですか。私は食べたいですけど。栞は如何する？」

「……………うっ」

先ほどきつめに怒った為食べたいなどとはいえない。しかし口の端には既によだれが垂れている。

「……………許していただけでしょうか？」

「……………許す。」

栞は頷きそのままと足早に食堂に行ってしまった。尊もその後を追う。

「……………慣れてるわね。」

感心しているのか呆れているのか解らないような声を上げる水穂。  
まあ、顔を見る限り前者であろう。

「まあ、結果が良ければいいですし……………あのケーキだった  
ら紅茶はフォションにしましょうかね……………」

穂澄はそのまま楽しそうな顔をし栞たちの後を追った……………

### 第三十四話 買物上手（後書き）

どうも作者です。前書きにも書きましたが、いろいろ不運が重なり投稿遅れましたすみません。三日ほど前に書き終えたこの話。

達成感に打ちひしがれながら保存しようとしたその時……  
ブツツツと言う音と共に停電……

もちろん一度も保存していないので最初からやり直しと言うことになり2日ほどシヨックで書く気が湧きませんでした。私事で投稿を遅くしてすいませんでした。この頃の目標は三日に一話なので出来るだけ頑張りたいと思います。

あと最後に出てきたフォションと言うのは紅茶のブランドでフランスが発祥地。全て直輸入らしくアップルティーなどが美味しいらしいです。やはり栞たちはお嬢様なので紅茶のストックもたくさんあるということを表現したかった為出てきたブランド。ちなみに私は一度も飲んだ事はありません！

それでは投稿頑張ります。。。

### 第三十五話 新学期 突入

四月の暖かい風が穂澄の髪を撫でる。

視角に入ってくるのはその四月の暖かな日差し。日差しは穂澄の目に入り丁度いい目覚ましになってくれている。

ジジッ

穂澄の近くで何か音がする。

暖かい

温かい

暑い

熱い？

「あつっ!？」

穂澄は額に高温を感じベッドから飛び起きる。

「ああ、起きた？」

目の前に居たのは悪戯な笑みを浮べる水穂が居た。

しかし服はメイド服ではなく櫻坂学院の制服。そう、良く思えば今日から学院が再び始まる。

新学期となり穂澄は三年へ、栞と尊は二年、そして水穂は新入生として一年になる。

だから目の前にいる水穂の制服姿は新鮮で穂澄は少し頬を赤らめながらドキッと

「　　するわけねえだろ。」

「何か言った？」

ポツリと呟く穂澄。それに反応して聞いてくる水穂、ちなみに片手には先ほどの太陽光を集めて攻撃したと思われる虫眼鏡。

穂澄は溜息を付きながら掛け布団をどかし上半身だけ体を起こす。

「……………乱暴な起こし方ですね、瑞穂。」

「寝坊介ねぼうけには制裁を！穂澄には鞭打ちを！ってね。」

虫眼鏡を片手にハイテンションな水穂。多分今日から栞たちと同じ学院に通うことが嬉しいのであろう。鼻歌を歌いながらその場でクルクル回ったりしている。

「寝坊介ってまだ七時半じゃないです……………かあ!？」

穂澄はチラッと見た時計を持って大声を上げる。

ちなみに穂澄たちが起きなければいけない時間は六時。栞たちを起こさなければ、いけない時間は七時。

一時間半の寝坊、はつきり言うとかなりヤバイ。具体的に言うところのまま一階に行ったらもの凄い笑顔の灯真が鞭を持って待ち構えて居そう……………

「おやすみなさい。」

「寝るなっ！灯真さんは『昨日疲れただろうから起きるのは大変だろっ。』って怒ってないから。」

「……………本当ですか？」

「泣くなっ！見てるこっちが悲しくなるでしょ!？」

穂澄は掛け布団を被り顔だけ出して半べそをかきながら水穂の顔をまるで迷子の子犬のような目で見ている。

そのせいで水穂は顔を赤らめながら穂澄から距離を取ってしまう。

「ほらッ！早く出ないと私が鞭持って来るわよ！」

「わ、わかりました。」

穂澄はゆっくりと布団の中から出てきて水穂の制服を掴む、灯真がそんなに怖いのかもはやいつもの穂澄の様子はそこにはなく幼少の頃に退化している気もする。

水穂はそのまま穂澄を引つ張って一階に下りて言った……

「良かったですね、穂澄さん。」

「………つまんない。」

学院への通学路、四人は普段どおりにその道を歩いていた。

あの後キッチンに居た灯真はもの凄い笑顔で迎えてくれた。当然穂澄は震えながら水穂の後ろに隠れていたがキッチンでそんなに素早く動蹴るわけもなく捕まり耳元で灯真は囁く。

『次、頑張つて下さいね。』

普通の言葉であったが灯真が言うとき重みを感じてしまう。

とり合えず穂澄はそのあと急いで制服を着て、朶たちと合流し、今に至るといっわけだ。

「すみませんでした。多分水穂が新しく入ったから緊張が途切れていたんだと思います。」



「……………本当に悪いと思ってる？」

ふいに栞が聞いてくる。

「はい！本当にすみませんでした！」

穂澄が頭を下げる瞬間　　栞の悪戯な笑みを一瞬目の端に捉える。  
口の端をつり上げその顔はいつも穂澄をいじめる時の目。

「……………じゃあ、脱　　」

「　　脱ぎませんよ？」

「……………チツ」

どうやら凶星だったらしい。

栞は舌打ちをしながら穂澄の顔を睨む。  
と、その時栞の目が水穂と合う。

「……………」

2人の間で一瞬の沈黙。そしてその後の栞の悪戯な笑み。これは例  
えると悪魔が獲物を変更し、今から捕食しようとする感じの  
顔。

「……………じゃあ、代わりに水穂が脱げ。」

「なっ！？何で私が脱ぐんですか！」

「……………今なら私が直々に脱がしてあげるよ？」

栞は水穂の豊満な胸に抱きつきながら上目使いでそう言う。

いやいや、流石に公衆の面前でそんな事は……

「えっ！？栞お嬢様が直々」

水穂は頬を赤くし、満更でも無さそうな顔をする。

それで良いのか？水穂よ。

確かに栞の上目遣いは破壊的に悩殺シヨットだ。それを抱き付かれた上体で出されたらまさに最強コンボといっても過言ではない。

しかし穂澄もドキッとはするが講習の面前で脱げと言う命令は流石に聞くことはないであろう。

そして穂澄の目の前に居る水穂は腰をモジモジさせながらめっちゃ悩んでいる。

栞も栞でそんな水穂の反応を見て楽しんでいるのか満面の笑みを浮かべている。

「お嬢様がしてくれるなら」

「まっ！待ってください！ダメです。女の子同士なんてっ！はうっ〜!!」

水穂はついに鞆を穂澄に投げ渡し制服のリボンに手をかけると、水穂以上に顔を赤くした尊が2人の間に割ってはいる。

「……………なんで邪魔するの？」

「だっ！だっ！女の子同士だなんて、イブとイブだなんて！！！」  
顔を赤くして何やら叫んでいる尊。しかしそれを朝の通学路で話す話題ではない事は確かだ。

先ほどから同じ学院生や近所の住民さんから目が痛いです。

「……………だけどアダムとアダムよりはマシ。」

「確かにイブとイブだったら後ろに花とかありそうですけど、アダムとアダムだったら何か汗臭そうなイメージが……………」

「穂澄さんもそこで納得しないでください〜！」

尊の声が通学路に響いて行った……………

ちなみにその後、学院に揃って遅刻した事。

それとその日、穂澄たちが学院にいる間、櫻坂の家に騒音のクレームが来ていた事は言うまでもない……………

### 第三十五話 新学期 突入（後書き）

あーしたーはさーくしゃの誕生日ー みーんなーで集まって、一緒におめでとー・・・

と言う訳で10月17日は私！作者の誕生日です。

何故、この事を後書きに書くと言いますと、それは単純明快っ！

特に祝ってくれる彼女のな人がいないからです（泣）

まあ、別に彼女のな人物が欲しいって訳ではないのでとり合えず今は受験とこの作品の完結を目標に頑張って生きたいと思えます。

感想&amp;mp;評価待ってます。

それでは頑張ります。。。

### 第三十六話 霧音の悩み、灯真の笑み

櫻坂の家に執事として働き始めてから数ヶ月。毎日毎日波乱の日々で元々出席の少なかつた穂澄はより一層学院に行く事が少なくなっていた。

まあ、そんな事言っても何とか三年生に進級できた穂澄。

そして普通クラスに飛ばされること無く穂澄は二年のときと同じ生徒と一緒に特進クラスの教室に居た。  
なのに

「　　なんで俺はこんな事をしているんだ？」

朝、穂澄は遅刻して担任に怒られた。

そして今、春の暖かな日差しを浴びながら……廊下で水をいっぱい入れたバケツを両手に持って立っています……

「　　つーか！いつの時代っ!？」

「　　おい、五月蠅いぞー」

明らかに笑いが含まれる担任からの注意。

廊下からでも教室内で笑いを堪える生徒達の息遣いが聞こえる。

「　　……こんな所お嬢様達に見られたら、三日はそれをネタに弄いじられる。」

穂澄はいつ終わるかわからない拷問を受けつつ時が早く経つのを待っていたが、実はもう授業時間は終わっている為。下の階からは生徒達の声が聞こえる。

元々穂澄の学年は特進クラスは一つしかなく、今現在穂澄たちがいる階は穂澄たちのクラスだけであったが授業が終わったとなると『櫻坂親衛隊（非公認）』が来たら一瞬で襲われる可能性がある為、穂澄は今現在はいっきり言う生き心地がしなかった。

「放置プレイが好みなんですか？」

後ろから声がした。

うん、誰かわかるぞ。こんな事を言うてくるのは霧音以外にいるわけが無い。穂澄はバケツの水をこぼさない様にゆっくりと後ろを振り向くとそこには車椅子に座っている霧音がいた。

二年の教室から車椅子に乗りながらどうやってきたかは聞かない。聞きたいけど聞かない。

見た目からも想像できる通り車椅子というものは結構重い。それを明らかに弱そうな霧音が片手で持ってこれるわけがなからう。とり合えず今は自分が考えている疑問を霧音にぶつける。

「何でここにいますか？」

「そんな、私の存在から否定するだなんて……なんて深い侮辱。」

いきなり頬を染め車椅子の上で体をクネクネさせる霧音。

先手を打たれたせいか穂澄は手に持っているバケツの重さが数倍にもなったように感じる。

「別にそう言う訳ではなくて、何故、二年生のあなたが三年の特進クラスの前にいるかということですよ。」

なるべく解りやすく、尚且つ、霧音を喜ばせないように質問を変え

て言う。

穂澄が質問をわかりやすくした為霧音も『なるほど』と、首を縦に振りながら再び何やら考え始めた。

そしてなにやら答えを導き出したのか下を向いていた顔を上げ、真っ直ぐと穂澄のほうを向く。

「……………何か言い答えが見つかりましたか？」

まあ、今向き合っている状態で理由を考えていると言う事は今から霧音が言うであろう、理由は今考えついたものであつてぶつちやけ聞かなくてもいいのだが車椅子に座っている霧音も結構真剣に考えていたつばいので穂澄もそう言う。

「……………実はこの頃彼のS度が低くなって、そこでいつも私をなぶつてくれる穂澄さんに助けを求めようと……………」

「今考えたわりにはもの凄いいんどくさい事頼みますね！」

穂澄はバケツを置き額に手を当てて考える。

別にいつも霧音をなぶつて遊んでいる自覚はないが霧音はそう受け取っていたらしい……………」

「し、しかし私はSでもなければ霧音さんの彼氏の事も知りませんし、それに何よりめんどくさいです。」

あつ、今少し本音出たな……………」

穂澄は最後に言ったことを少し後悔しながら霧音の方を見て返事を待つ。

しかし穂澄が見ると霧音は車椅子の上で自分の体を捻りながら顔を

赤くしている。

帰りたい・・・激しく帰りたい・・・

穂澄は額に嫌な汗をかいているのを感じ早く教室に帰りたくなってきた。

「・・・イイツ!・・・イイですつ。それですつ。その『別にお前が困ってようが俺には関係ないZ E』って言う感じが私の心を刺激するのっ!」

「・・・人って頭をめぐらせると何でも自分の思うように解<sup>かい</sup>釈<sup>しゃく</sup>できるんですね・・・まあ、さっき言ったとおり私は手伝えないので、それでは・・・」

「ああっ!?!そんな事言つてっ!放置プレイ!?!そんなに私のツボを知ってるなんてやっぱり穂澄さんは」

ピシヤッ!

霧音がまだいろいろと言っていたがまあ良いだろう。多分今の霧音には何を言つても光悦<sup>こうえつ</sup>とした顔で『もつと!もつとお!』とか媚びて来るであろう。ああ、言う相手には彘で慣れているので対処法も知っている。それはやはり『無視』するのが一番なのであるう。

「穂澄、ノート貸して。」

「何でお嬢様達の周りには変な人が多いんだろう? Donaldとかもそうだし(著作権的な意味で)」

「穂澄!」



「うおっ!?!」

穂澄は耳元で叫ばれた事でびっくりして妄想の世界から引きずり出された。

まあ、あれは妄想とは言わないと思うか・・・

「何だ、愁寺か。何か様か?」

「ノート。」

「ああ、机の上にあるよ。勝手に持って行って。ああ、それにしてもどうすればいいのか、たぶんあの後霧音さんは栞お嬢様のところに行くし・・・」

まるで周りが見えていない穂澄はそのまま教室の自分の席について暫く霧音への対策を考えていた・・・

「穂澄さん。会計をお願いしますね。」

邸に着いた穂澄は食堂で灯真と邸の会計作業をしていた。これはいつもの灯真が済ませてくれているのだが、この頃は水穂に仕事を覚えさせる事に専念していた為少し会計をサボっていたのだ。

「灯真さんが会計を遅らせるなんて珍しいですよね。」

「まあ、私も人間ですので少しぐらいの失敗はありますよ。」

灯真は苦笑いを浮かべながらレシートや領収書を片手に電卓を打ち続けている。

この邸の資金源は竣夜から貰っているので多く貰う事も可能なのだが、それは灯真いわく、『幼い頃から贅沢な暮らしをしているとしてもその時に困ってしまう』らしい。まあ、今の状態でも十分贅沢とってしまえばそうであるが水穂の分の生活費を加えても全体量の資金源が増えていないのは灯真がやり繰りしているからでそう考えると灯真の能力はやはり高いと改めて知らされる穂澄であった。

「それに、お嬢様たちは今後の為にも」

灯真の電卓を見る目がキュウっときつくなるのが解った。穂澄は一瞬その目を見ただけだったが背筋がゾクツとするのが自分でも解った。

「灯真……さん？」

「えっ？ああ、なんででしょうか？」

こちらに向けられたのはいつもの笑顔  
まあ、気のせいであろう。

「いえ、頑張りましょうね。」

「ええ、……そうですね。」

その含んだ言葉に今の穂澄は気付く事が出来なかった。

会計を行うつ灯真の目は先ほど見たとおりのキツイ目をしていた・・・

第三十六話 霧音の悩み、灯真の笑み（後書き）

パソコンが壊れる物だと始めて思い知らされた作者です。

すみません。パソコンが壊れてました・・・

一応、兄が帰ってきてくれたのでパソコンをバックアップし買い換えずにすみましたが、一ヶ月以上パソコンに触れない生活をしていて自分がどれだけパソコン中毒化と気付きました。。。

まあ、投稿頑張ります。。。

### 第三十七話 言いたい事（前編）

「それでは私は竣夜様の所へ行つて参りますので穂澄さんはよろしくお願いします。」

とある休日。灯真は何故か竣夜に呼ばれ櫻坂の会社に行く事になった。

灯真はいつもの執事服ではなく、何故かノリの効いたスーツを着ていった。

「さて、それでは尊お嬢様。これからどうしましょうか？」

「えっと、そうですね。宿題は終わってますし、今日は四人でゆっくり過ごしましょうか？」

玄関まで灯真の見送りをしていた2人はそんな事を言いながら再びリビングに戻ると、そこには栞と水穂がいた。

2人は私服で栞は珍しく………と云うか穂澄自体は制服以外見た事の無いスカートを履いてベレー帽をかぶっていた。

水穂は白と黒のチェックの服にジーパンと云う、まさに2人とも余所行きの格好をしていた。

「栞、何処に行くの？」

どうやら尊も聞かされていないらしく、不思議そうな顔をして栞達を見る。

「………これから、水穂と服（下着）買ってくるの。」

「栞お嬢様。カッコはいりませんから、一応私も男ですからそういうことは言わなくて結構です。」

栞はニヤリと口の端を浮べながら笑う。

「えっ？それじゃあ私も」

「……………ダメ、尊は連れてかない。刺激が強すぎるから。」

「し、刺激ってどんな服を買うつもりなんですか？私はTシャツぐらいとしか聞かされていないんですが？」

『刺激』という言葉に明らかに動揺する水穂。しかし栞は別に動じるような事もなく、ベレー帽をかぶったまま笑っている。

「そ、そんな私だって少しぐらいなら」

「ガーターベルトとか黒とか赤とかのTバックとか、穂澄に見せること出来る？」

栞が口を挟むと先ほどまでムキになっていた尊は穂澄を一瞬チラリと見た瞬間、茹蛸の様に顔を赤くし俯いてしまう。

「栞お嬢様。あまり尊お嬢様をいじめないでください。それに何で私がそこで駆け引きに出てくるんですか？」

「……………何言ってるの？尊のMはマゾのMだから良いの。」

「えっ！？マジっすか！？ってことはもしかしたら栞のSはサディ

ストのS何ですか？」

「……………ご想像にお任せします。それより早くしないと赤のTバックが売り切れちゃうからもう行くよ。」

栞は本気でそんなキワドイ下着を本当に買おうとしているらしく、ポケットの携帯を見て時刻を確認するとすぐに水穂の手を取ると小走りでリビングを出て行く。

水穂は何故か手を握られた事に顔を赤くしていたが、もしかしたら水穂ってレ

「そこっ！変な妄想しない。」

いや、何で声に出してないのに気付くの！？

そんな事を思いながらとり合えず穂澄も、2人を見送りに玄関まで小走りに走る。

「……………それじゃあ、尊。穂澄（野獣）とお留守番。頑張つてね。」

「いやいや、前も似たようなこと言われてましたけど、栞お嬢様の中で私はケダモノなんですか？」

「……………何を今更っ！この前、あんな事したくせにいつ

「いやいやいや、身に覚えの無い言いがかりはやめてください。ちよつとツ！水穂も変な顔で私を見ないでください。」

そんな事を言いながら、栞は水穂を連れて出て行った。

穂澄は穂澄で何故、休日こんなに疲れなければいけないのかと自

分を呪っていた……

栞達が買物に行ってから数10分。特にする事もないのだが、尊はこれ以上なく緊張していた。

現在はリビングで穂澄とマツタリお茶を飲みながらテレビを見ているのだが、それは表面上のことであり、尊の心の中は大慌てであった。

それはなにより、穂澄と2人つきりと言う事もあるのだが、さつき栞が言っていた、過激な下着の事で栞が言った『穂澄に見せること出来る?』という言葉が頭から抜けず、しかもそんな事を言われたせいでその状況を想像……いや、妄想してしまった為に非常に穂澄と2人つきりになることに抵抗感を覚えている尊であった。

あわわっ。穂澄さんと休日の邸で2人つきりなんて、想像しただけで緊張するよぉ

尊はテレビを見て笑っているつもりだが、実際テレビの内容など一片たりともあたまに入っていない。それより、自分が考えれば考えるほどに自分の顔が赤くなるのを感じ恥ずかしくなって俯いてしまっ。

「尊お嬢様。お茶のおかわりはどうですか?」

「ふえっ!?!いや、別にあんたの事なんか考えてないんだからっ」



「・・・・・・・・・・・・・・・・」

2人の間のイタイ沈黙。

急に声を掛けられた為に何故か出てきたツンデレ。これがもし灯真だったら『わかっていますよ』と、にこやかに流してくれるだろうがそう言うネタに敏感とも言って良い、実際に今の穂澄は尊のカツプを取るうとした状態で止まっており、微かではあるが頬が引きつっている気もしなくはない。

ど、どどどどうしよううつ。これってツンデレだよね！ツンデレだよ。つまりこれを訳すと『今、穂澄さんの事をめっちゃ考えてました。』的な感じだよ。

尊は今にでも溢れそうな涙を抑え、冷静を装う。

「ええっと、冗談ですよ。なんて言うか・・・・・・・・そう、今、流行のツンデレをやってみたくなくて、今が丁度そのタイミングなんだと思っただけですよっ！別に穂澄さんのことなんてこれっぽちも考えてないですから！」

「・・・・・・・・えっと、そう・・・・ですよ。まさか尊お嬢様がそこでツンデレをチョイスするとは思いませんでした。HHHHA  
H A H A」

明らかな社交辞令のような笑い方に尊は本当に泣きたくなった。流石に穂澄も顔の歪みを隠せない。

や、やっぱり私は穂澄さんに嫌われて・・・・・・・・

尊は考えれば考えるほどネガティブになっていく、目が潤み始める。

「尊お嬢様!？」

「え?あれっ?」

穂澄は驚いて尊の名前を呼ぶ。

尊もそれに驚き穂澄が見ている場所を手で触れる。尊の頬には涙が流れていた。

穂澄はびつくりしたらしくカップを慌てておきソファーに座っていた尊の前に行き顔を覗き込む。

「どこか痛いんですか?それとも」

「だ、大丈夫です。そ、その覗かないでください。」

自分でも何故涙が出たのかは良くわからない。

だけど今の顔を穂澄に見て欲しくなかった。穂澄の心配そうな顔を見たくなかった。

尊はぼやけた目で穂澄を見ると穂澄はソファーの隣に座りやはり心配そうな顔で自分を見ていた。

その顔が自分の心を締め付けていた。

笑っていて欲しい 笑顔を自分に向けていて欲しい

心配そうな顔で自分を見ないで・・・

「穂澄さんっ!」

私は堪らず穂澄さんの胸に飛び込んでいた。穂澄は驚いていたが突き返されることも無かった。私としては力いっぱい抱きしめて欲しかったのだが今はこれだけでも良い、少しずつ、どうにかして行く

うと自分で決めたから・・・

「お嬢様？」

「穂澄さん、私」

勇気を出して、譲ってばかりじゃダメ。手に入れたいなら自分で・・・

「穂澄さんの事が好きです。」

第三十七話 言いたい事（前編）（後書き）

遂に尊が告白しました。自分でも書いていると鳥肌が立ってしまいました。

まあ、文章的には駄作のような気もしているので最近この話を書き続けていいのかと自己嫌悪気味なのですが、とり合えず文章はともかくコレカラの展開を妄想・・・いえ、想像しながら頑張って生きたいと思います

それでは評価&感想待ってます。。。

### 第三十八話 言いたい事（後編）

「穂澄さんの事が好きです。」

如何すれば良いかわからなかった。

自分の胸の中で泣いている少女を抱きしめるべきか、それとも突き放すべきか。確かに彼女は可愛い。多分・・・自分でも心の中では嬉しいのであろう。

心臓の音が痛いほどに強くなってくるのを感じ、少女にこの音を聞かれるのは恥ずかしかった。

少女の顔は見えない。少し乱れた黒髪が顔を覆い、泣いているのかも解らない状態であった。

「あ、あの・・・尊お嬢様？」

「・・・っ」

声を掛けると少女は顔を更に自分の顔に埋め、服を掴んで来る。

「お嬢様・・・」

俺が少女の肩に手を置くと少女はその肩をビクッと揺らし、そして服を掴む手により一層の力が入る。

「ごめん・・・な・・・さい。」

振り絞った声。

「見ないでください。突き放さないでください。もう・・・迷って

入られないんです。」

途切れ途切れ、尊はゆっくりとそう言う。まるで自分に言い聞かせるように、何かを決心したように。

「好きなんです、穂澄さんが。いつからかは私にも良くわかりませんが、もしかしたら始めてあった時から、それとも一緒に学院に通い始めてからかもしれません。離したくない。私を見ていて欲しいんです。」

「……………で、でも、お嬢様。私は　　むぐっ!?!」

次の瞬間。穂澄は勇気を振り絞って尊の肩に力を入れて突き放そうとした。そして顔をのぞこうとした穂澄に尊は　　逆に体に力を入れて穂澄を押し倒し、油断したその唇にキスをした。

穂澄は驚き目を見開き尊の顔を見ると尊は目を力強く瞑りながら顔を真っ赤にしていた。前に酒の力を借りて一度キスしたことがあったが、尊自身はそれを覚えていないであろう。

しかし、今しているキスは尊の意思で酒も誰の力も借りていない。そう考えるともう一度突き放せるほどの力を持つてはいるものの、力が入れることが出来なかった。

「……………んふっ……………んん……………ぶはっ!」

尊は暫くキスをすると唇を離し硬く閉ざしていた目を開いた。しかし顔はまだ息がかかるほどの距離にあり、尊は少しとろんとした顔をしていた。

「お嬢様……………私は　　」

ジー

「「？」」

穂澄は荒い息を吐きながら尊に何か言おうとした。と、その時、明らかに人工的な、そして機械的な音が2人の耳に届き二人は揃ってソファアの横を向く。

「……………いいよお、いいよお。さあ、穂澄。次はそのままの表情で尊の胸に手を伸ばしてモミモミツとヤっちゃって！」

隣にはビデオカメラ片手にハアハアしている栞がいた。

「お、お嬢様！い、いつからそこに！？」

「……………い、いつからそこにつて……『好きなんです、穂澄さんが。いつからかは私にも良くわかりませんが……』etc』らへんから。」

「そ、そんなところからっ！？も、もしかして、水穂もっ！？」

「……………水穂は今メイド服に着替えてくるって言ってた。ランジエリーショップは今日休みだったから早めに帰ってきたの。それより、穂澄。いくら着替えるって言ってもさっさと退かないと水穂が来ちゃうよ。」

栞はニヤリと悪戯な笑みを浮かべ、穂澄を見る。

もしこの状況で水穂が来たらいくら穂澄が弁解しようとして、明らかに穂澄の敵の栞が今撮っているビデオを水穂に渡すであろう。そんな事になったらここ一ヶ月ほどでやっと普通に話を出来る様になって

いた状態が崩れ、またいろいろと厳しい目で見られる事になるであろう。

そう、考え始めた穂澄は一気に顔を青くすると尊を乗せたままの体を一気に起こす。

「きゃっ!?!」

尊は短い悲鳴をあげ反射的に穂澄の体に抱きつく。  
と、それに一瞬。ほんの一瞬。栞の顔が歪んだ。

「す、すみません。尊お嬢様。この話は……今日、夜にしてください。」

一応尊を気遣ってか。穂澄はさつさと、自分の部屋に戻ってしまった。

そして残されたのは尊と栞。

「……………」

2人の間に沈黙が続く。と……

パタンッ

栞がビデオカメラを閉じて、片膝をついて録画していた状態から立ち上がり、ソファーに座っていた尊を見下ろす。  
尊も口を開きはしなかったが栞を見上げていた。

「渡さないよ。穂澄だけは……」

静かに言う栞。その顔は先ほどの悪戯な笑みは微塵も感じられない。いつものような溜めのある喋り方ではないという事はやはり本気な



のであるう。

「私も渡さない。やっと……やっと自分の気持ちがあったんだから……」

2人は静かに、そして激しく火花を散らしていた。

「……水穂、如何しよう。」

二人が一回で火花を散らしていた頃、穂澄は水穂の部屋を訪れていた。

水穂はすでにメイド服を着ておりベッドに腰を掛けながらさつきから下を見ている穂澄をジッと見つめていた。

「如何したの？言いたい事があるなら言いなさいよ。私が聞いてあげるから。」

「……怒らない？」

「別に怒らないわよ？」

穂澄は上目使いで水穂を見る。水穂は一瞬ドキッとしたが、まあ今はそれより穂澄のこの落ち込みようの方が気になっていたのです。

ちを優先した。

「・・・尊お嬢様に『好きだ』って言われた。」

「・・・へえ、それはそれは・・・・・・・・・・・・・・・・えっ？」

「その後無理やり押し倒されて、その・・・キスされた。」

「ええっ!？」

水穂はびっくりして一瞬、何が何だかわからなくなった。

ドッキリとかフィクションですとか言われるかとも思ったが、穂澄の表情は相変わらず暗い。

「俺は・・・逃げてきちゃった。何も言わずに・・・お嬢様を傷つけていたら如何しよう・・・？」

更にどんよりとした空気を纏い終いにはテーブルに『』の字を書き始めてしまった。

「・・・・・・・・!!」

パアアアッ!

一瞬何が起こったかわからなかった。それは数秒経っても同じ事でわかったことは自分の頬に痛みがあると言っ事。

そう、穂澄は水穂に叩かれたのだ。

穂澄は叩かれた左頬を押さえながら瑞穂の顔を見る。

水穂は起こっている様子ではなかった。どちらかと言つと悲しい。そういう感じの顔をしていた。

「穂澄。」

「・・・何？」

重い声。先ほどとは比べ物にならないくらい水穂の声は真剣そのものであった。

穂澄は覚悟はしていた。どちらかと言うと怒ってくれた方が楽な気がしていたから、その方が諦めも決心もつく。櫻坂の執事を辞めて出て行くという決心が・・・

しかし、水穂の態度は違っていた。

たたかれた事により蹲っていた穂澄と同じ目線になるように腰を屈め穂澄の目を真っ直ぐと見る。

「お前が悩んで如何する？穂澄。お前は尊お嬢様に選ばれたんだ。」

「選ばれた？」

「そう、学院の男子生徒でもなく、灯真さんでもなく、穂澄を選んだんだ。それを何で悩む？お前は、胸を張って自分の気持ちを伝えればいいんだよ。」

「・・・」

その言葉が無性に心に響いた。暗く沈んでいた心は今の水穂の言葉によって救われ、怒られるより何倍もの光を与えてくれた。

水穂はそのまま、無言で穂澄を立たせる。穂澄も押さえていた左手を退かしスツと立ち上がった。

「桂 穂澄！」

「・・・はいっ！」

いきなりフルネームで呼ばれ穂澄は肩を跳ねさせるが直ぐに返事をする。

「胸を張って自分の気持ちを伝えてきな！」

水穂は笑って穂澄の頭を撫でる。

と、一瞬穂澄の視界に別の人が写る。

美捺母さん？

それは故人の母か？一瞬のことによくわからなかったが穂澄には頭を撫でている少女が母親に見えたのだ。

穂澄は少しの間呆然としていたが、直ぐにその顔に微笑が写る。

「ありがとう、水穂。」

穂澄はそう言つと水穂の部屋を出て行った・・・

第三十八話 言いたい事（後編）（後書き）

これなんて小説？

・・・どうも竣慎です。

すいやせん。何故か今回は書きなれていないシリアスな展開になつてしまいました。

自分でも書いている間はムズ痒くてしょうがなかったのですが、書き直す気力などもちろんなく、かき続け出来たのがこの三十八話・  
・まあ、いつか？

すいません・・・評価&感想待ってます。。。

### 第三十九話 屋上での小さな戦い（前書き）

まず、謝っておきます。すみませんorz

無計画で始めたこの執事になる50の方法。

高校受験なんて軽く考えていた自分は投稿を途切れさせないようにする事はできず、応援の感想と、手痛い感想を無視しながら、投稿を遅らせた事を謝っておきます。。。

とり合えず、高校にも何とか入学し、授業も自分で組んで（単位制なので）少し時間に余裕が出来ましたので、また投稿を続けさせていたいただきたいと思います。

待っていた人も待っていなかった人もどうか気長にお付き合いください。。。

あ、あと、少し文章の書き方を変えたので、何かわかった人は感想&アドバイスをくれるとありがたいです。。。

### 第三十九話 屋上での小さな戦い

正午、櫻坂学院にて・・・

尊の告白から数日が経ち、3人はいつもの日課通り屋上で昼食をとっていた。

穂澄は水穂の助言の後はいっぴかりと尊にあやまり、今は返事を出す事はできないと言って、それで一先ず終わったはずであった。だが、その話が終わったとは言え三人の間の空気まで変わるという限らないのである。

「「「「「「「「「「「「「「「

三人の間では沈黙が続き、昼食を黙々と食べている。

しかし、穂澄を挟み尊と菜の間では静かに火花が散っている様に（穂澄は）見えた。

実際、この数日。2人が一緒にいる時間は目に見えて減っており、会話も少ない。そしてそれに比例して穂澄は2人に個別に呼ばれる為、此処最近穂澄は忙しい毎日を送っていた。

「「「「「「「「「「「「「「「  
「・・・あの、お2人共。喧嘩でもしましたか？」

穂澄は空気に耐えられず2人に聞く。

「「何で？」

2人は声をそろえて言う。二人とも笑ってはいるが、重い空気は変わらない。

「「・・・いや。別に・・・・・・・・ただ、この頃お2人が過ごし

ている時間が明らかに減っている気がして」

「……………私は尊と一緒に居たいけど尊がこの頃第二次思春期に入ってるんだよ。穂澄も暫く距離を置いたら？」

「……………何言ってるの？ 栞。あなたが女の子の日が来ないって真っ青になってるから私が気を聞かしているんだよ。彼氏でも出来たの？」

「……………」

明らかに棘のある2人の言葉。原因が自分にあるとわかっていたとしてもこれは流石に止める事は無理であろう。

もしこの状態に奉里などがやってきたら目を丸くして驚くであろう。

しかもこんな時に限って水穂はクラスの用事とか言って昼食は別なのである。多分、ここに水穂がいてくれれば話題を変えるぐらいの事はしてくれたのだろう。

まあ、穂澄が話題を変えればいいとも思うが、そんな事をすれば事態がますます悪化する事は流石に穂澄でもわかる。

愁寺か奉里を連れて来れば良かった。

実際、連れて来ようか迷っていたのだが尊に返事をする前であったので出来るだけその事を知っている人物は少なくしたかったのが現状だ。

穂澄は2人に気付かれないように、尚且つ深く溜息を付いた。

「穂澄さんは私と栞のどっちが好きなんですかっ！」



「ブツ!？」

静かなる戦いを続けていた尊と栞。

流石に話の真ん中に居る自分が割り込んだりしたら話がもつとや  
やこしくなるであろうと2人を見守りつつ放っておいたのだが、我  
慢負けした尊がいきなり穂澄にとんでもない質問をぶつけてくる。

そんな事を予想していない俺は飲みかけていたお茶を吹いて、盛  
大に咽むせび返してしまう。

「……………穂澄? わかつてるよね」

「もちろん穂澄さん……………わかつてますよね?」

しかし、当然の如く2人は咽た俺に心配をする様子などない。そ  
れより今は俺の答えの方が最優先なのであろう。

当然いつもならばぐらかすのが正解であろう。だが、2人の視線  
と尊の事件(?)の事もあり流石にそれはこちらとしてもそれは気  
が引ける。

「わ、私はあゝ」

何とか逃げ道を探そうとするのだが、こんな時に都合よく携帯が  
鳴ったり、屋上に第三者が現れるなどと言う都合のいい事はそうそ  
うおきるわけも無く、俺は言葉を濁す事しか出来ない。

本音を言えば俺は2人も好きだ。だけど、それは恋愛感情では  
なく、凜や真希菜たちと離れて暮らしていた時、笑顔を向けてくれ  
た2人は自分にとって家族のようなもので、とてもじゃないけどど  
ちらかを決めるなんて事は俺には選ぶ事が出来なかった。

「……………ど、どちらも好き(家族として)……………ではダメで

しょうか？」

「……………す、好き？」

「私も、栞も？」

「……………は、はい」

再度聞きなおされると流石に恥ずかしい物がある。

それにもしこの答えに納得がいかず喧嘩がヒートアップすることになれば2人はもつとなかが悪くなってしまふ事を考えると、2人の反応を見るまで、俺は生きた心地がしなかった。

「……………す、好き（異性として）か……………」

「私も、栞も……………（ハーレム的な意味で）……………」

「……………？」

俺は微かに気付いた。

2人の頬が何やら赤くなってきたことを……………

あれ？ 勘違い……………してないよ……………な？

しかし、時、既に遅しとはまさにこの事であろう、2人は明らかに言葉の意味を勘違いして、ニヤニヤと緩みきった顔で笑っている。多分、俺が緊張して顔を赤くしていた事も手伝って見事に勘違いした2人は、お互い目を合わせて笑っている。

「……………仲直り」

「うんっ！」

2人は何故か力強く手と手をつしりと握り合い、まさに男の友情と言っべきか？ 熱く、そして俺には聞こえない声でなにやらこそこそと笑いながら話していた。

結果オーライ？ でいいの・・・かな？

俺は笑顔で話している2人の横で、これからの不安と2人が仲直りをした安心感を持ちながら、どこまでも青い空を眺めていた・・・

## 第四十話 さよなら

「約束……まさか、忘れてはいませんか？」

「……………」

いつもと変わらない笑顔。

いつもと変わらない様子で、その青年は俺の前に一通の封筒を差し出してきた。

「『十年』……口で言うのは簡単ですけど、今改めて思い返すと大変な毎日でした」

「……………」

「約束を守る為にあなたに仕え、自分の青春を棒に振ったのですから」

「…………後悔しているのか？」

俺は彼の言葉にやっと、ひと言返す事が出来た。

椅子に座った状態から目の前に立つ青年を見上げる状態で俺は彼の目を見据える。

彼の目が、キュウッと細くなり、鋭くなるが、顔に浮かぶ笑みは変わっては居なかった。

「いえ、後悔なんてしていませんよ。貴重な経験をさせてもらったと、ある意味では感謝しているほどです」

「……残る気は」

「ありません。ありえません」

間髪いれずに青年はそう言い切り、俺は迂闊な事を言ったと思いきつく口を結ぶ。

「いままで、ありがとうございました。結構……楽しかったですよ……… 竣夜」

青年は相変わらず、そして変わらない笑みで俺の顔を見据えると背を向け出て行く。

「そうか……約束だもんな……… 灯真」

俺は、何のためらいをもたない灯真の背中を見つめながら、革の椅子に再度、深く寄り掛かった………

「人生には出会いと別れが数多くあると思うんだ」

「………」

「………聞いているのか？」

「まあ、一応は」

俺は、適当に頷き、苦笑いを浮べる。

今現在、俺の目の前にいつもと変わらない不敵な笑みを浮べる峻夜が革製のソファ―にどっかりと座っている。

ある休みの日の早朝。今だ帰ってこない灯真の代わりに邸の仕事のほとんどをこなす為、穂澄は早めに起きて、仕事を始めようとしたとき、予期せぬ珍客が訪れた。

そして、その珍客は訳のわからない話を言い始め、俺は今、苦笑いしか浮べる事しか出来ない。

「実はな。今日、灯真が執事を辞めちゃったんだ」

「……………へっ?」

「てへっ 灯真が執事辞めちゃった」

「『てへっ じゃ、無いですよ! 何で!? 何故!? why !?』」

「まあまあ落ち着け、お前もこの頃の灯真の変化に少なからず気付いてはいただろう?」

確かに少しは気付いていた。いつもは完璧超人の灯真さんが、仕事を遅らせたり、わざわざ難しい仕事を俺に時間をかけて教えてくれたり、今考えるとそれは、自分が辞めた時に、尊や栞が困らないようにする為だったのかもしれない。

「まあ、予想はついてはいたんだよな……………」

「それは、灯真さんがやめる事をわかっていたんですか?」

もし、わかっていたのなら、何故それを止めようとしなかった。それは竣夜ほどの優秀な人なら何の事でもないはずだ。

俺はそう言おうと喉まで言葉を出すか、竣夜の厳しそうな顔を見て、その言葉をギリギリのところで飲み込む。

「……あいつはな。もとは俺と同じくらい……いや、ある種、俺より良い家の出なんだよ」

「えっ？ そうだったんですか」

確か前に聞いた話では灯真、真琴、竣夜、秋水辺りは年がほとんど同じで通っていた学院も一緒だったらしい。それだからこそ竣夜は昔の事情を知っているのかもしれない。

「まあ……いろいろあって、その家に入れなくなった灯真を俺が執事として雇って、今まで過ごしてきたわけだったんだが……」

どうも、竣夜の言葉にキレがない。いろいろと聞きたい事もあるのだが、ここは言葉を紡いだ。

言葉を紡いで言葉を待っている俺に気が付いたのか、竣夜もそれを悟り、言葉を続ける。

「……あいつはその誘いを断ってきたんだ。家を追い出された負い目もあったのかしれない。それとも、追い出されてただの無一文になった自分に手を伸ばす、俺に苛立ちを感じていたのかもしれない……」

「……」  
「十年。櫻坂に付いていてくれ、もし、それでもいやなら、俺はお前を見送ろう」って言ったんだ」

竣夜の顔には先ほど笑みはなく、ただただ灯真を手放してしまっ

たと言う事実にも押しつぶされそうになっていた。

「灯真さんは何処へ？」

「あいつは、多分。本家に戻ったんだと思う」

「本家？」

「迂つて言う苗字は母方の字で、元の苗字は成松なりまつっていうんだ。」

「な、成松って!?!」

成松とは、櫻坂と並ぶ世界を中心とした大企業だ。日本の代表企業を上げると言われればほとんどの人が櫻坂と成松をあげる。

「あいつは、執事の仕事をこなしながらも、ビジネスのことを学び、成松とコンタクトをとっていた。自分を戻らせてくれてな」

「それは」

「もちろん知っていた。だけど、俺に止める義務はない。止めることはできなかつたんだ」

「じゃあ、灯真さんは今、その成松に？」

「ああ、戻ってるだろうな。多分、もう誰にも止められないよ………」

その竣夜の深い言葉が、穂澄の心を深く抉った。

先ほどまで寝ぼけていた脳は完全におきており、二人しかいない



邸のリビングは、いつもより広く思えた………

## 第四十一話 小さな指輪

「穂澄くん、ちょっと手伝ってくれる？」

「あ、はい」

俺は、真琴さんに言われ帳簿を棚に納め、中庭に出る。

灯真さんが居なくなってから一週間以上が経とうとしている。相変わらず灯真さんからの連絡は無く。尊お嬢様達の様子もどこか覇気が無い。

水穂が灯真さんが抜けた穴をしっかりとカバーしてくれているのでこの邸を切り盛りしていくにはなんとか出来ているので問題はない。……いや、今思えば自分がいなくなる事をわかっていたからメイドを雇うことを認め、基礎の仕事をしっかりと教えていたのかもしれない。

「穂澄くん！ その刈り取りバサミ取って」

「あ、はい」

尊お嬢様達に比べて今までと余り変わらないのがこの目の前にいる真琴さんだ。

見た限り、灯馬さんと一番仲が良く、一番過去の事も知って居そうなのだが特に思いつめた様子も無く、毎日庭の手入れをしているばかりであった。

「あの……？ 真琴さんは灯真さんの事は気にならないんですか？」

「ん〜？ どうだろ？ 確かに灯真が出て居ちゃった事はびっくりしたけど騒いでもしょうがないし、それに灯真がそう決心した事だから僕がどうこう言ってもしょうがないかなーって思っただよね・・・」

真琴さんは余り難しそうな顔もせずになんかそう言う。

俺はそんな姿にムツと来た気がした。と、言うよりこんな状態でよく落ち着いていられるなど、少し薄情ではないかと変わらない真琴さんの横顔を見ながら思ってしまう。

「穂澄君。今僕が薄情だと思っただでしょ？」

「はい」

気付かれていたということに関してはびっくりしたが、何故か俺は隠すことなく素直に答える。

と、真琴さんの庭を手入れする手が止まり俺の方に向き直りまじまじと俺の顔を見つめてくる。

「な、何ですか？」

整った真琴さんの顔が俺の顔を下から覗き込んでくるのだ。居心地は余り良くない。

「髪、切ろうか？」

「えっ？」

「伸びたからね。待ってて、道具を持ってくるから」

「えっ？ ちょ」

真琴さんはスツと立ち上がると軽快な足取りで道具を取りに行つてしまった。

「さて、始めようかな？」

待つこと数分。真琴さんは大きい道具箱とパイプ椅子を持って現れた。

「また気絶させなくて良いんですか？」

「気絶って？」

「前に切つて貰った時は起きてると気が散るからとかで首に手刀を喰らつて」

「ああ、あれは嘘。第一、気が散るつて言つたて今回は穂澄君に起きていてもらわないといけないからね」

俺はその言葉に少し引つかかったが、どうせそれも数分すればわかるであろうと思ひ、その事については触れなかった。

真琴さんは前と同じ手つきで俺の首にシートを巻き櫛で俺の髪を梳いていく。

「……………穂澄君にとっては灯真はどんな人？」

髪を梳かしているので真琴さんの顔を見ることは出来ないが、声は弱弱しく先ほどとはまるで違う。

「なんと言うか……………兄貴分というか？ まあ、頼りになつて居ないとこんなに不安になるとは思っていませんでした」

「そう……………僕にとっても灯真はね。大事な人なんだよ」

髪を梳かすのが終わり、真琴さんは霧吹きで軽く髪に水分を持たせる。

「灯真が成松を追い出されたって話は聞いてるよね？」

「詳しくは聞いていませんが、概要ぐらいは……………」

「灯真はね。『僕と結婚したい』って言って成松から勘当されたんだよ」

「えっ？」

「おっと、動かないで、10円ハゲが出来ても知らないよ？」

俺は振り向きかけた身体を元に戻しパイプ椅子に深く座る。

真琴さんの顔を見ることは出来なかったが、声は随分重いものが

感じられた。

多分、この散髪をするというのは、お互い顔を合わせない様にする為の物であろう。俺はそう思うとそのまま顔を固定し、真琴さんがいる方向とは反対側を凝視する。

「一応僕もそれなりの家の出でね。だけど、成松の前ではそれこそ吹けば飛ぶような家なただけ。まあ、それでも僕は灯真とは家の良さと言うことで同じ学園にいて、腐れ縁って奴なのかな？ 小学生から中学とどんどん仲良くなって……それで、高校生になったある日。告白されたんだ」

『好きだ。多分、今まで会った誰よりも、いや、これから会う誰よりも』

「流石の僕もクサイこと言うなって一瞬ドッキリかと思ったくらいだよ。だけど、本当だった。灯真は家柄とかそういうことは全然気にしないで僕を好きになってくれた。『俺が18歳になったら結婚しよう』って真顔で言うてくれた。」

「……………」

言葉は出ない。いや、出せなかった。真琴さんの手は確かに俺の髪を切ってくれているのだが、声はそれこそ深刻で今までの淡い思い出を無理矢理引っ張り出してきているようだった。

「だけど、そんなこと成松は許してくれなかった。正面からも反対されたし、僕の家を潰すと脅しもかけられた。」

「っ！」

「それでも灯真は僕を嫌いになる事はなくて、僕も灯真のことが、その……えと、好きだった……し」

「それで、業を煮やした成松は灯真さんを？」

「うん、引き剥がせないとわかったら、灯真だけをあっさり成松から切り落としたんだよ。それこそ、灯真はその内成松のトップに立つ人間だったんだろけど、当時はビジネスも世間も何も知らない子供だったからね。まあ、その後は竣夜君が灯真を拾ってくれて、僕も庭師の勉強を一生懸命して、櫻坂に庭師として入ったの」

「その事は、灯真さんには？」

「言わなかった。ううん、言えなかった。灯真が勘当された後、頭の良い灯真は婚約を解消して僕だけを助けてくれたの。もちろん、そんな事しても1回切り捨てられた灯真は成松に簡単に戻れるわけはなかったんだけどね。どこかで幸せになると信じていた少女が汗臭い作業着を着て泥まみれになりながら庭の手入れをしているなんて言えなかったんだよ」

パチンツパチンツと聞こえるはさみの音が随分大きく聞こえる。真琴さんは泣いて……いるのだろうか？ 声が少し鈍くなってきた。

しかし、俺が後ろを向く事はない。ただ、真っ直ぐ前を見ながら真琴さんと話を続ける。

「灯真は自分を責めただろうね。自分が彼女を好きになってしまっ

たから、彼女は今、泥だらけになって庭の害虫と戦っているんだって……まあ、それできこちない毎日が何年か続いて、それこそ日常会話をするのに一年以上掛かったかもしれない。ある日、穂澄君が来たんだよ」

「えっ？ 俺」

「うん、それこそ僕にとっては救世主だったよ。灯真の顔も日に日に柔らかくなっていくのもわかったし、今まであんまり表に出してなかったけど邸の管理は灯真1人じゃ大変だったと思うよ……. . . だけど、多分、それがスイッチになっちゃったんだと思う」

「スイッチ？」

「うん、自分が櫻坂から出て行くチャンス。丁度十年が経とうとしてたぐらいだったからね、灯真は穂澄くんに執事としての仕事を覚えさせて、そして自分は前々から考えていた成松に戻ろうと……. . . あっ！ 別に穂澄君を責めてるわけじゃないよ。穂澄君がいなかったら僕も灯真も、それこそお嬢様達だって窮屈だったと思うんだ」

「大丈夫ですよ。真琴さんが嫌味を言っているなんて事思ってますんから」

「うん、良かった。……えと、それでね。水穂ちゃんも入って、それで多分灯真の中じゃ最大のチャンスだったと思うんだ。不安要素は全部無くなって、後は自分が櫻坂を去るだけで終わると……. . .」

急に真琴さんの声が暗くなるのがわかる。



「それで、この前、僕の机の上にこれが置いてあったんだ」

後ろを振り向かなくてもわかった。真琴さんは泣いている。

涙声になりながら、正面を向いている俺に差し出してきたのは小さな指輪であった。

「これはね。10年前。灯真が僕に告白した時に渡してくれた指輪なんだ。その時はお金の出し入れは細かく管理されていて監視の目を盗むのは大変だったと思うんだ。だけど、その告白の時に灯真はペアの指輪を僕に……私にくれたの。」

確かに真琴さんの左の薬指には小さな指輪がはめられている。

しかも、その指だけ少し細くなっている事からこの十年間ずっとその指輪をしていた事がわかる。

そして、それとは別に差し出された同じデザインの指輪。

「もしかして？」

「うん、これはね。灯真の……なんだ」

もう、言葉を出すのが精一杯だった。

真琴さんはハサミを取りこぼし、地面に膝を付く。

「うつく……えぐつ。と、灯真あ……」

俺は間違っていた。

相変わらず真琴さんの顔は見えないが、わかる。

一番悩んでいたのは真琴さんだったのだ。

真琴さんは誰より悩んで、それを誰かに見せることが出来ずにと自分の中に溜めていたのだ。

真琴さんの泣き声が中庭に響き、俺は顔を真琴さんに向けてることが出来なかった……

#### 第四十一話 小さな指輪（後書き）

何か湿っぽくなっちゃったけどまあいいか？ どうも作者です。

とり合えず執事になる50の方法もあと少しで終わりのな雰囲気になってきました。（ちなみにラストはどうなるかまだ考えていません）

今回は作者も若干忘れかけていた真琴さんが中心になった話です。情景描写がなく言葉が増えた所は愛嬌で誤魔化してくれると嬉しい限りです。

まあ、ずっと前から言っていた真琴の一人称が『僕』から『私』になった所で心境の変化が現れたと感じてくれればこの話は成功なのですが？ わかってくれた人は少ないかもしれません。

まあ、気楽に後九話頑張りたいと思います。

感想&評価はこまめに確認していますので書いてくれたら嬉しいです  
まあ、投稿頑張ります。。。

## 第四十二話 条件・脅し

最後にここに来たのはいつだっただろうか？

和風に統一された屋敷の中には着物を着た女中や鯉が泳ぐ池まであった。

「久しぶり……で良いよな？ 灯真」

俺が後ろを向くとこれまで会わなかった溝を感じさせないほどフランクに話しかけて来る一人の男性が立っていた。

窮屈そうなスーツに身を包みながらも、どこか大雑把な雰囲気醸し出している男性はニヤニヤと笑いながら俺の近くに寄ってくる。

「やっと目が覚めたみたいだな？ アホな女はしつかりと捨ててきたか？」

明らかに嫌味が込められた言葉。思わず手を出しそうになったが、そんな事したらこの十年の努力は泡となって消えるであろう。

一瞬力を込めた拳を解き、俺はその男性から視線を外す。

「一応、ケジメはつけて来たつもりですよ。久留間さん」

男性は表情を崩さない。

男性はスツと音もたてずに俺の横を通っていく。

「また、落としてやるよ……今度は登れないくらいにな」

ボソツと呟いた男性の声は俺に届いていたが、俺はもちろん答え

ない。

俺はその言葉を無視してそのままずっと歩き出した……

「灯真が成松に戻ったのは確かだ」

ある日、俺は竣夜様に呼ばれ、櫻坂のビルに行くと竣夜様にそう言われた。

「先日、成松の副社長が代わったと言うことで俺の所に挨拶に来たんだが……灯真だった」

予想はしていたがはっきり言われると確かに重いものがある。

「それで、何で私を呼んだのでしょうか？」

俺は竣夜様に質問すると、竣夜様はまさに困った表情を絵に描いたように顔を歪め、眉間に皺を作る。

「あ……いや、その。灯真がお前を寄こせて言ってるんだ」

「えっ？」

意味がわからなかった。

今まで尊お嬢様たちが困らないように俺に執事としての能力を持たせていたと思っていたのに、急に成松に来说いと言われてもその真意が理解できなかった。

もちろんそんな真意が不透明な事を竣夜様が承諾するはずがない。と、俺は思っていたのだが竣夜様の顔色がどうも優れない様子から俺も次第に不安に駆られる。

「それで、竣夜様はそれを承諾したのですか？」

「いや、承諾はしなかったが、灯真の奴、俺を脅してきやがった」

「脅す！？」

穩健な灯真さんが、元雇い主。それも幼なじみを脅すなんて考えても居なかった俺はつい、声を荒げてしまう。

「元々、櫻坂と成松はそれこそ犬猿の仲と言うのに相応しいぐらいの敵対意識を持っていたんだ」

確か、それはどこかの新聞で読んだ事がある気がする。

昔は良きビジネス相手だった両社だったが、あるビジネスで成松が失敗し火の粉を掃う為に櫻坂がそのビジネスから手を引いたと言うことがあって、その為成松は一時期傾き。会社がつぶれかけた事があった。

それを逆恨みした成松が会社が立ち直ると直ぐに櫻坂のビジネスを邪魔するようになったのが、犬猿の仲の始まりだと言われている。

「俺は時々灯真に仕事の手伝いをしてもらっていたからな、取引相

手の事はもしかしたら灯真のほう詳しいのかもしいのかもしれない……  
・もしお前を寄こさなければ、今櫻坂が取引をしている会社を全て奪うって言うって来やがった」

竣夜はデスクにうな垂れ頭を抱え、溜息を付く。

この様子から見るに、何とか俺を渡さないように対策を練っていたのであろう。しかし、ここまで準備を進めていた灯真がそんな穴を残すわけではない。それは竣夜様の様子を見れば明らかであった。

「……………まあ、とり合えず。それだけでもお前に伝えよう  
と思つてな。灯真が抜けた事で尊や栞も不安だろう？ 今日帰つて良いぞ」

これも竣夜様なりの気遣いなのだろうか？ うな垂れていた頭を上げるとニカツと笑顔を見せて俺を帰らせようとする。

「し、しかし……………」

「いーから！ 帰れっ！」

俺は無理矢理部屋から穂澄を追い出す。穂澄は不安そうな顔で俺のこのことを見ていたが、この話の中心はお前なんだよな、と思いつつその不安そうな顔も見なかったフリをする。

ボタンッ！

「……………さて、と。 Donald」

「 H A H A H A ! ココニ居マスヨ」

一瞬の内に真面目モードに入った竣夜はDonaldを呼びつける。

と、何処からかこの空気を一方的に無視した دونالد が高笑いを上  
げながら現れる。

「成松の情報を出来るだけ集めてくれ……必要ならグレー  
ラインの方法をとっても良い」

「了解シマシタ。……竣夜様、大丈夫デスヨ。ソナニ心  
配ソウナ顔シナクテモ、グレーラインヨバリバリ使イマスケド、私  
ハ捕マリマセーン！ H A H A H A !」

一瞬で竣夜の不安を察知したのか？ Donald は再び高笑いを上  
げ、部屋から消えて行った……

「フツ……んじゃ、俺も本腰を入れようか？ 灯真。勝負  
だ……」

部屋で1人になった竣夜はニヤリと笑みを浮かべデスクに向かう  
のであった……

「ただいま、戻りました」

良く考えると、灯真の事も暫くお嬢様達の相手をしていない  
事が多かったので機嫌を悪くしていないであろうかなどを考えて邸  
に帰るのは少々憂鬱だったのだが、帰るわけにも行かず帰ってきた



のだが……………

「誰も……………いない?」

いつもならこの時間はリビングでくつろいでいるはずのお嬢様達の姿はない。

「食堂かな?」

俺は小首を傾げながらリビングのドアを閉め、ふと後ろを向くと……………荒縄を持った朧が猛スピードで目の前を横切っていくのが見えた。

「えっ? あれ? 朧お嬢様!？」

いつもなら、その荒縄で俺を苛めるはずだが今回は違っていた。穂澄には目もくれず、今までとはケタ違いのスピードで食堂へ入っていった。

「お腹が空いていたんだろうか?」

俺はとり合えず歩き食堂の方へ歩を進める。

「  
「  
「  
「  
「  
「

何やら声がいくつか聞こえるが此処からでは内容まで聞く事は不

可能であった。とり合えず、俺はそのまま食堂へ入る。

「……尊、縄！」

「は、はい」

「いたたたたつ、すみません。痛いです痛いです！」

「……うつさい、黙れっ！」

バキッ

「痛っ!？」

「……なにをしているんですか？」

食堂からはなにやら栞が誰かに馬乗りになり、荒縄で羽交い絞めしている様であった。周りには水穂と真琴がその周りに仁王立ちしており、どうしても逃がす気はないらしい。

とり合えず誰が苛め いや、羽交い絞めされているかを確認すべく俺は食堂に入り、別の位置からその現状を確認する。

「つて！ 灯真さん!？」

そこには栞の攻撃でタコ殴りにされている灯真が倒れていた。

「あつ、ああ。穂澄君。良かった、栞お嬢様に退く様に行ってください。いくら顔見知り相手だとしてもこの格好は、はしたない」

「

「てめえ！ どの面下げてここに來てんだアアアッ！」

「えっ？ もしかして穂澄君も怒って うわあああぁっ!？」

その日、邸には久しぶりに灯真の悲鳴が轟いた……

## 第四十二話 条件・脅し（後書き）

時間が経つので早いよね。どうも、作者です。

気が付いたら20日位投稿の間隔が開いててビックリして書きました。まあ、急ぐ必要もあんまないと思いますけど、まあ、結構自己満足と読者の声を活力として書いているので読者の声があるかぎり頑張りたいと思います。

まあ、流石に此処まで来たら完結させるんで、投稿頑張ります。。。

## 第四十三話 好きだからこそ

「灯真さん？ 何で私たちが怒っているか、わかりますよね？」

「はい。家の事ですね、わかります」

荒縄で縛られ床に芋虫の様に転がっている灯真を俺たち五人は上から仁王立ちの状態で見下ろしていた。ただ、こんな状態でも灯真の顔には笑みが零れ、余裕が感じられる。

「灯真……これはどう言う事なの？」

真琴は転がっている灯真の目線にあわせてあの指輪を見せる。

「そのままの意味だよ……真琴」

すると、先ほどまで笑みが零れていた灯真の顔が一瞬にして厳しいものになり真琴を威圧する。

真琴はその灯真の冷たい表情を見て自分の表情を曇らせる。

ビシィッ！

「痛ッ！」

「……調子のんな、バイクで引き摺るぞ」

どこから引つ張り出してきたかもわからない革の鞭を持ち、黒のボンテージを身に纏った朧が真剣な顔の灯真に一喝を入れる。

「朧？ や、やりすぎじゃないかな？」



「と、とりあえず。縄を解いてあげましょうか？」

「あっ、良いよ。私が話をつけるから、良いよね？ 灯真」

「よしなに、真琴」

襲われる俺を後目に2人は含んだ笑みをしたまま見つめあっていた。

「こうやって2人一緒に真琴の部屋に入るのはいつぶりだろうね？」

「………生々しいからその言い回しは辞める」

私は縄を解いて灯真を私の部屋に連れ込んだ。縄を解いても逃げの様子も無い灯真は私の後ろについて部屋に入ってくる。

まあ、その前に理由も無くこの邸に再び顔を出す事、事態灯真にしては不可解だ。多分何かしたいことがあったのであろう。

「それで、話は？」

相変わらず含んだ笑みは変わらない。

違和感を感じながらも私は無言のまま灯真に椅子を差し出し座らせ、私も迎えに椅子を持ってきて座る。

「何で、この邸を出たの？」

「……いきなり本題から？」

「茶化すのは辞める！」

自分でも驚くぐらいの声が出た。下に居るみんなに聞かれては居ないかと少しドキドキする。

「……わかった、話すよ」

灯真も例外なくビククリした様だ、椅子に座りなおしてしっかりと私のほうに目を向ける。

「俺は、今度こそ成松に認められる為に戻ったんだ」

「認められる？」

一瞬、私と灯真の関係の事かと、胸を高鳴らすが、そうでない事は直ぐに察しがついた。

「俺を突き落とした成松を認めさせて今度こそ、胸を張って成松のトップに立とうと思ってここを出た。そして、俺が認められるには櫻坂を潰す事が条件だとも言われた」

「櫻坂を！？」

いくら犬猿の仲と言っても今までもそこまで露骨な嫌がらせをしてこなかったのは会社の事をしていない自分でも少しは知っていた。



しかし、何故か今になってそれを灯真に任せると言う事は成松も本気なのである。

「その条件が出されたのが3年前、俺はそこから執事として、竣夜の補佐として櫻坂に時限爆弾をしかけさせてもらった」

「3年も前って……」

3年前と言っても思い出すのはありふれた日常だけで何等、灯真の様子に変わったところはなかった。私は今になって灯真の本当の姿を何も知らない事に思い知らされる。

「じゃあ、私を櫻坂に残したのは何で！ 少なくとも灯真はあの指輪を少し前までは持っていた。少なくとも……私のことを考えてくれていたはずだよ」

灯真は私がこの邸に入ってからいつも私に気を使ってくれた。庭仕事に使う器具を新調してくれたり、夜遅くまで頼まれた仕事をしている私に夜食を作ってくれたり……

「そうだな」

「えっ？ きゃ！？」

短い悲鳴と共に私は灯真に腕を掴まれ、ベッドに放りこまれる。

「確かに、俺はお前を思っていた。それは……今でも変わらない」

吐息が掛かる数センチの距離で灯真が私の顔を見つめながらそう

言う。

私は暴れるが腕を押さえつけられていて抜ける事は出来ない。なにより、相手は灯真と言えど男だ。いつも力仕事をしているとは言え私は女で元の体力が違う。

こんな所で自分が女だと言うことを実感させられ、私は顔を真っ赤にしながら足をバタバタと振り回す。

「と、とととと灯真あ！ あんた、何をしようとしてるのよ！ 退きなさいよお！」

「すっかり女言葉に戻ったな、『僕は』辞めたのか？ 俺がいなくなつて吹っ切れたのか、それとも予想外の事態で被っていた皮が剥がれ始めたのか？」

「　　っ!？」

私は言い返せない。足を動かすのを辞め灯真と目を合わせないようにモジモジと身体を離しながら俯く。

「ごめんな、真琴」

「えっ？」

思いもよらぬ言葉を掛けられ私は反射的に灯真の顔を見ようとすると

チュッ

「えっ？」

「好きだ、今でも……………だから……………ゴ

メンな」

ドスッ

「　　っ？」

一瞬の痛みと共に私の意識は飛ぶ。

「当て身で人って本当に気を失うんだな」

灯真はそう言ってベッドから立ち上がり、気を失った真琴に毛布をかけると

そのまま振り向かず、ゆっくりと部屋を後にした………

## 第四十四話 計画・実は好きだった

「さてさて、穂澄くん。そろそろ本題に入りましょうか？」

食堂の椅子を引いて、軽く座り笑みを浮べる灯真。

栞たちを寝かせてから、心配になって真琴の部屋に行ってみたら、案の定、灯真が『一人』で出て来た。灯真の肩越しにはベッドに寝かされた真琴がいて、目は瞑っていた。どうやら、説得は出来なかったようだ。

俺は栞に叩かれた場所を押さえながら、向かえ側にあたる椅子に腰を掛ける。

「竣夜から、話は聞いているはずですから、単刀直入に言いましょう。成松に来ていただけますか？」

「……………」

違和感が抜けない。

灯真は、何か急いでいるのか、何故態々またここに戻ってきた？荷物になるものは全て捨てて、出て行ったはずなのに

「私は、ただの高校生ですよ？ それも取って付けた様な敬語と、偶然持っていたスキルで何とか仕事をこなしている借金まみれのガキです」

「わかっています」

……………肯定されちゃった。

自分で言ったのになんだが複雑な気分……………。

「穂澄くんは、何か、勘違いをしていませんか？ 俺は傲慢で、自分勝手に、愛しかった人でさえ平気で踏みじめる男ですよ」

「じゃあ、何で俺を助けたんですか？ 借金まみれで、親からも捨てられた俺を……自分が居なくなっただけの為に、俺を残して、安心させようと……お嬢様達の為に」

「本当に、愉快な人ですね。穂澄くん」

「えっ？」

灯真は笑みを崩さない。ただ、平然と、シナリオ通りに進んでいるかの様にスラスラと喋る。

「俺は、確かにお嬢様達の支えを穂澄くんにやってもらう為に、穂澄くんを櫻坂に呼びました。ただ、それがどうしたんですか？」

「どうしたって……」

「ごうは、考えなかつたんですか？ 『精神的支えになっている。穂澄くんを成松へ来させて、お嬢様達を骨抜きにする。』とね。お嬢様達の親が、現在海外支部にいる時点で、日本の支部の全決定権は竣夜にあります。竣夜はなんだかんだでお嬢様達が可愛いんですよ、お嬢様達が崩れれば、竣夜も崩れる。これが十年越しで考えた俺の計画です」

声を出す事が出来なかった。

初めてあった瞬間から、灯真さんの計画は始まっていた。

そう考えると、体が震えた。今まで、過ごしてきた灯真の笑顔は

全て仮面で作られたものだったんだ。

「……さあ、答えを聞きましようか？ 穂澄くん」

灯真の目が、妖しく光る。俺は、そのまま言葉を発する事が出来ず、ただただ灯真を見つめたまま、椅子に座る事しか出来なかった

……

「むう……」

私は目を覚ました。

柔お嬢様も尊お嬢様も、昨日は夜遅くまで起きていられたが、流石に睡魔に負けて、徹夜は出来なかったようだ。

私はベッドから体を起こして、とり合えず、メイド服に着替える。時刻はまだ、四時半。人が起きている時間ではないが、時期的に空はもう、朝日で滲んでいた。

私はお嬢様達を起こさない様に、ゆっくりと階段を降りて、一階の食堂へ向かう。

「穂澄？」

そこには、穂澄がいた。

目の下にクマができている所を見ると、寝ていないのである。ただ、灯真さんはいない。

真琴さんは説得できなかった事は、昨日の夜に、穂澄と灯真さん

が、食堂に入っていくのを見ていたのでわかっていたが、今、穂澄一人だけが、ここに居るのは予想外であった。

何より、理解できなかったのが穂澄の横に置かれた、大きな荷物。

「水穂か……」

穂澄はバツの悪そうな顔をして、私を見る。

まるで、誰にも会いたくなかったような顔をして、ふうと小さな溜息を付く。

「穂澄？ どうしたの。灯真さんは？」

「一足先に成松に戻ったよ」

「一足先に……？」

私は、何故かその言葉に違和感を感じた。

いや、その穂澄の言い回しを聞けば、誰でも違和感を感じるであらう。

「……もしかして、穂澄。あんた……」

「ああ、俺は成松に行く」

「何で！？ お嬢様達はどうするの！ 学院は！？ 執事は！？」

平然と言う穂澄の態度に、私は許せなかった。

だから、お嬢様達が、起きてしまう事を配慮せずに大声を上げてしまった。

「学院も執事も辞める。お嬢様達は……水穂がいるし、それで大変だったら家政婦でも雇えばいい」

「っ!？」

パンツ

乾いた音が、食堂に響く。

怒りが、考えより先に体を動かした。穂澄の頬を、思いつきり叩いた。

だが、穂澄の顔は変わらない。痛そうな顔もしなければ、怒った顔もしない。

そんな、顔が私の怒りを更に煽る。

「何でっ！自分で考えて、自分で思っで、自分で決めて！それで、満足なの!? 勝手に自己満足に浸って、勝手にピリオドをうつたような事思っで！」

「関係ない。例えそれが、自己満足でも、俺には俺の考えがある。水穂、お前は俺のことが嫌いじゃないのか？ なら良いじゃないか、俺が居なくなれば、お嬢様達を独り占めできるぞ?」

「関係ないだっで……? 何言っでるの? そんな事ない、関係大有りよ!」

穂澄は表情を表に出さない。

「私は、確かにお嬢様達が好きよ！ それこそ、百合っで言われても納得しそっでなくらい好きよ！ だけど……だけど！ それと同じくらい。穂澄の事が大好きなのよ!」



「……えっ？」

やっと穂澄の顔が変わる。

私も自分の顔が赤くなつて、それこそ発火するのではないかと思  
うぐらい。頭の中が、ぐらぐらしてきた。

しかし、ここまで来て引く事なんて出来ない。

「やっと気付いたの？ 私は穂澄が好きなのよ！ それこそ、最初  
は大嫌いだったわよ。闇討ちをかける計画だつて練った事だつてあ  
るわ。だけど、日が経つに連れて、私の心の中に入ってきて……っ  
！？ 何言ってるのよ私！ 穂澄っ、責任取りなさいよ！」

「い、いや……無理だから、既成事実とか、そう言うのならまだし  
も、明らかな押し付けだし、ここで責任を取るつて言ったら、絶対  
死亡フラグだしっ」

よし、いつもの穂澄に戻ってきた。

このまま行けば、とめられるかもしれない。

だが、私が思っていたほど、灯真さんは詰めが甘い人ではなかつ  
た。

「駄目ですよ。水穂さん」

いつの間にか現れていた灯真さんは穂澄と私の間に入ってくる。

そして、戻りかけていた空気は、あっという間に張り詰めたもの  
へと再び変わってしまう。

「穂澄くん。時間です。行きましょう」

「えっ……あつ、はい」

穂澄は灯真の言葉につられて荷物に手を掛ける。

「っ！？ 待ちなさい。穂澄」

私は 灯真さんの制止を振り切って、穂澄に駆け寄り、荷物を持つ腕を掴む。

「離してくれ、水穂」

「嫌よ、女の子にあそこまで言わせておいて、逃げるなんて許さない」

「動機がズレ始めてる気がするんだが？」

「気のせいよっ！？」

穂澄は私の手にそっと、開いていた手を添えてくる。

「えっ？」

私は一瞬、驚いて、腕を掴んでいた力が弱まる。

次の瞬間。視界が揺れた。

「いたっ！？」

腕を捻られ、私は簡単に掴まってしまふ。

今までの私ではこんな無様な結果はありえないが、一瞬の迷いを穂澄に付かれたのが敗因だった。

私は唇を噛みながら、何とか振りほどこうと、動き回る。

「ごめんな、水穂」

「謝るぐらいなら」

「止まらないんだ、もう」

「えっ？」

穂澄は静かに私の耳元でそう言うと、捻っていた腕を、力任せに投げる。

私は当然、バランスを崩し、食堂の床に倒れ、その間に穂澄は灯真の後を追い、邸の玄関へと向かう。

「くっ！？ 待ちなさい！ 待って！」

私は直ぐに追う。

ただ、無常にも穂澄は止まらない。

「待って！ 待ってってばあ！」

私は手を伸ばす。

あと少し、あと少しで穂澄の背中に手が届く。

だが、叶わなかった。

バタンツと言う重苦しい音と共に、玄関のドアは閉まり、穂澄の背中を掴もうとしていた、私の手は空を切り、玄関のドアにドンツとぶつかる。

「……待ちなさいっていつてるのに……なんで止まってくれないの？」

玄関を開いて、追う事は出来た。  
ただ、しなかった。出来なかった。

私は玄関で座り込んで、一筋の涙をそっと零した……

#### 第四十四話 計画・実は好きだった（後書き）

どうも、作者です。。。

現在、暦は七月中旬。俗に言う夏休みです。

まあ、私は来週からですが……orz

そんな話を友達としていると、某進学校に通う友達の友達は『俺、夏休みないよ（笑）』

笑えねえー……

どうやら、世間一般で夏休みと言われる時期。その学校では普通授業があるそうです。

ちなみに私は補講どころか補習すらありません。

ビバ！ 普通高校！

さて、関係ない話をしましたが、読者様の感想&評価まっています。投稿、頑張ります。。。

## 第四十五話 治療費・肩代わり

「お嬢様。どうぞ」

「あつ、ありがとうございます」

「……ありがとう」

私はお嬢様達と屋上で弁当箱を広げて、三人は昼食を食べていた。私と尊と栞。三人だけいる屋上はいつもより広く、そして寂しく感じられた。

「水穂さん？ あの……えと……やっぱり穂澄さんは……」

この重い空気はかれこれ一週間以上続いていた。流石にそれが耐え切れなくなったのだろう。尊お嬢様は恐る恐る、私に声をかける。

「ええ、成松に行くと言っていました」

「……調教が足りなかったか」

栞お嬢様は、持っていた割り箸を片手でパキッと折る。

表情はいつもと変わらないが、苛立っているのは確かなのであるう。

確かにこの一週間、穂澄がいなくなってからいろいろ大変だった。真琴さんは表情には見せないが、時折辛そうな顔をするしお嬢様達も、何だか私が初めて邸に来た時より元気がなくなっている。

それだけ、穂澄の存在が大きかったのだ。私はこの頃良くそう思うのだ。

漂々として、自分は執事としてまだまだ甘いと言っておきながら、やらなければいけない事は全てやっていた。それは、今穂澄が抜けたという事で初めて思い知らされる現実。私は割り箸の先をガジガジ噛みながら、僅かながら渋い顔をする。

ガチャッ

「っ!？」

私は慌てて後ろを振り向く。

屋上のドアが開く音がしたのだ。本来ならば、外が見れて、開放感のある屋上はお昼には丁度良い場所のだが、この学院の生徒は教室の自分の席で食べる事が通常となっている。それは、椅子に座って食べる事が習慣付いているお嬢様、お坊ちゃまならではないもので、いつも、野性的(?)なお嬢様達以外にこの屋上に来る生徒は少ないのだった。

それに加え、私が驚いたのは、心の隅には『もしかしたら穂澄なのかもしれない』と言う、淡い希望があった為であろう。

「おっはーっ! 尊ちゃん、栞ちゃん。今日は一段と可愛いね」

現れたのは、長身の金髪の青年。いかにも軽そうで、『遊んでいきます』と言う雰囲気は充滿している。

淡い希望を抱いていた、私が急に自分が馬鹿みたいだと思ひ。自分でも顔が赤くなるのがわかる。

「うはっ!？ 誰、この美少女! 一年生? 俺、遠藤蛍ね。『ほたる』って書いて『けい』って読むんだ! 尊ちゃんと栞ちゃんは『ほたるくん』って呼んでるけど、『けい』だからね! あ〜でも、君は可愛いから『ほたるくん』って呼んでも良いよ!」

やけにテンションの高い青年は私の顔をジッと観察するように眺め、某ペコちゃん人形の様子に舌をペロツと出しながら親指をグツと立てて私に満面の笑みを浮べる。

と、それが一瞬穂澄と被って、私は胸が痛くなるのを感じる。

「すみません、ほたるさん。今はお話しする様な気分ではないので

……」

「……って言うか空気読め」

「っ！？ の、罵られた」

さつきまで、あんなにテンションが高かった蛍さんだったが、いまは手と膝を地面に付いてガツクリとうな垂れている。なんて、浮き沈みの早い人なんだろう。

そんな事を思っていると、再びドアが動く音が聞こえた。

「蛍っ！ 早いって、何でお前は女の子が絡むと身体能力以上の力が出せるんだよ。一応俺の方が体育の成績は上のはずだよ！」

「アホらしい。急ぐ用事でもないんだから、走る必要はないだろう？」

続々と続いて出てきたのは、二人の青年。髪は長いが、こちらは蛍さんより遊んでいる雰囲気はない。どちらかと言うと優等生の序列に入るだろう。

それにあの二人は確か見覚えがある。

それは入学当時、私がまだ穂澄の事が嫌いだった時、一緒にいた二人。

確か、杉崎亮平と社愁寺だったような気がする。二人とも特進ク



ラスで穂澄と同じぐらい頭が良い。

「……なんでこんなに来るの？ 何か用？ 用じゃないなら何処か行って、邪魔」

栞お嬢様の目がキュウと細くなる。いつもは怒っている時でも表情は変えず、行動で示すお嬢様だが、それに表情が加わると言う事は単純に考えていつもより怒っていると言う事なのだろう。

「し、栞。ちょっと言いすぎだよ……」

尊お嬢様もこの事を察したのか、行動に移す前に宥めようと言葉で制す。

「五月蠅い……尊もそう思ってるはず。穂澄がいなくなって私達はイライラしてるんだ。何処か行って」

言葉の溜めが無くなった。

どうやら本当に怒っているようだ。

「知ってるよ。穂澄がいなくなったんだらう？」

威圧されて、押し黙るかと思っただが、亮平さんは言葉をとめなかった。それも、屋上に出てきたときとは違い大真面目な顔だ。漂々とした雰囲気は微塵も感じられない。

「……なんで知ってる？」

「穂澄本人に頼み事をされたからだよ、栞ちゃん」

落ち込んでいたはずの蛍さんも立ち直って話し始める。  
もちろん、顔は真剣そのものだった。

「……頼まれた？」

栞お嬢様の雰囲気が変わる。いつも通りのお嬢様だ。  
ふうっと小さく息を吐いて少し安心する。

「これを一週間経ったら渡してくれって頼まれた」

愁寺が一通の封筒を取り出して、栞お嬢様に渡す。

「なんて書かれているんですか？」

「……ふざけるな」

「えっ？」

栞の声が聞き取れなかった。ただ、表情は再び険しいものへと変わっていた。

「ふざけるな、こんなの認めない」

栞お嬢様は封筒から取り出した手紙をくしゃっと丸めて力いっばい蛍さんにぶつける。

だが、風に乗った紙くずは蛍さんの頭に軽く当たると屋上の地面に音も無く落ちる。

「な、なんて書いてるんですか!？」

尊がそう言う。栞が怒っている事も原因の一つであるが、それが穂澄からの手紙と言うことで焦りが感じられた。

「んじゃ、愁寺。読んで」

「わかった」

丸められた手紙を丁寧に伸ばすと蛸さんはその手紙を愁寺に渡し、愁寺はそれを読み始めた。

『栞お嬢様、尊お嬢様、水穂、真琴さんへ 』

それは、お嬢様達だけではなく、私や真琴さん宛てでもあった。

『勝手な事をして、すみません。僕は櫻坂を出る事にしました。理由は借金です』

借金とは何の事だろうか？ 竣夜様は借金をお嬢様達の傍に穂澄を止めて置く枷としか使っておらず、返済を迫るような事はしないはずだ。

『俺が、櫻坂に入った理由は親父が作った3000万の借金が理由でした。ただ、それは博打で作ったとは俺は思っていませんでしたし、実際違いました』

私はここら辺の事情をよく知らないが、穂澄の父親が借金を穂澄に押し付けたと言う事は知っていた。

『借金の原因は、妹の病気です』

「えっ？」

「……びょう……き？」

黙ってきていた尊お嬢様も驚いて声を上げてしまつた。そりやそう  
だ。なんたつて、病気の為の借金と言えば、治療費の事だろう。だ  
が、3000万も掛かるという事はそれなりの難病にかかっている  
と言つ事だ。

『真希菜は、重い病気にかかつていて、それなりにお金が必要によ  
うだつたそうです。親父は俺に借金を押し付けたように見せていま  
したが、それは真希菜の治療費を稼ぐ為の負荷を減らす為の考えだ  
つたそうです』

『親父にとつては苦渋の決断だつたらしいです。俺に借金を押し付  
ける事は流石に気が引けたでしょう。ただ、そうしなければ真希菜  
は助からないとわかつていた親父は漂々とした顔を崩さないまま、  
その判断に至つたんだと思います』

『真希菜は、さつき話したとおり、重い病気にかかっています。治  
療費もまだ足りないそうです。そこで俺は成松に行きます。灯真さ  
んは、真希菜の治療費を無担保で返済期限無しで貸してくれると言  
つてくれました。勝手な事を言つてすいません。お体に気を付けて  
ください。』

『P・S・冷蔵庫の中に団子を入れておきましたので、四人でどう  
ぞ。 桂穂澄』

「穂澄さん……」

「……なんでっ！？ お金なら、櫻坂がいくらでも出すよ！ 竣夜兄様だって、それぐらい」

「それは君達の事を思ってたと思うよ」

栞が叫ぶ中、亮平が言葉を遮る。栞の目にはもう、涙が溜まっておりその悲しい表情は今まで誰にも見せた事の無いものだった。

「……え？」

栞は小さく反応する。

「灯真さんだっけ？ 櫻坂の執事さん。あの人は櫻坂を潰す気なんでしょ？ それなのにいつ返せるかわからない借金を櫻坂にするわけにはいかない。最悪、自分と同じ様に裏ルートで売りに出されるかもしれないと穂澄は心配して、成松の方へ言ったんだと思う」

「……ずるい、ずるいよ」

栞は呟く。

「そんな事言われたら………反論出来ない………会ったら殴ってやるうと思ってたのに………そんな事言われたら、どうすれば言いかわかんないよ」

栞のすすり泣く声が屋上に響く。

その場に居る。全員が、誰も栞に声をかけることはできない。

ただ、時間が過ぎるのを感じながら、呆然と立ち尽くしていた…

…

#### 第四十五話 治療費・肩代わり（後書き）

疲れたーどうも作者です。

そろそろ、終わりですが、何か出てなかった奴を出していくと、終わりが近づいてくる気がしてきますね。まあ、こじ付けと言われるてしまえばそれはそれで、一気に自分の中でのこの話の価値的が大暴落します（笑）

まあ、気長に、まったり見てくれたら幸いです。

評価&感想待ってます。

投稿頑張ります。。。

## 第四十六話 悔い

穂澄は灯真の後ろについて行きながら、辺りを見回す。

先ほど通った観音開きの扉から想像は出来たが、灯真に書いて行った場所は和一色に統一された屋敷であった。見渡せるほどある庭には松や池もある。それだけではない。和服を着た女中さん達がさきほどから何人も穂澄の隣を通っていた。

ただそれでも穂澄の緊張を和らげるものはなかった。

「それが、お前が言っていたガキか？」

不意に後ろから声を掛けられてバツと、過剰に反応してしまうが、そこにいたのは大雑把な雰囲気醸し出しているながらも誰が見ても高そうなスーツを着こなす男性がいた。

灯真もその声に反応してゆっくりと振り向く。

「相変わらず神出鬼没ですね。久留間さん」

久留間さんと呼ばれた男性は、薄く笑いながら、穂澄の横を通って灯真との距離を詰める。

「未練を残すなって言った筈だったかな？」

胸倉を掴んで灯真に凄む男性。ただ灯真はそれをもともせず、軽くあしらう。

「穂澄くんは『未練』なんかじゃありません。私の計画に必要な人ですよ」



男性は眉間に皺を寄せて凄い形相で穂澄を睨むが、すぐに灯真の胸倉を掴むと、屋敷の奥へ行ってしまう。

「ふう、痛かった」

「灯真さん……今の人は？」

灯真は首もとのネクタイを軽く緩めて溜息を付く。多分胸倉を掴まれた時に絞まったのであろう。

「えっ？ ああ、あの人は久留間龍介くまゐりゆうすけさん。成松の遠縁の方です。ただ実質私が成松のトップにならなければ、彼がトップになるでしょうね」

灯真はそう言いながらも、縁側を歩き続ける。穂澄は言葉を出そうとしたが、灯真はこれ以上喋るつもりはないのだろうと思ひ。口を紡ぐ。

「さて、気を落としている最中で申し訳ありませんが、妹さんがあの部屋にいますので、逢ってあげてください」

灯真が指を差した先には庭の真ん中にポツンと建っているはなれがあった。

俺は灯真さんに会釈をして、小走りではなれへと向かう。

「真希菜？」

障子をゆつくりと開けて中を覗くと、そこには凜と、静かに寝息をたてている真希菜がいた。

「穂澄っ」

穂澄がはなれに入ると、目尻に涙を溜めた凜が穂澄の胸の中に飛び込んできた。

顔色が悪い。

それが穂澄が姉に抱いた最初の印象だった。多分、真希菜の看病でろくに寝ていないのだろう。

「姉さん。少し寝た方が良い。俺も来たから、少し休んでいてくれないか？」

「でも……真希菜が……」

「大丈夫、その為に俺が来たんだから」

凜は小さく頷くと、真希菜の隣に横になる。

と、1分も経たない内に小さな寝息をたてて凜が意識を落とす。

穂澄は、小さく溜息を付きながら、執事服のタイを緩めて、凜とは反対側に行き、真希菜の横に座る。

布団の中で寝息をたてている真希菜は見た目、何処も悪そうではなかった。ただそれは見た目だけで、内面は酷く痛んでいた。

長い髪が掛かる顔を優しく撫でて、真希菜の顔を見つめる。

「ごめんな、一人にして……」

俺は、目尻に溜まりかけた涙をそっと拭いて、真希菜のおでこを再度撫でた……

「はい。……はい。そうです。こちらとしては、強行手段に出るしかありません。」

相手が電話を切る事を確認してから、竣夜は乱暴にデスクへ受話器を投げる。

数日前。穂澄が櫻坂を出て行った。

それは灯真の要求どおりで、本当ならそこで終わるはずだったが、予想通り櫻坂と契約をしていた会社は成松に移り始めた。

口約束でしかなかった為、守られるとは思っていなかったが、灯真の計画にしては少し強引な所があつて、何処か、『らしく』なかった。

優秀な灯真は準備を怠らない。ただ強引な企画の中には必ず穴がある。それが例え灯真が計画した物だとしてもだ。

俺が、その穴を見つければ俺の勝ち。その穴を隠し通せば灯真の勝ちだ。

「鍵はドナルドか……」

ドナルドは今、俺の前にはいない。前に頼んだ情報収集の件で暫く外に出ているのだ。あいつの情報が俺の切り札になるだろう。

「俺はどうなつても、いいが……あの邸だけは守らないとな……」

俺の脳裏には栞と尊の表情が浮かぶ。

櫻坂の社長の椅子に悔いは無い……が、あの邸を潰すのには悔いが残る。

あそこは俺が育った場所でもあるし、今現在。栞と尊が育っている場所でもある。それにあの二人を悲しませたくはない。……いや、別にシスコンとかじゃないからな……

「ドウモ、才待タセシマシタ！」

入ってきたのは、ドナルド。両手いっぱい資料を抱えて入ってきた。

「ああ、悪かったな。……で、どうだ？」

「言ワレタ通り。グレーゾーンヲ大量ニ使イマシタガ、コノ通り、無事デシタ」

「いやそうじゃなくて、情報だ」

「oh, sorry. コレガ資料デス」

ドンツと大きな音をたててデスクの上に置かれる資料。厚さで言うとうと五十cmぐらいだろうか？

「徹夜だな……」

「徹夜デ終ワルンデスカ？」

「無理だな……」

俺は、小さく溜息を付く。

ただそれは苦ではなかった。

会社をかけた灯真との戦い。スリル満点だ……

俺は、そのまま顔のニヤケが止まらないまま、資料に手を伸ばしていった……

## 第四十六話 悔い（後書き）

どうも、作者です。

何かシリアス展開になってしまってますけど、如何したら良いんでしょうか？ まあ、自分はこう言うのも好きですし、一応納得しているつもり（自己満足）なので、書き直しとかはしないんですが、とにかく早く完結させるように頑張ります。

感想&評価待ってます

投稿頑張ります。。。

## 第四十七話 それぞれの考え

「兄様？ どうしたんですか」

「ん？ なんでもないよ……それより気分は良いのか？」

「うん！ だって、兄様が一緒なんだもん！ 元気いっぱいだよ」

そう言つて真希菜は、庭の中ほどにある池に駆けていく。どうやら、真希菜に注意されるほど顔を顰めていたらしい。

灯真さんに連れられて、成松の屋敷に来てから早一週間。真希菜の事も心配ではあるが、心の隅でお嬢様達の事が引つかかっている。今何をしているか？ ちゃんと生活出来ているか？ そんな事はばかり考えている俺がいる。

執事をしている毎日は楽しかった……が、それを断ち切つて真希菜達の所に来たはずだった。

ただ、そう思つていても。心の奥底にまでお嬢様達の根は伸びていたのだらう。

「…………ふう」

溜息しか出ない。

もちろん、凜や真希菜の前ではそんな表情を出す事はないが、一人の時は緊張が、解けてどうしても、溜息や欠伸が零れてしまう。

「大変ですね？」

「…………誰のせいでしょうね？」

聞き覚えのある声に穂澄は後ろを振り向く事無く、回答する。

「さて？ 私には心当たりはありませんが……？」

いつの間にか、後ろに立っていた灯真。

いつも着ていた執事服とは違い、ぴっしりとノリの効いたブランド物のスーツを纏っている。

「それにしても、私も疲れました」

同じ様に溜息を付いて、スーツに負けず劣らず高そうなネクタイを乱暴に緩める。

「まあ、あと少しで、竣夜の息の根を止める事が出来ますし、そうすれば、後はゆったりまったりと、成松のトップとしてやっていきますし。今は我慢ですね」

「物騒な事を、俺に聞かせないでください。それに、仕事の事を俺に話したら、そこから竣夜様に流れるとは考えないんですか？」

灯真に限ってそんなへマをするとは思えないが、あまりに無防備に言うので、一応聞いてみる。

「大丈夫ですよ。穂澄くんは成松の『力』が必要ですからね」

真希菜の方に目を向けつつ、灯真は含みを持った笑みを俺に見せる。

「『力』がいらなくなったら」



「『如何するんですか？』ですか？」

言いたい事を言われ、一瞬驚く。

「まあ、その時には全部終わっているでしょう」

再び含みを持った笑みを向けてくる灯真。

「兄様ーっ！」

と、池の向こうから真希菜の声が、俺の耳に届く。

「どつやら、喋りすぎたようですね。穂澄くんのお姫様が呼んでますよ」

灯真はそう言うと、再びネクタイを締めて笑顔のまま、屋敷の中に入っていった。

「……お姫様って古くね？」

灯真の後姿を見ながら、そう呟くが、もちろん灯真には聞こえていない。

「にーさまっ！」

「今行くよー！」

ここからでもわかるほど、頬を膨らませた真希菜の所へ俺は足を進めた……

『こちらとしても、そうしたい所なのですが……』

電話越しに、申し訳無さそうな声。

「そうですか、わかりました」

竣夜は声こそは穏やかだが、デスクの上に置かれている右手は強く握られ、指先は白くなっていた。

こちらが、何度頼んでも、返ってくるのは上辺だけの謝罪。つまり、ていよく断られていると言っわけだ。

ドナルドに資料を頼んで、それをツテにしつつ、こうして味方になる会社を探しているのだが、何処に電話をしても灯真の手が回っている。昔から櫻坂との関係が深かった会社までもが、こうして俺から距離を置いている。

竣夜は受話器を乱暴に置くときもたれに大きく寄り掛かり、溜息を一つ。

そして、左手の指で眉間をグツと押さえる。

「眠い……」

ここ何日か、ろくに寝ていない。

寝不足だと思いが鈍ると言うが、しかし仮眠を取っている暇があったら対抗策を練らなくてはならない。それだけ、灯真の計画は緻密にくみ上げられていた。

ただ、前にも思ったが、何処か少し違う……いや、違うと言うよ

り灯真らしくないのだ。

「いかに、俺と灯真の能力がかけ離れているかが、わかるな」

順位が付くような物事じゃ、竣夜は一度も灯真に勝った事がなかった。テストの点数しかり、持久走でのタイムしかり、告白された回数しかり……

「らしくない計画を打ち崩すのに、全力を尽くすって言うのも、あの意味惨めだよな……」

大体、いつもの竣夜だったら、出る者は追わずと言って灯真も穂澄もそのままポイツだった。

屋敷の資産管理は、ドナルドに任せられるし、栞達の世話をする執事もまた雇えば良いだけの事だ。

なのに、こんなにも必死になっている自分に疑問を持つ竣夜。

「まあ、あんなに楽しそうな顔をしている二人も珍しいから……」

一見華やかそうな風に見える櫻坂の家系だが、本家やら、分家やらで揉めた時期があった。

その為、そのストレスのはけ口と言わんばかりにまだ幼かった栞達は親戚中から疎外され、肩身の狭い生活をしていた。二人の親は海外にいて、影響も少ないせいかな、その疎外も日に日にエスカレートしていた。

「だから、あんな捻くれた奴になったんだよな……特に、栞は」

二人は自分を守った。

栞は、誰も引寄せない様に変人に扮して周りを小ばかにして  
尊は、誰も怒らせない様に声を窄めて、周りの声に頷いていた

「ほんと、あの二人を立ち直らせたのは穂澄のお陰だな」

気まぐれの買物。

人員が少なくなり、気まぐれで目に止まった青年を執事にした。  
それが、青年に出会う前 両極端で歪んでいた二人を少しずつ、  
矯正してくれた。

「ドナルドー？」

つつい、間の抜けた声で、ドアの向こう側に待機しているはず  
のボディガードに声をかけてしまう。

「ハイ？」

「もう一踏ん張りだ。俺は、ちょっと出掛けてくるから、少しの間  
頼んだぞ」

「ハイ、ワカリマシタ」

ドナルドに、そう言ってネクタイを締めなおす。相変わらず、一度  
スイッチが入ると顔のニヤケが止まらない。

「俺だって、この何年間もずっと立ちぼうけていた訳じゃない」

俺だって、前に進んでいるはず。

それを、灯真に勝つことで証明できるのなら、穂澄を取り戻して、  
栞達の笑顔を取り戻せるのなら。

「さてと、お仕事お仕事っ！」

極秘、と判子の打たれた書類を鞆に詰め込んで、竣夜はオフィス  
を後にした。

第四十七話 それぞれの考え（後書き）

ちょっと、遅れましたが、投稿頑張ります。。。

## 第四十八話 逆転の一手

「さて、気持ちの整理はついたか？」

返ってくる返答はわかりきっているが、一応聞く。

「……………殺すぞ？」

「変わりません」

……………尊にしてははつきりと俺の目を見て言った。それ程、穂澄は大事なのだろう。まあ、それぐらいでないで穂澄を取り戻す意味はないのだがな。

栞は栞で今までに無いほど冷たい目で見つめてくるが、それも穂澄の事を思っているからこそであり、『こんな時に不謹慎な事言うな』と言う感じの目だ。

昔は、『お兄ちゃんお兄ちゃん！』と懐いていたのに……………

俺は、何故か熱くなつた眉間を押さえる。

「冗談だ、冗談」

首を絞めたネクタイを緩めて、上着を脱ぐ。

ここ最近あつていなかった2人はいつの間にか大人びている雰囲気  
気が漂っていた。

……………やつれた。とも言うのかもしれないが、何処か、穂澄と会う  
前、穂澄と過ごしていた間とはまた違った様子だった。

「……………なんで来たの？」

「おいおい、お兄ちゃんが妹に会いに来るのに理由なんて」

「とぼけないでください」

……これが、反抗期なのか？ お兄ちゃん泣いちゃうぞ？ 言葉もなんか棘があると言つか、毒針状態だ。

もしかしたら、穂澄を取り戻したら2人の記憶から俺は無くなるんじゃないのか？

「ああ、悪かった。理由はちゃんとあるよ」

もちろん、しっかりとした理由無しに此処にくる必要はない。灯真に勝つためには、俺としてはもう1つばかり、背中を押してもらった。その材料が必要だった。

その材料を確かめる為に、2人に会いに来た。

「お前ら、俺と穂澄………どっちが大事だ？」

流石に真面目な顔で聞く俺に、2人は眉を顰めて口を紡ぐ。良かった。即答されなくて……

「……… 竣夜兄様は、大事。だけど、今は穂澄の方が大事」

「兄様は、私たちを大事にしてくれてますけど………私も穂澄さんが………」

まさに、娘を嫁にやる父親の気分とはこう言う感じなのだろうか？ ただ、その一言が聞けて大分。いや、十分に足枷が外れて、決心がついた。



「良いか？　これから、俺は成松　いや、灯真を潰す。ただ、無傷じゃ無理だ。相打ちになるかもしれないし、俺が大負けするかもしれない……ただ」

社長代行と言う、仕事はもう十分に達成されている。

「穂澄はちゃんと取り返してやる。それだけだ」

俺は、席を立つ。

2人は、俺が何を言っているのか。まるで検討が付かないようだが、それで良い。物分りが良い妹よりもわがままで、ちよつとぐらい手の掛かる妹の方が可愛い。

それに

それに、何か言われたら、また足枷がくっ付きちまう。  
立ち上がり、俺は振り向かない。

2人の顔を見ないまま、邸を後にした……

「ああ、そうだ。その社長を説得しろ。多少無理をしても良い」

そう言って久留間龍介は受話器を切る。

デスクの上に投げ出した足を引っ込めて、革製の椅子に座りなおす。

手元にあつたりストの社名の所に斜線をを引いた。

「これで、櫻坂に肩入れする会社は0。やっと、成松がトップに立

てるわけか……」

タバコに火をつけ何も存在しない宙に向けて煙を吹く。

「これで、やっとの事で灯真新社長になるわけだ」

タバコを強く噛む。

昔から、灯真の事は嫌いだった。

どんなに努力しても昔から龍介は灯真の前に立つことは出来なかった。その度、龍介の親は言う『何で、灯真に勝てないんだ!』

頬を殴られ、腹を蹴られ、日ごろの鬱憤を全て龍介にぶつけて来る親。暴力を振られまいと、灯真に勝とうと努力する……が、それでも灯真は平然とした顔で俺の前に立っていた。

だが、灯真が勘当されて、龍介はトップに立ったはずだった。

「なのに!」

ダンツとデスクに握りこぶしをたたきつける。

怒りよりも痛みが素手にかかる。

なのに、灯真は当然の様に帰ってきた。そして、当然の如く副社長長の座についた。

それも、副社長と言うのは形式で、最初に与えられた仕事。櫻坂を潰す事で灯真はそのまま社長に就任するだろう。

しかも、それだけじゃなく、灯真は、龍介に会社の手回しを要求してきた。仕事を拒否すれば、当然龍介のキャリアは終わる。

そう。灯真はいつも龍介の前を歩いてきた。そして、いなくなっただと思つたら、屈辱と共に龍介の前に再び現れた。

「くそっ! 何で俺が……」

龍介はやり場のない怒りをデスクにぶつけるしかなかった。ただ、それは自分を傷つけるだけだと知りながら。

「入ってよろしいですか？」

「……っ!？」

何度も聞いた事のある声に龍介はタバコを落としそうになる。

そう、まさに声の主は灯真であった。

まるで、悪態をついたのを聞いていたかの様にタイミング良く現れる灯真に、苛立ちを覚えながらも、龍介は持っていたタバコを乱暴に灰皿に押し付ける。

「……ああ、入れ」

本当は今すぐにでも帰れと大声を出したい所だが、そんな事をして虚しい事は龍介自信が一番わかっていた。今にでも爆発しそうな感情を体内に押し込め、何とか言葉を絞り出す。

「失礼します」

入ってきたのはやはり、いつも通りの締まりのないニヤケ顔の灯真だった。スーツ姿から察するに、今まで何処かへ行っていたのであろう。

「何の用だ？」

「いえいえ、ただね。久留間さんの顔が見たくなっただけですよ」

その、何もかもお見通しと言っ感じの笑みが一番むかつくだよ。

「どうせ、目当てはこれだろ？」

デスクの上に置かれたリストに手を置く龍介。灯真も一瞬だけそのリストに目を落とし、そして笑う。

「流石、久留間さんですね。私が頼んだ仕事を2日で片付けるとは」

「まあな、櫻坂と縁の深い古株の会社ばかりだったからな」

コイツの魂胆は見え見えだ。

もし、リストの仕事が終わっていないければ、俺は無能呼ばわりして、出来ていれば自分の利益に繋がる。

自分は安全な所で笑っている訳だ。胸糞悪い。

「仕事終わりにしては、眉間に皺が寄っていますね？ 怒っていますか？」

「ああ、どうやらお前のニヤケ顔は俺を激しく苛立たせるようだ」

ネクタイを取り払い目の前に立っている灯馬に嫌味をぶつけるが、それも虚しいだけであった。灯馬はそう言われる事をわかっていた様に、頷き。一言、すみませんと言っただけであった。その表情が更に龍介を苛立たせる。

「用があつたんじゃないのか？ ないんだつたら今すぐに出ていけ！」

龍介が声を張り上げると、灯馬は真面目な顔をする。

「だから、お前は俺に勝てないんだよ」

「なんだと!？」

灯馬の一言に龍介は椅子から立ち上がり今にでも飛び掛かりそんな剣幕で灯馬を睨む。ただ、灯馬はそんな事は気にせず、話を続ける。

「用件はそのリストの中で不正に手を出している会社を洗い出しておいてくれ」

「不正だと?」

何故そんな事を言うのか? 今の時代大抵の有名企業は不正に手を出している。見えていないだけで、今の不景気に会社を成り立たせる為には仕方ない事だ。

「それでは、頼みましたよ」

灯馬はそれだけ言うと普段の締まりのない顔にもどり、部屋を後にした。

竣夜は畳が広がる部屋で、正座して待っていた。出されたお茶は既に冷え切っているほど、時間が経っていたがそれでも未だに、竣夜が待つ相手は現れない。

「すまないね、待たせてしまった」

そう言って入ってきたのは、部屋の雰囲気によくあった和服を着た初老の男性。

「いえ、急に押しかけたのは私ですので、こちらこそお時間をとっていただき、ありがとうございます」

竣夜は深々と頭を下げて、上座に座った男性へ敬意を示す。

「それで、話は？」

ただ、初老の男性の表情は入って来た時とは少し変わり、厳しい表情をしていた。

そんな事も知りながら、竣夜は顔を上げ、不敵に笑う。

「ええ、ちょっと。逆転の一手を打とうと思っ……」

## 第四十九話 大好き・警察

「調子はどうだい？」

昨日から再び熱を出して寝込んでしまった真希菜に穂澄は付きつきりで看病をしていた。最近は睡眠もろくにとつておらず、眼の下には大きな隈も出来てしまっている。正直言って今の状態は、誰が見ても悪循環だった。

「うん、だいぶ良くなってきたよ」

少し汗ばんでいる真希菜のおでこを優しく撫でてやると、少しの間だけ微笑んで、手を握ってきた。

ただ、熱があるはずのその手は、ひんやりとして冷たかった。穂澄の顔が不安に歪む。

「大丈夫か？ 真希菜。寒くないか」

「うん、兄様がいてくれるから平気だよ」

灯真からもらっている薬も少しずつではあるが、効いてきている。前の様に穂澄に抱きついたり、庭を駆け回ったりは出来ないが、手を貸せば起き上がれるし、食事も前よりは喉を通るようになってきている。

「穂澄、ちよつと……」

後ろから声を掛けられて振り向くと、障子を少しあけて覗き込んでいる凜の姿があった。

「ちょっと、出てくるね。真希菜」

真希菜は小さく頷いた事を確認すると、握っていた手を優しく布団の中にしまつて、障子の外に出る。

凜は相変らず、ぴつしりとしたレディーススーツを着て、髪を後ろに結んでいた。表情は前とは違い。今は少し余裕が出てきた様だ。

「仕事は良いの？ 姉さん」

凜は、大手企業の出世頭だ。だからこそ、穂澄の借金を工面する為に大金も用意できたのだが、出世頭で期待が大きい分、仕事の量も他の人よりは多い。

「切り上げてきたから大丈夫よ。それより、本当に良いの？」

「……何が？」

凜が言いたい事はわかっていたが、それでも肯定する事は無く。話をはぐらかす。

そんな穂澄に凜は眉を顰めるが、小さく溜息を吐くと、言葉を続ける。

「……真希菜は良くなってきた。決して軽い病気ではないけど、薬による症状の遅延は見えているわ。まだまだお金は必要だけど、私も稼いでるし、癩<sup>かた</sup>だけどあの人に工面を頼む事も出来るわ。最近繁盛しているみたいだし……」

親指の爪を軽く噛む凜。

あの人とは、架<sup>かな</sup>捺<sup>な</sup>の事だろう。下校の時以来会っていないが、灯



真が時々、繁盛していると、報告をしてくれているので、状況はわかっている。

凜は、架捺が穂澄に借金を押し付けてからと言うもの、凜が架捺の事を父と言う事は無くなった。それは、穂澄の事を思っているためであり、自分が穂澄を助けられなかった事を悔やんでの事である。

「どうということ？」

「だから、櫻坂の所に戻っても良いのよ？ 私も、有給が余ってるし、それでも足りなければ、あの人にも頼むし……」

「姉さんは、櫻坂が嫌いじゃなかった？」

穂澄は相変わらず、無表情である。

「……確かに、嫌いよ？ 今でも大嫌い。それもで、穂澄の悲しい顔を見ている方が そんな穂澄の顔を見て、知らない顔をしている自分の方が大嫌いよ」

凜は穂澄の胸倉を掴む。

「何で、執事服を着ているの？ 穂澄が着ていた私服は私が渡したはずよね？ 何着もある服から何で毎日朝着て、夜洗ってを繰り返してるの？」

「……それは？」

真っ直ぐ穂澄を見つめる凜に対して、穂澄は思わず目を逸らしてしまっ。

「目を逸らさないで、今の穂澄。私は嫌いよ。そんなんじゃ、真希菜を看病させるわけにはいかない」

凜は乱暴に穂澄の胸倉から手を離すと、突き飛ばす。

もちろん、そんな事は予想をしていない穂澄は、大きくバランスを崩す。

「ね、姉さん!？」

「自分で考えて動きなさい。たまには、自己中心的に動いて、そして、決めなさい」

凜は、穂澄の目を見ること無く。そのまま障子を閉じてしまった

……

「そんなこと言ってもね、私としても余裕はないのですよ」

「しかし……竣夜君。これは……」

「言わなくてもわかっていきます。ただ、私は誠意を見せて欲しいだけ。私を選ぶか？ 成松を選ぶか？」

革の椅子にどっかりと座っている竣夜。その顔はいつもと違い厳しい。

「そ、それは」

竣夜と向き合っているのは一見気の強そうな髭を蓄えている男。ただ、今は汗を額に滲ませ、弱っているように見える。

「……あなたには、二択しかありません。私をとって、時間を稼ぐか？ 成松をとって、終わらせるか？」

竣夜は、そう言つと座っていた椅子から立ち上がり、上から見下すように、もう一度言つ。

「忘れないでおいってください。私はもう覚悟は決まっています。ゆるぐ事はないので、悪しからず」

そう言つと、竣夜は二人しかいなかった部屋を後にした。

「灯真の動向は？」

「無シデス。マツタク、動キマセン」

ネクタイを素早く外して投げつける様にDonaldへ放ると、竣夜はうつ伏せの状態で倒れこむ様に椅子にもたれ掛かる。疲労が溜まっているのだろう。頭をボリボリと搔いて、いつもの余裕と品のある仕草は微塵も感じられない。

あいつが気付いてないわけないし、俺が仕上げに入るのを待

っているのか、それとも成功しない自身があるのか？ ……だめだ、眠い。頭が回らん。栞と尊に何か励まされたい……それで俺は24時間働ける……

のっそりと身体を起こして、デスクの上に置いてあるリストの一つに斜線を引く。

「これで、下準備は終わったな。あとはどうなるかは運次第だあゝ、俺だけど、栞と尊いる？」

デスクの電話で誰かに連絡を取る。

『はい、応接室で待たせていただいております』

「んじゃ、連れて来て。それで俺を癒してくれ……」

『？ わかりました。とり合えず行きます』

電話を切つてすぐ後、三人の少女が入ってきた。入ってきたのは、栞、尊。そして水穂である。

「……死ね」

「いきなり酷くない!？」

入ってきて第一声が、竣夜の心に突き刺さり涙目になってしまう

竣夜。實際目を向けるとそこには敵意むき出しの栞と困惑している尊と水穂がいた。

「……何したの？ 穂澄はどうしたの？」

「いや、多分あと少しで終わるから……いろいろ」

「いろいろって何なの？ 竣夜兄様……なんで私たちに何も話してくれないの？」

竣夜とは違った意味で涙目になっている尊は、竣夜を問い詰めようとするが、竣夜は溜息を付くだけで何も言わない。言ってくれない。

「俺は、栞も尊も大好きだ」

「……きもい」

「……いや、そこはちゃんと聞いてくれると嬉しいんだけどな？」

栞の一言で話の腰が折れるが、構わず話を続ける竣夜。

「大好きだから、何でも出来る。俺はね」

「だから！ それは、どう言う」

「失礼シマス竣夜様」

三人が入ってきたときに入れ替わりに出て行った دونالد が話を

遮り入ってきた。額には汗が滲み、息も切れている。それだけで、何か重大な事が起きたことがわかった。

「何？」

しかし、竣夜に慌てた様子はない。

「『相手』側ノ社長全員ガ、辞職シマシタ」

「……」

しかし、竣夜は何も言わない。

「ソレト、下ニ警察ガ来テマス」

「……警察？」

栞が、明らかにわかる様に、大きく眉を顰める。尊も水穂も同様だ。何が起きているかわからなかった。

ただ、整然としている竣夜の姿を見て、明らかに自体を把握しているのは竣夜だという事は誰もがわかった。

「何をしたの？ 竣夜兄様」

訝しげな顔を向ける尊。ただ、竣夜は笑っているだけ……

「さーね？ んじゃ、ばいばい」

「え？」

竣夜は背広を脱ぐと、部屋を後にしようとする。

「……ちょっと待て！」

栞が竣夜の手を掴もうとするが、竣夜はそれを難無くかわし、栞の手は宙を切る。

その栞を竣夜は一瞥するが、すぐにドアに手を掛けて出て行く。

「……ちょっと……待ちなさいよ！」

だが、ドアは開かれる事はない。

竣夜は、そのまま出て行った……

## 五十話 終わり・始まり

『先日逮捕された櫻坂エレクトロニツクの櫻坂竣夜元社長は、脅迫の事実は認めたものの未だにその主旨については沈黙を守ったままです』

俺はデスクに肘を付きネクタイの結び目を緩める。なんだか最近ネクタイを緩めてばかりいるような気がする。

ただ理由はわかつている。それだけネクタイが息苦しいのだろう。

『櫻坂社長は、現在わかっているだけでも7社の社長に対し、弱みを握り脅迫した疑いが掛けられています。営利目的との声もありますが、櫻坂の名は地に落ちたも同然です』

ニュースでは、淡々とした表情で原稿が読み上げられている。灯真は呆けたような目でその画面を見つめ、ふと横に目を流す。

「穂澄くん？」

いつからいたのだろうか。最近元気がなかった穂澄であるが、今日は顔に影が差し込み、一層暗い印象を受ける。

それにしても、気付かなかつたとは失態である。灯真は前かがみにだらしなくなっていた姿勢を直し、気付かないくらい。少しだけ唇を噛み締める。

注意力が散漫になっていた事は望ましくない。

だから、竣夜を警察に取られてしまった。

「灯真さん。竣夜様が捕まったそうですね」



「ええ、脅迫とは。虫も殺せないような人のはずですが、人は変わるものなのですね」

一瞬。

伏目がちだった穂澄の目線が上がり、目が合う。その目は静かに燃えているようであった。

どうやら、散漫にもほどがあるようですね。

静かにそう思うと、穂澄の口が少しだけ開いた。

「辞められた社長の方々は、取引相手でしょうか？」 大丈夫” なんですか」

まあ、そう思うだろう。社長が変われば方針も変わる。それが優秀な企業であれば尚更だ。

「大丈夫です。社長が変わったとしても、私は専務にもその会社の理事にもつながりがありますから、取引は撤回される事はありません。妹さんのお金はしっかりと差し上げますよ」

「っ」

「失礼します」

穂澄が何か言おうとしたが、ノックとほぼ同時に入ってきた和服の女性によって阻まれる。

「何ですか？」

「はい、灯真様に来客が……」

「？ 予定はありませんが……」

スケジュールは全て頭に入っているが、一応スケジュール帳を取り出して確認する。

確かに予定はない。

と、何故か女性がバツの悪そうな顔をする。

「何ですか？」

それを汲み取って話しかけるが、女性はまだ何か言いづらそうにしていた。

「あの……『早くしないと縛って引きずる』……と言えは誰かわかると」

「……………」

思わず穂澄と目を合わせてしまう。まさか自分たちから足を運んでくるとは思わなかった。スケジュール帳を片付けて椅子から立ち上がる。

「……………わかりました。さて、穂澄くんもいきましょうか？ 多分会いたがっていますよ？」

自分でも顔がにやけているのがわかって、少し気持ち悪かった。

ズズズーと私は不味そうにお茶を啜っている。態々遠出をして来たと思えばこの部屋に通され、お茶を出され、早20分。一向に目的の相手は現れる気配はない。

「葉。音をたてないの」

「……蕎麦を食べる時は啜るのがマナー」

「それはお茶ですよ」

二人して私を責める。

おもしろくない。何事もうまくいかず、穂澄も竣夜兄様いなくなってしまった。私の思うとおりにならない。

「……おもしろくないおもしろくない」

「何ブツブツ言ってるの？ そろそろ灯真さんが来るんだからしっかりしてよ」

そう。私は穂澄を取り戻しに来たんだ。

つまらなくなつたのは、穂澄がいなくなつてからだ。執事のくせに私の生活に入り込んで……帰ったら全裸で縛って鞭打ちだ。水穂にも手伝わせる。

私が、そんな事を考えて水穂をチラツと見ると、その視線に気付いたのか。水穂が顔をこつちに向けて、不思議そうな顔をする。

「お茶のおかわりですか？」

「……違う」

今の話し方穂澄に似てるし……水穂まで穂澄に侵食されたか。そんな事を考えていると、外の廊下を歩いてくる音が聞こえて、私はお茶を置く。

「失礼します」

「……失礼します」

入ってきたのは、灯真と

「穂澄さん！」

尊は、思わず声を上げて立ち上がりそうになるが、私が服の裾を握った事に気付くと、渋々座りなおした。

穂澄は穂澄で、尊がそんな反応をするものだから、猫騙しを喰らったような素っ頓狂な顔をしている。あらかた、罵倒されると思っていたんだらう。まあ、帰ったら罵倒だけじゃないけど。

「お久しぶりです。元気でしたか？」

灯真は、私たちの正面に座り、何食わぬ顔で笑いかける。その笑顔がいつも通りで、本当に何事も無かったように変わってなかったのが、ムカつく。

「……穂澄を取り返しにきた。返せ」

「直球ですね。ですが、穂澄くんは櫻坂には帰りたくないようです

「が？ ねえ」

先ほどとは違う意味ありげな笑みを浮かべ、視線を隣に座っている穂澄に向ける。

「……穂澄」

「穂澄さん帰りましょう。お金なら何とかします」

「……っ。い、いえ、私は」

『自分で考えて動きなさい。たまには、自己中心的に動いて、そして、決めなさい』

「っ」

穂澄は何処か辛そうな顔をする。何かを思い出しているのだろうか。ただ、私にはそれを知る術はない。

「私は櫻坂に帰る気はありません」

「穂澄さん……」

今にも泣きそうな尊。水穂も少し厳しい顔をしている。  
……おもしろくない。

「……穂澄。帰るよ」

「い、いえ、だから私は」

「 黙れ」

「 えっ？」

おもしろくない。気分が悪くなってくる。

「 帰るの。穂澄の意思は関係ない。私が、つまんないから穂澄を家に連れて帰る」

私は立ち上がり、穂澄の手を掴む。

「 っ？ 穂澄。手が……」

穂澄の手首を握って初めてわかった。

穂澄の手首は明らかに痩せ細っていた。前から掴んでいたからわかる事なのだが、2まわりほど細くなっているのがわかる。

もう一ヶ月近く会っていないが、それにしてもこれは異常だった。

「 お嬢様……」

私が強く握って顔を顰めた事で、穂澄は私が、気付いた事がわかったのだろう。眉を歪め、バツの悪そうな。それでいて私を気遣うような目で見てくる。

「 そんな目で……私を見るなっ」

パンツと良い音が鳴ったと思ったら、無意識の内に穂澄を叩いていた事がわかった。

それでも、穂澄の顔は変わらない。どこか寂しそうな、そんな顔。

「お嬢様。すみません、私は期待に答えられる事は出来ません。私は最後まで、お嬢様達の執事でいたい。お金の為にお嬢様達と一緒にいたら、竣夜様にも顔向けが出来ません……」

「そんなの勝手な考えだよ！……それに、借金はどうするの？  
穂澄は私たちに借金が」

「それは、私が竣夜に小切手で既に渡しておきました」

とつて付けた様な言葉に、今まで黙っていた灯真が口を開く。

「っ！ じゃあ……じゃあ、学院は？ 折角頑張ってたのに、私たちに付き合って、その後も寝ないで勉強してたの知ってるんだよ！？」

「学院には、既に私の席はありません。それに、真希菜の事もありますし、学院を卒業しても高卒のままでは就職は難しいでしょうし、大学まではとても無理です」

「席ぐらいだったら、私が何とかする！ 尊だって水穂だって何でもする！」

「……菜」

尊は私になにか言おうとしたが、手を引っ込めて黙ってしまふ。ただ、いつもは気にならないが、追い詰められている今になってはその仕草は私の精神を逆なでした。

「何で尊は黙ってるの？」

「えっ？」

急に顔を上げて、私の方を見る。

その目……嫌いだ。

「穂澄が取られちゃうんだよ？ 私に言った事は嘘だったの？ 穂澄は渡さないって！ 嘘だったの!？」

私は尊に近寄り、無理矢理立たせる。

「お嬢様落ち着いてっ」

水穂が止めに入るが、私はその静止を振り払い、右手を振り上げた。

「おじょうさ っ」

「っ！ 穂澄くん!？」

灯真の驚いた顔に、私は振り上げた手を止め、後ろを向く。

「ほ、穂澄さん!」

私が振り向くより先に動いたのは、尊だった。私は目の前で何が起きているのか、わからなかった。

何で？

何で、穂澄が倒れてるの……？



私は、駆け寄る事も出来ずにその場に座り込んだ。

頭が痛い。と言うか体の節々が痛い。疲労が溜まっていたのだから、それとも、ただ単に躓いてこけただけなのだろうか？

『ちよつと、聞いているの？』

あれっ？ 姉さん？ 何で此処にいるの？ って言うか此処、何処？

『目を瞑って意識が落ちてるなら夢の中だろうね』

何でいるの？ えっ？ 死んだの姉さん？

いよいよ訳がわからなくなってきた。

『私言っただよね。今の穂澄嫌いだった』

……っ。そんな事言っただて、簡単に決断を変えられるわけないじゃない……

『……穂澄変わったよね？』

えっ？

『昔は鼻水垂らして、おねえちゃんおねえちゃんって、着いて来た』

のこ……』

何か、遠い目をして、こっちを見て来る。頼むから、そんな焦点が合っていない目で俺を見ないでくれ……

明らかに、5年10年単位で前だよな？ それ。

『……じゃあ、もっと簡単に考えてみて』

話を逸らすな

『いつもニヤニヤニコニコしてる何か変な男と、可愛い女の子3人と穂澄は、どっちとる？』

その言い方はずる過ぎるだろ。明らかに灯真さんが変質者級に悪者っぽくなってるし。

『今、考えた方が穂澄の気持ちだよ』

いや、してやったり見たいな顔してるけど、明らかに誘導だよな？ そのドヤ顔をやめてくれ。

「穂澄さんっ！」

「っ！ あれお嬢様？」

目の前には尊がいた。さきほどいた明らかにテンションのおかし

い姉の姿はどこにもない。

『今、考えたのが穂澄の気持ちだよ』

姉さんの言葉が、俺の心に突き刺さる。

「急に倒れた時はびっくりしましたよ。どうやら過労のようですか  
らゆっくり休んでいてください」

声が出た方を向くと灯真が、やや疲れたよな、呆れたようなそんな顔をして、俺の方を見ていた。

ニヤニヤニコニコした、何か変な男……駄目だ。嘔きそうになる

……

「あの、栞お嬢様は？」

「栞は、外にいるけど……」

歯切れの悪い言葉、どうやら愛想をつかされたのだろうか。それはそれで、また悲しいな。

「穂澄さんが倒れたのは自分のせいだって、言って泣いちゃって…

……

「えっ？」

そんな事ないのに……知らない内にまた悲しませてしまった様だ。  
俺の胸の辺りがズキツと痛んだ気がした。

俺は寝かされていたベッドから立ち上がる。っと、まだちょっと  
ふらつくな……

障子を開け、縁側の方へ出ると、すぐ近くに、顔を伏せて縁側に足を投げ出している菜の姿があった。

「お嬢様？」

「……？ つ！？」

誰かと思って首を上げたお嬢様は俺を見た瞬間投げ出していた足で立ち上がり、離れようとす。

「待ってください つ！？」

躓いて廊下に頭をぶつけてしまう。

痛え……

「つ！ 穂澄！」

菜は、ドタドタと足音を立てて穂澄に近寄り、倒れている穂澄の顔を覗き込んでくる。

「掴まえましたよ。お嬢様っ」

「！？ 穂澄、わざと転んだの？」

いえ、素です。

覗きこんできた菜の手をグッと掴み近くに寄せる。

菜の顔が、ボスツと自分の胸におさまり、穂澄は、一息を付く。

「……………」

暫くの沈黙。

穂澄の胸の中で栞がギュツと胸元の執事服を掴んだ……気がした。

「何で、着替えてないの？」

「服……ですか？」

「部屋に入ってきた時。穂澄が執事服を着てたの見て、私も尊も喜んでんだよ？ 穂澄がまだ執事でいてくれたって……」

握られている部分に力が入るのがわかった。

「ずっと、一緒に居てよ……ねえ、穂澄？」

「私は」

『今、考えた方が穂澄の気持ちだよ』

つ。本当にそれで良いの？ 自分に我俣で？

『自分で考えて動きなさい。たまには、自己中心的に動いて、そして、決めなさい』

つ。大切だから、守りたい。でも、離れる事は守る事なの？

「私は……いや、俺はお嬢様達と一緒に居たい……離れたくない」

「えっ？」

胸の中で、栞が思わず変な声をあげる。

「お2人ともずっと好きでした。明るい栞お嬢様。優しい尊お嬢様。ずっと、ずっと前から……もしかしたら、一目惚れだったかもしれない」

自然と涙が零れる。嗚咽が止まらない。見つとも無い姿を見られたくないはずなのに、それでも止まる事はない。

「俺は、櫻坂に戻ります……」

離れる事が、守る事に繋がるのかな？

違うよね。それは悪い自己満足だ。

いつも通り、俺は執事服を身につけ、お嬢様達と学院へと続く道を歩いていた。

二人とも前より楽しそうで、後ろから付いてきている水穂も、前より笑顔が増えた気がする。

あの後、俺は灯真さんに櫻坂に戻る事を言った。

なんと言われるか、わからず。もし、真希菜を盾にされたらどうするかなど考えていたが、答えは呆気なく。

「そうですか、しかたありませんね」

その後は、怖いぐらいに順調に進んだ。肩代わりしている治療費は出世払いと言いつことでチャラになり、真希奈もしっかりとした治療を受けている。

郵送してあったはずの退学届けは竣夜様が、破り捨てていたらしく休学の扱いになっていたし、欠席が多いはずなのに、普通クラスへの移動もなし。

とにかく、毎日が怖いぐらいに進んでいた。

「……お2人ともずっと好きでした（声真似）」

「えー穂澄さんの声はそんなじゃないよ!」

「お願いですからやめてください……」

ちなみにあの会話は後ろで尊もしっかり聞いていたらしい。後で顔から火が出るかと思うぐらい話題に持ち上がった。

「もしかしたら、一目惚れだったかもしれない（声真似）」

「尊お嬢様もやめてください!」

ほらっ! 何か、周りの目が痛い! 痛いよ!?

「ほすみい……」

どうやら後ろで怒っていらっしやる方メイドさんが俺の肩をグッと掴む。

「あんだ、そう言えば私に随分恥じかかせたわよね？」

あんたって……瑞穂、俺はお前より2つ先輩なんだぞ？ もっと敬つてもバチはあたらないぞ？

そんな困った様な顔をしていると、栞と目が合う。

「……ヤバツ、妊娠した」

「嘘ですね」

「……！」

何か思いついた様に、言ったと思えば……間髪入れずに突っ込むと意外な顔をされる。そんなに突っ込むの久しぶりだったかな？

と、何やら栞が、尊に耳打ちをし始めた。

今度は、どんな恥ずかしい事をしてくるのやら……

そう思っていると、2人は大きく足を伸ばし、先に走る。

「えっ？ ちょっと！」

慌てて追いかけてようとしたら、すぐに2人はこちらを向いた

「「おかえり、私の執事さん！」」



## 五十話 終わり・始まり（後書き）

はい、終わり。はい、終了です。

長かった執事になる50の方法。

気が付けば二年経ってます。はい、遅すぎですね、すみません。  
とり合えず完結して、一言。

もう一度最初から書き直したい……

誤字脱字・表現・話のつながり…… e t c

話せばいろいろと出てくる問題ですが、まあとり合えずこうして  
終わった事を喜びます。ええ、飛び上がりますともう。

でわでわ、最後まで読んでくださった方（いるのでしょうか？）

ありがとうございます！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8934d/>

---

執事になる50の方法

2010年10月14日16時03分発行